

三乎遺蹟

南小路地区編

福岡県文化財調査報告書

第69集

1985

福岡県教育委員会

三 雲 遺 跡

南 小 路 地 区 編



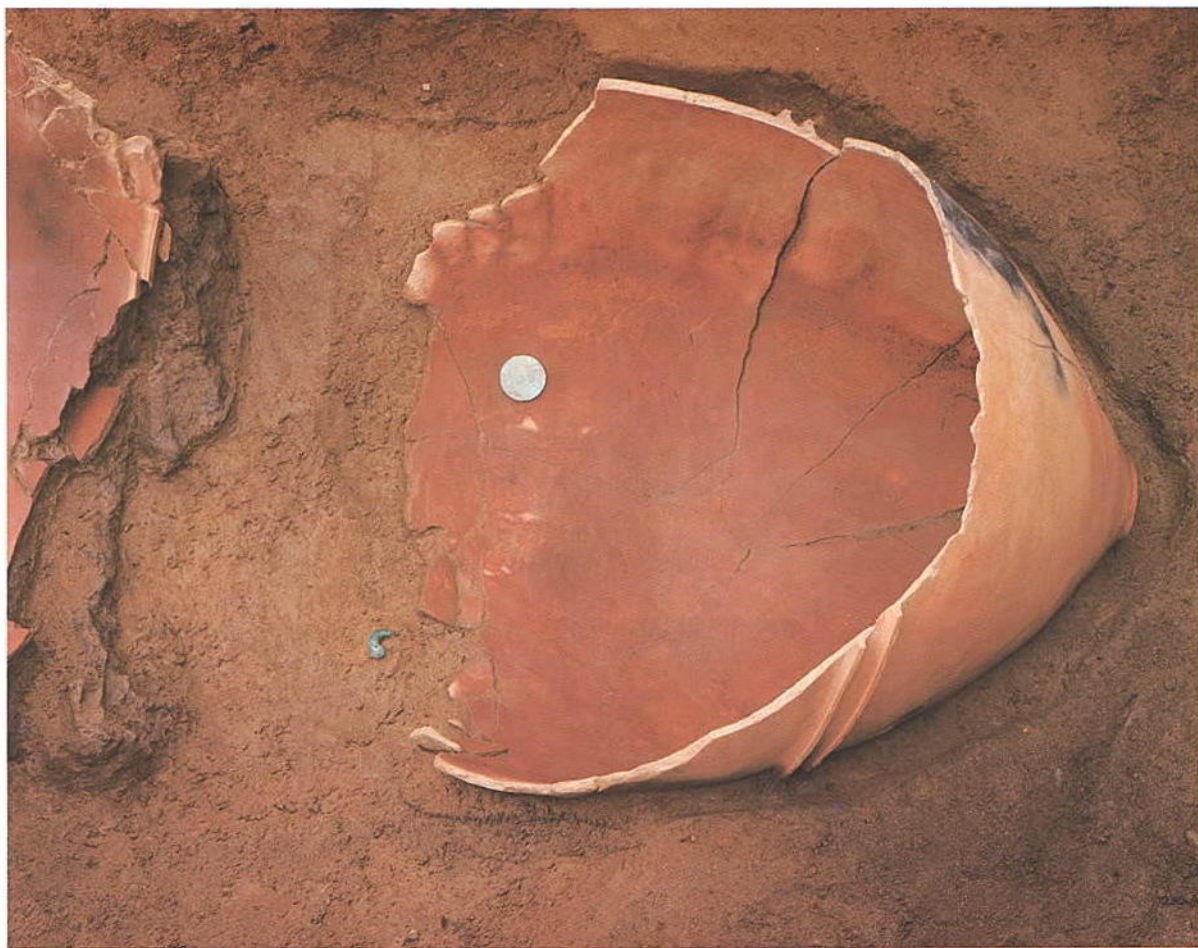
1



2

1 三雲を中心とした糸島平野

2 三雲南小路2号甕棺墓



南小路2号甕棺の鏡と勾玉出土状態



2 上甕



1 2号甕棺下甕



1



2



3

1 2号甕棺ガラス製垂飾（2倍） 2 1号甕棺重圏彩画鏡 3 彩画人馬鏡（守屋美孝氏蔵）

序

この報告書は、糸島郡前原町三雲地区圃場整備事業に際し、前原町土地改良区と協議の結果、遺跡の大半を保存することができましたが、やむなく破壊される埋蔵文化財を福岡県教育委員会が昭和49年度から発掘調査した記録の一部であります。

今回の報告は、三雲南小路地区を昭和49・50年度に重要遺跡確認調査として実施した地点を主な内容とするもので、『三雲遺跡』Ⅳの別冊となるものです。

発掘調査の記録としては満足のいくものではありませんが、本報告書を通して三雲遺跡群についての御認識を承わりますとともに埋蔵文化財保護に対し、一層の御協力をいただければ幸いです。

なお、遺跡の保存と調査及び報告書作成に対して御協力いただいた前原町土地改良区と地元の方々をはじめ、前原町教育委員会や関係各位の御援助と御配慮により本書を発刊することができましたことを心から感謝申し上げます。

昭和60年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例 言

1. 本書は、昭和49年度から昭和57年度までに、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて、糸島郡前原町三雲地区圃場整備事業のために破壊される埋蔵文化財の重要遺跡確認調査をした5冊目の報告書である。
2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章	柳田康雄
第2章 第1節 1～3	柳田康雄
4	馬田弘稔・小池史哲
5	柳田康雄
第2節 1	立石雅文
2	小池史哲
第3節	小池史哲
第4節	馬田弘稔
第3章	馬淵久夫・平尾良光
第4章	柳田康雄
3. 遺物の整理のうち土器の復原は岩瀬正信の指導、その他の遺物は担当職員、土器の図は平田春美・荒武麗子、遺構図トレスは豊福弥生、遺物写真のうちカラーは九州歴史資料館の石丸洋主任技師が、その他は担当職員と平島美代子が撮影した。なお、写真の撮影、実測図の作成および製図は、図版目次・挿図目次に示すとおりである。
4. 巻頭図版は、「三雲遺跡」Ⅳ「福岡県文化財調査報告書」第65集に続くものである。
5. 本書に掲載した参考資料の写真撮影及び実測図の作成については、東京国立博物館・五島美術館・京都大学文学部考古学陳列館・京都国立博物館・泉屋博古館・守屋美孝氏・福岡市歴史資料館の御協力をいただいた。
6. 本書の編集は、柳田康雄が担当した。

本文目次

序

第1章 調査組織

1. 昭和49・50年度の発掘調査体制	1
2. 昭和59年度の体制	3

第2章 三雲南小路地区の遺構と遺物

第1節 南小路甕棺墓

1. はじめに	4
2. 1号甕棺墓	6
(1) 甕棺墓壙	6
(2) 甕棺	7
(3) 副葬品	8
① 銅剣・銅矛・銅戈	8
② 銅鏡	9
③ 金銅四葉座飾金具	24
④ ガラス璧	28
⑤ ガラス勾玉・ガラス管玉	30
⑥ その他の遺物	32
3. 2号甕棺墓	33
(1) 甕棺墓壙	33
(2) 遺物の出土状態	34
(3) 甕棺	35
(4) 副葬品	37
① 銅鏡	37
② ガラス製垂飾	48
③ 勾玉	50
4. 周辺遺構と遺物	51
(1) 祭祀溝	51

(2) 大溝	57
(3) 小溝	58
(4) 土壇	60
(5) その他の遺物	61
5. 小結	64
第2節 南小路Ⅰ-8の調査	65
1. 遺構	65
2. 遺物	67
第3節 南小路Ⅰ-9の調査	67
1. はじめに	67
2. 遺構と遺物	67
(1) 1号住居跡	67
(2) 2号住居跡	70
(3) 3号住居跡	71
(4) 4号住居跡	74
3. 小結	75
第4節 南小路Ⅱ-1・2地区	75
1. 概要	75
2. 遺物	77
第3章 科学的分析	
三雲遺跡出土青銅器・ガラス遺物の鉛同位体比	78
第4章 結語	82

図 版 目 次

巻頭図版	1	(1) 南小路1号甕棺墓出土重圏彩画鏡 (石丸洋撮影)	
		(2) 雷文鏡 (石丸撮影)	
		(3) ガラス勾玉 (石丸撮影)	
巻頭図版	2	1号甕棺墓出土金銅四葉座飾金具 (石丸撮影)	
巻頭図版	3	(1) 1号甕棺墓出土ガラス璧① (石丸撮影)	
		(2) 2号甕棺墓出土ガラス勾玉 (石丸撮影)	
巻頭図版	4	(1) 2号甕棺墓出土8連弧文「日光」銘鏡② (石丸撮影)	
		(2) 14連弧文「日光」銘鏡⑧ (石丸撮影)	
		(3) 2連弧文「昭明」銘鏡① (石丸撮影)	
		(4) ガラス製垂飾 (石丸撮影)	
		(5) 硬玉勾玉 (石丸撮影)	以上「三雲遺跡」Ⅳに掲載分
巻頭図版	5	(1) 三雲を中心とした糸島平野 (北澤廣撮影)	
		(2) 三雲南小路2号甕棺墓 (柳田康雄撮影)	
巻頭図版	6	南小路2号甕棺の鏡と勾玉出土状態 (柳田撮影)	
巻頭図版	7	(1) 2号甕棺下甕 (石丸撮影)	
		(2) 上甕 (石丸撮影)	
巻頭図版	8	(1) 2号甕棺出土ガラス製垂飾 (石丸撮影)	
		(2) 1号甕棺出土重圏彩画鏡 (石丸撮影)	
		(3) 守屋美孝氏蔵彩画人馬鏡 (柳田撮影)	
図 版	1	三雲遺跡中心部付近航空写真 (柳田康雄撮影)	4
図 版	2	南小路1・2号甕棺墓 (柳田撮影)	6
図 版	3	1 南小路1・2号甕棺墓 (柳田撮影)	6
		2 1号甕棺墓墳 (柳田撮影)	6
図 版	4	1 遺物出土状態 1 鏡片 (柳田撮影)	7
		2 ガラス管玉 (柳田撮影)	7
		3 ガラス璧 (柳田撮影)	7
図 版	5	「青柳種信資料」の銅剣・銅戈・銅矛・ガラス璧の図 (福岡市歴史資料館撮影)	8
図 版	6	有柄中細銅剣 (柳田撮影)	8
図 版	7	1 重圏彩画鏡 (石丸洋撮影)	9

	2	四乳雷文鏡 (石丸撮影).....	12
図版 8	3	連弧文「清白」銘鏡 出土鏡縁と聖福寺蔵鏡 (文化庁・柳田撮影)	12
図版 9	1	泉屋博古館蔵鏡 (鏡1) (柳田撮影).....	12
	2	三雲南小路出土聖福寺蔵鏡 (柳田撮影).....	12
図版 10	4	連弧文「清白」銘鏡② (柳田撮影).....	12
図版 11	5	連弧文「清白」銘鏡③ (柳田撮影).....	12
図版 12	1	立岩堀田35号甕棺出土鏡 (柳田撮影).....	14
	6	連弧文「清白」銘鏡④ (柳田撮影).....	14
図版 13	7	連弧文「清白」銘鏡⑤ (柳田撮影).....	14
	8	連弧文鏡⑥ (柳田撮影).....	18
	9	連弧文鏡⑦ (柳田撮影).....	18
図版 14	10	連弧文「清白」銘鏡⑧ (柳田撮影).....	19
	11	連弧文「清白」銘鏡⑨ (柳田撮影).....	19
	12	連弧文「清白」銘鏡⑩ (柳田撮影).....	19
	13	連弧文「清白」銘鏡⑪ (柳田撮影).....	19
	14	連弧文鏡⑫ (柳田撮影).....	19
図版 15	15	連弧文「清白」銘鏡⑬ (福岡市歴史資料館撮影).....	19
図版 16	16~18	連弧文鏡⑭~⑯ (柳田撮影).....	20
	19	重圈斜角雷文帯「精白」銘鏡 (柳田撮影).....	20
	20	重圈「清白」銘鏡① (柳田撮影).....	22
	21	重圈「清白」銘鏡② (柳田撮影).....	22
	22	「清白」銘鏡① (柳田撮影)	23
図版 17	23・24	「清白」銘鏡②・③ (柳田撮影)	23
	25	鏡縁① (柳田撮影).....	23
	26~32	鏡縁②~⑧ (柳田撮影).....	23
	33~34	鏡鈕①・② (柳田撮影).....	24
図版 18		1号甕棺出土金銅四葉座飾金具 (石丸撮影)	24
図版 19		金銅四葉座飾金具 (石丸撮影)	27
図版 20		1号甕棺出土ガラス壁 (石丸撮影)	28
図版 21		ガラス壁 (柳田撮影)	28
図版 22	1	ガラス壁 (柳田撮影)	30
	2	ガラス勾玉 (石丸撮影)	30
	3	ガラス管玉 (柳田撮影)	31

	4	ガラス小玉・鉄片（柳田撮影）	32
図版 23	1	ガラス壁（東京国立博物館蔵）（柳田撮影）	28
	2	ガラス壁（京都大学考古学陳列館蔵）（柳田撮影）	28
図版 24	1	南小路2号甕棺墓（柳田撮影）	33
	2	2号甕棺墓（柳田撮影）	33
図版 25		2号甕棺墓と墓壙（柳田撮影）	33
図版 26		2号甕棺墓の鏡と勾玉出土状態（柳田撮影）	34
図版 27		墓壙床面の鏡片出土状態（柳田撮影）	34
図版 28	1	2号甕棺の下甕（石丸撮影）	36
	2	上甕（石丸撮影）	35
図版 29		2号甕棺出土前漢鏡	
		1 星雲文鏡（石丸撮影）	41
		2～5 連弧文「昭明」銘鏡 （柳田・石丸撮影）	41
		6 重圈「昭明」銘鏡（柳田撮影）	43
図版 30	1	連弧文「昭明」銘鏡（東京国立博物館蔵）（柳田撮影）	41
	2	重圈「昭明」銘鏡（五島美術館蔵）（柳田撮影）	43
図版 31		連弧文「日光」銘鏡（柳田撮影）	43
図版 32		連弧文「日光」銘鏡（柳田撮影）	45
図版 33	1	ガラス製垂飾と硬玉勾玉（石丸撮影）	48
	2	ガラス製垂飾（石丸撮影）	48
	3	ガラス勾玉（石丸撮影）	50
図版 34	1	1・2号甕棺墓と祭祀溝（柳田撮影）	51
	2	祭祀溝（柳田撮影）	51
	3	祭祀溝・大溝・小溝（柳田撮影）	51
図版 35		祭祀溝と大溝出土土器（平島美代子撮影）	52
図版 36	1	南小路I-6土壙（柳田撮影）	60
	2	土器出土状態（柳田撮影）	60
	3	石組（柳田撮影）	60
図版 37	1	土壙出土土器（平島撮影）	61
	2	南小路I-6出土曾畑式土器（小池史哲撮影）	61
	3	I-6・7出土玉類（小池撮影）	64
図版 38	1	I-6・7出土石器（小池撮影）	63
	2	南小路I-8aトレンチ（柳田撮影）	65

	3	I-8 出土石器 (小池撮影)	67
図版 39	1	南小路 I-9 トレンチ (小池撮影)	67
	2	トレンチ (小池撮影)	67
	3	1~3号住居跡 (小池撮影)	70
	4	4号住居跡内土壙 (小池撮影)	71
図版 40	1	南小路 I-9 出土土器 (平島撮影)	67
	2	石器 (小池撮影)	71
	3	鉄器 (小池撮影)	71
	4	玉類 (小池撮影)	74

挿 図 目 次

第 1 図	三雲遺跡の位置と周辺主要遺跡 (国土地理院発行, 柳田康雄作製)	2
第 2 図	三雲遺跡地籍及び地区割図	折込
第 3 図	1号甕棺攪乱層の鏡片・管玉と茶碗片の混在出土状態 (柳田撮影)	3
第 4 図	I-6 昭和49年度調査区と北壁土層図 (柳田・小田雅文・川村博実測, 豊福弥生製図)	5
第 5 図	I-5~7 遺構配置図 (柳田・小田・川村・小林美孝実測, 豊福製図)	折込
第 6 図	南小路 1号甕棺墓壙実測図 (柳田・小田実測, 豊福製図)	折込
第 7 図	1号甕棺実測図 (柳田実測, 製図)	7
第 8 図	1号甕棺出土有柄中細銅剣実測図 (柳田実測, 製図)	折込
第 9 図	『柳園古器略考』の重圏文鏡と雷文鏡 (青柳種信図)	10
第 10 図	1 重圏彩画鏡, 2 四乳雷文鏡 (柳田拓本, 実測, 製図)	11
第 11 図	3 連弧文「清白」銘鏡① (柳田拓本, 実測, 製図)	折込
第 12 図	4 連弧文「清白」銘鏡② (柳田拓本, 実測, 製図)	13
第 13 図	5 連弧文「清白」銘鏡③ (柳田拓本, 実測, 製図)	14
第 14 図	6 連弧文「清白」銘鏡④と立岩35号甕棺出土鏡 (柳田拓本, 実測, 製図, 『立岩遺跡』)	15
第 15 図	7 連弧文「清白」銘鏡⑤ (柳田拓本, 実測, 製図)	16
第 16 図	8~14 連弧文「清白」銘鏡⑥~⑫ (柳田拓本)	17
第 17 図	8~18 連弧文「清白」銘鏡断面実測図 (柳田実測, 製図)	18

第 18 図	16~18 連弧文鏡①~③ (柳田拓本).....	20
第 19 図	19 重圈斜角雷文帯「精白」銘鏡 (柳田拓本, 実測, 製図, 『青柳種信資料』).....	折込
第 20 図	20 重圈「清白」銘鏡① (柳田拓本, 実測, 製図, 『青柳種信資料』).....	21
第 21 図	21 重圈「清白」銘鏡②, 22~24, 33・34号鏡 (柳田拓本, 実測, 製図).....	22
第 22 図	25~32 鏡縁①~⑧ (柳田実測, 製図).....	24
第 23 図	金銅四葉座飾金具実測図① (柳田実測, 製図)	25
第 24 図	金銅四葉座飾金具実測図② (柳田実測, 製図)	26
第 25 図	ガラス璧実測図 (柳田拓本, 実測, 製図)	29
第 26 図	1号甕棺出土ガラス勾玉実測図 (柳田実測, 製図)	31
第 27 図	鉄片, 銅製品実測図 (柳田実測, 製図)	32
第 28 図	南小路2号甕棺墓実測図 (柳田・小田実測, 豊福製図)	折込
第 29 図	2号甕棺実測図 (柳田実測, 豊福製図)	折込
第 30 図	1 星雲文鏡, 2 連弧文「昭明」銘鏡① (柳田拓本, 実測, 製図)	40
第 31 図	4 連弧文「昭明」銘鏡③, 6 重圈「昭明」銘鏡, 7~9 連弧文「日光」銘鏡①~③ (柳田拓本, 実測, 製図).....	42
第 32 図	10~14 連弧文「日光」銘鏡④~⑧ (柳田拓本, 実測, 製図).....	44
第 33 図	15~22 「日光」銘鏡⑨~⑯ (柳田拓本, 実測, 製図)	46
第 34 図	3・5 連弧文「昭明」銘鏡②・④ (柳田実測, 製図).....	47
第 35 図	2号甕棺出土装身具実測図 (柳田実測, 製図)	49
第 36 図	I-6・7 土層実測図 (宮崎貴夫・丸山康晴実測, 豊福製図)	51
第 37 図	祭祀溝下層出土土器実測図① (馬田弘稔・荒武麗子実測, 豊福製図)	52
第 38 図	祭祀溝下層出土土器実測図② (馬田・荒武実測, 豊福製図)	53
第 39 図	祭祀溝出土土器実測図③ (馬田・荒武実測, 豊福製図)	54
第 40 図	祭祀溝出土土器実測図④ (馬田・荒武実測, 豊福製図)	55
第 41 図	I-6・7 2・6層出土土器実測図 (馬田・荒武実測, 豊福製図)	56
第 42 図	大溝出土土器実測図 (馬田・荒武実測, 豊福製図)	57
第 43 図	小溝出土土器実測図 (馬田・荒武実測, 豊福製図)	58
第 44 図	I-6 土壇実測図 (馬田実測, 豊福製図)	59
第 45 図	土壇出土土器実測図 (馬田・荒武実測, 豊福製図)	60
第 46 図	I-6・7 出土縄文土器実測図 (小池史哲実測, 製図)	62
第 47 図	I-6・7 出土石器類実測図 (小池実測, 製図)	63
第 48 図	I-7 出土鉄器実測図 (小池実測, 製図)	63
第 49 図	I-6・7 出土玉類実測図 (小池実測, 製図)	64

第 50 図	I - 8 a 出土石器実測図（小池実測，製図）	65
第 51 図	I - 8 a, b トレンチ実測図（小田・小林実測，豊福製図）	66
第 52 図	I - 9 遺構配置図・北壁断面土層図（小池実測，豊福製図）	68
第 53 図	I - 9 出土土器実測図①（小池実測，製図）	69
第 54 図	I - 9 出土石器実測図（小池実測，製図）	71
第 55 図	I - 9 出土土器実測図②（小池実測，製図）	72
第 56 図	I - 9 出土鉄器実測図（小池実測，製図）	73
第 57 図	I - 9 出土玉類実測図（小池実測，製図）	73
第 58 図	II - 1・2 出土土器実測図（平田春美実測，豊福製図）	76
第 59 図	鉛同位対比プリント図（馬淵久夫作成，豊福製図）	80

表 目 次

表 1	1号甕棺出土ガラス管玉計測表	31
表 2	2号甕棺出土前漢鏡一覧表	38
表 3	2号甕棺出土ガラス勾玉一覧表	50
表 4	南小路 I - 6・7 出土玉類一覧表	64
表 5	南小路 I - 9 出土玉類一覧表	74
表 6	三雲遺跡鉛同位体比測定結果	79

第1章 調査組織

本報告書は、昭和49・50年度の重要遺跡確認調査を主体とすることから、当時の発掘調査体制を再録する。

1. 昭和49・50年度の発掘調査体制

福岡県教育委員会は、遺跡の重要性から発掘調査指導委員会を設置し、6人の委員を委嘱した。

委員長	原田大六	考古	日本考古学協会員
副委員長	坪井清足	同	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター長
委員	白木原和美	同	熊本大学教授
同	藤田等	同	静岡大学助教授
同	西谷正	同	九州大学助教授
同	永井昌文	解剖	九州大学教授

発掘調査の体制は次の通りである。

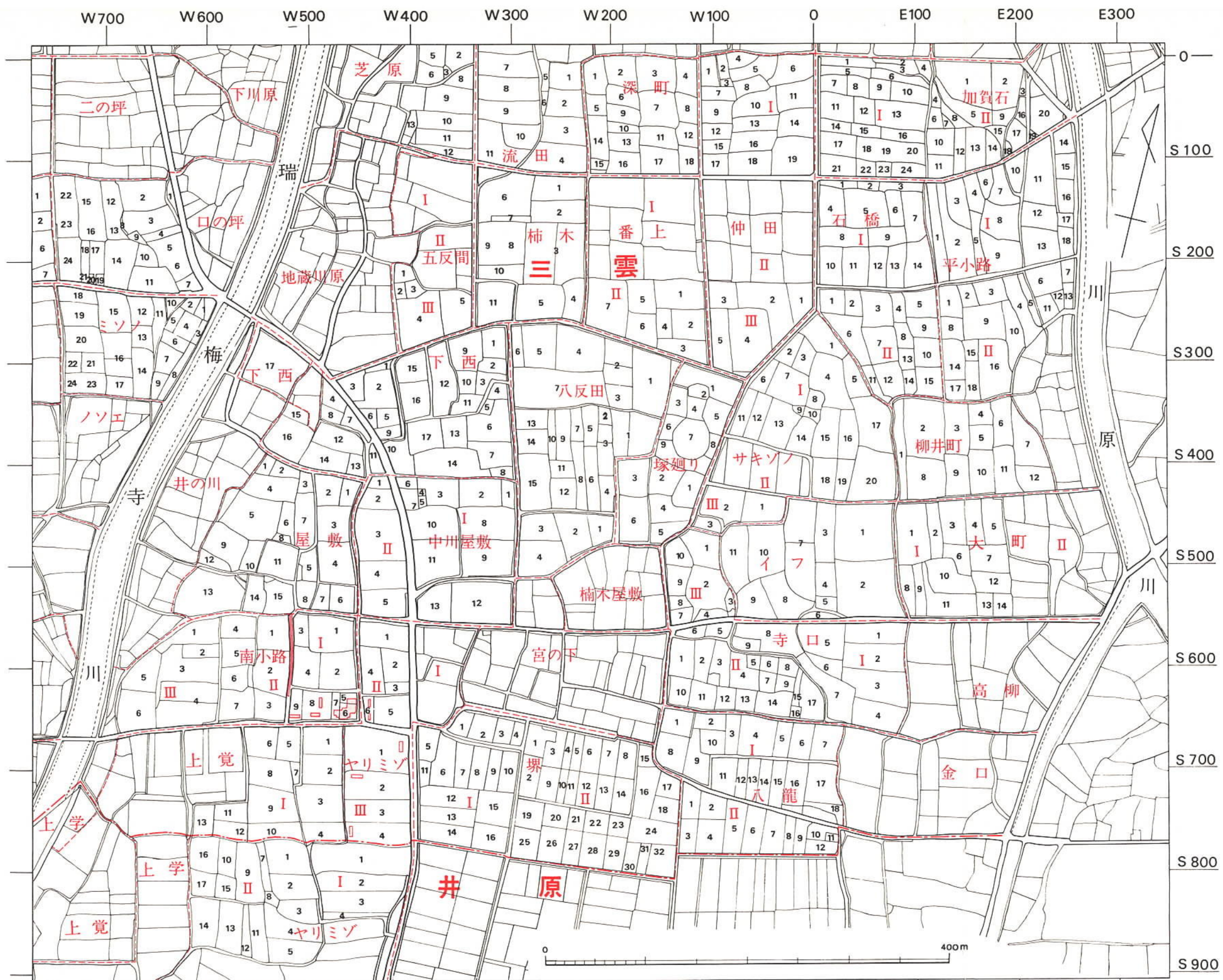
福岡県教育委員会

総括	教育長	森田 實
	管理部長	西村 太郎
	文化課長	藤井 功
	同課長補佐	平井 元治
	同	野上 保
	同	川崎 隆夫
庶務	庶務係長	前田 栄一
	主事	瀧 龍二・山本文和
発掘調査	調査係長	松岡 史
	技術主査	宮小路 賀宏
	技師	柳田 康雄・橋口 達也
		石山 勲・児玉 真一
		小池 史哲・浜田 信也
		森田 勉・馬田 弘稔



第 1 図 三雲遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000)

- | | | | | |
|--------------|------------|------------|-------------|---------|
| 1. 三雲南小路遺跡 | 2. 今山遺跡 | 3. 今宿横浜遺跡 | 4. 向原遺跡 | 5. 浦志遺跡 |
| 6. 志登支石墓群 | 7. 千里支石墓 | 8. 井田用会支石墓 | 9. 井田御子守支石墓 | |
| 10. 三雲加賀石支石墓 | 11. 石ヶ崎支石墓 | 12. 井原赤崎遺跡 | 13. 井原遺跡 | |



第 2 図 三雲遺跡地籍及び地区割図 (1/4,000)

上野精志・池辺元明
宮崎貴夫(囑託)

調査補助員として、小田雅文・丸山康晴・桑田和義・平島勇夫・高田一弘・三津井知廣・内田俊和・川村博・小林美孝・堀田秀茂・桜井康治・内藤康裕・松本修一の諸君が参加した。

2. 昭和59年度の体制

福岡県教育委員会

総括	教育長	友野隆
	教育次長	安倍徹
	管理部長	伊藤博之
	文化課長	前田栄一
	同課長補佐	中村一世
	同調査第1係長	宮小路賀宏
庶務	庶務係長	松尾満
	主任主事	川村喜一郎
報告書	技術主査	柳田康雄
	主任技師	馬田弘稔
	同	小池史哲

なお、調査当時に調査補助員として参加した立石雅文(旧姓小田)も執筆を担当した。



第3図 1号甕棺攪乱層の鏡片・管玉と茶碗片の混在出土状態

第2章 三雲南小路地区の遺構と遺物

第1節 南小路甕棺墓

1 はじめに

南小路地区の発掘区設定は、文政5年発見の甕棺墓出土推定地を第1候補にした。I-6地区の片隅に立てられていた南小路遺跡の説明板は、原田大六氏の指導によって前原町教育委員会が立てたものであるが、この地を推定したのは中山平次郎であった。中山平次郎は、青柳種信の「筑前國怡土郡三雲村所掘出古器圖考」に「南小路」の地名が見え、同著の「筑前國續風土記拾遺」にその地点を「産神細石社の西半町田間」とあるのを参考にして、現地を再三訪れて推定していた。

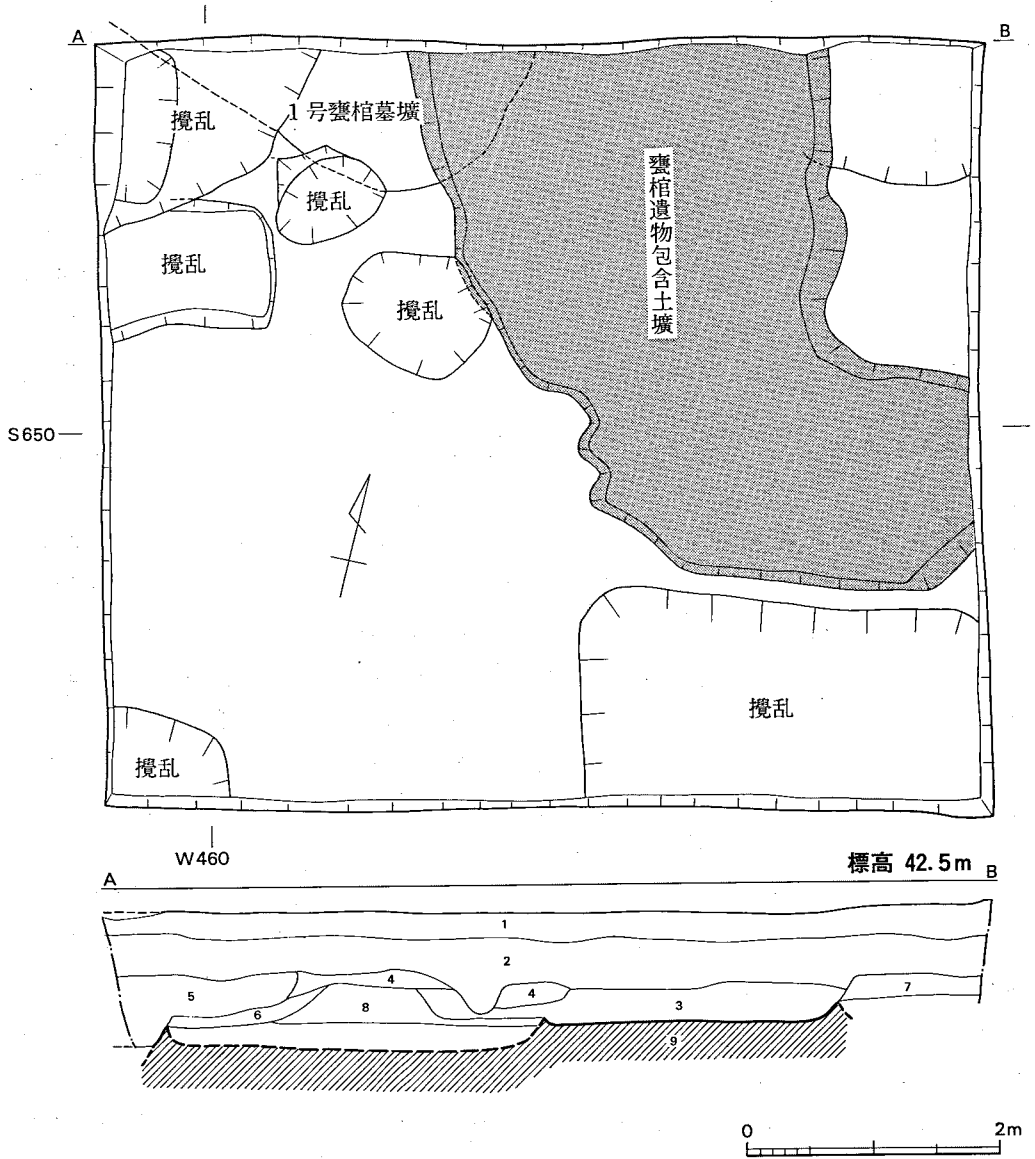
昭和49年度の調査においては、現在の細石神社西端から計測すると、「半町」（約50m）というと南小路地区の東端に達することができないが、細石神社西側を通る県道は新道であるから、神社の境内も多少狭くなったと見るとかろうじて南小路の東端にかかる。また、旧道は南小路の東側（ヤリミヅとの境）を通過していたこともあり、文政5年の発掘地点を南小路の東端であると推定した。ところが、I-6にあたるこの地区は木龍トヨ子氏の宅地であり、現在も居住されている。したがって、その宅地の片隅を調査させていただくべく交渉したところ、宅地南東隅の畑地を調査することで承諾いただいた。この畑地は約70m²ほどしかなかったが、排土置場を差引いた約42m²の調査を行った。このトレンチ調査は、甕棺埋設地点そのものではなかったが、その攪乱時の排土を確認し鏡片をはじめ多くの出土品があり、試掘としては十分な成果をあげることができた。

昭和50年度の調査は、昨年度の試掘調査の成果を踏えて、その北側にあたる物置小屋の下の調査に主眼を置いた。この時も土地所有者である木龍トヨ子氏御一家には多大なる協力をいただき、結果的には宅地内の畑地の大半を調査することになった。

この調査で、文政5年の発掘地点を確認したと同時に、その盗掘坑の北側に隣接して、これも盗掘された別の甕棺墓を発見した。北側に発見された甕棺墓は、文政5年のものと違って甕棺本体が半分ほど残っているものであった。そこで、文政5年の甕棺を1号甕棺墓、北側の新発見の甕棺を2号甕棺墓とした。

また、I-7に延ばしたトレンチでは、重複した大溝状遺構を確認し、丹塗大形壺などの存在からこれが祭祀遺構であることも判明した。この丹塗大形壺を含む古い溝を祭祀溝、上層の新しいものを大溝、西側の小溝をそのまま小溝と呼んで区別することにした。

I-6の南端にも復原可能な土器を持つ土壙を検出したので、これは単にI-6の土壙として報告する。



- | | | |
|-----------------|------------|------------|
| 1. 黄褐色粘質土 (現表土) | 4. 淡褐色土 | 7. 暗褐色粘質土 |
| 2. 暗茶褐色砂質土 | 5. 黒褐色礫 | 8. 茶褐色粘質土 |
| 3. 茶褐色砂質土 | 6. 暗黄褐色粘質土 | 9. 明茶褐色粘質土 |

第4図 I-6 昭和49年度調査区と北壁土層図 (1/60)

2 1号甕棺墓

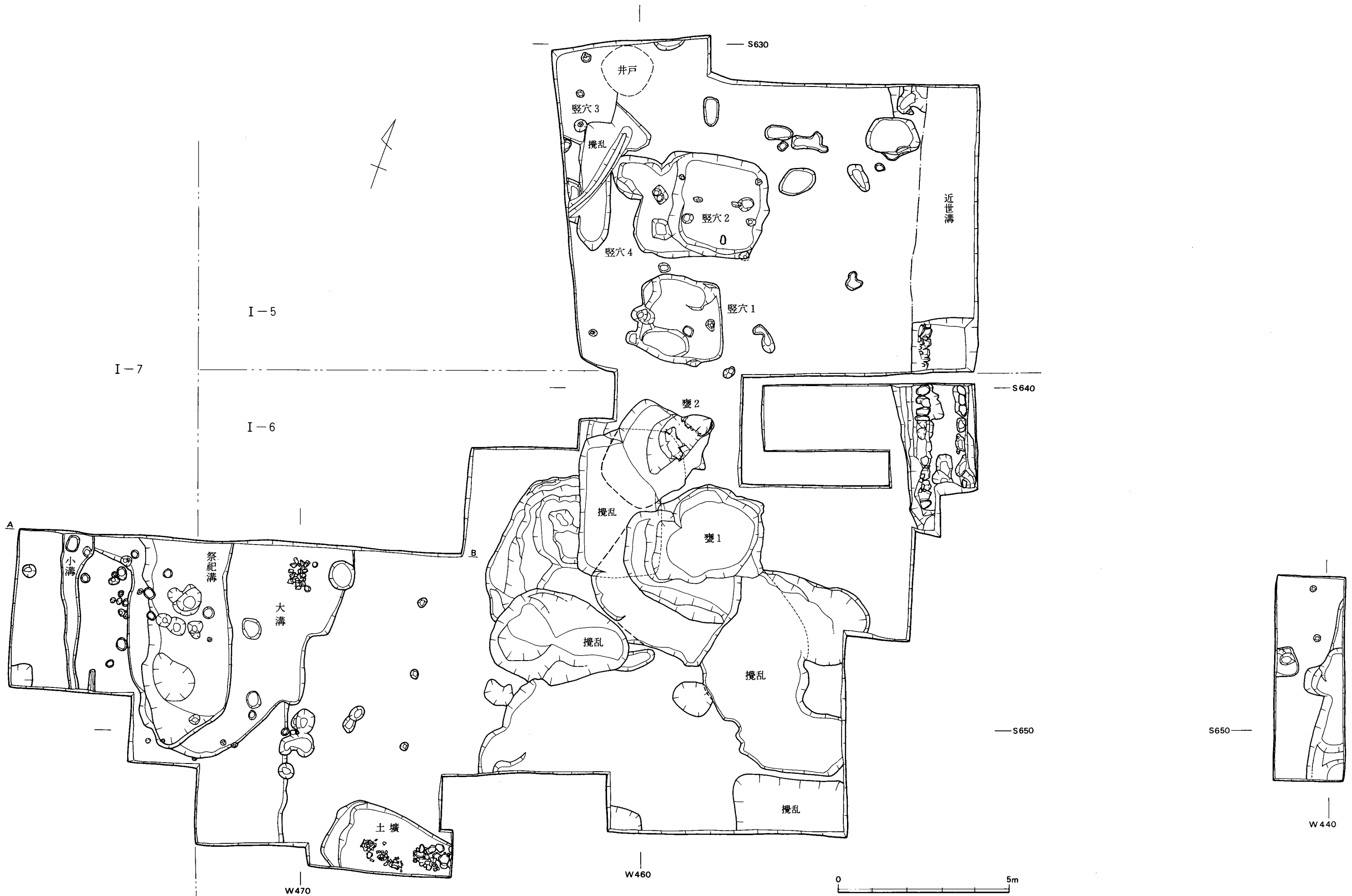
(1) 甕棺墓壙 (図版2・3, 第4～6図)

1号甕棺墓とした文政5年発掘の甕棺は、その墓壙(盗掘坑)の中心が、S644.5・W458にあり、盗掘時の排土は南東側に上げられたらしく、現状では約25cmの浅い不整形の凹地に鏡片などの遺物を含んだ砂質土が残っていた。

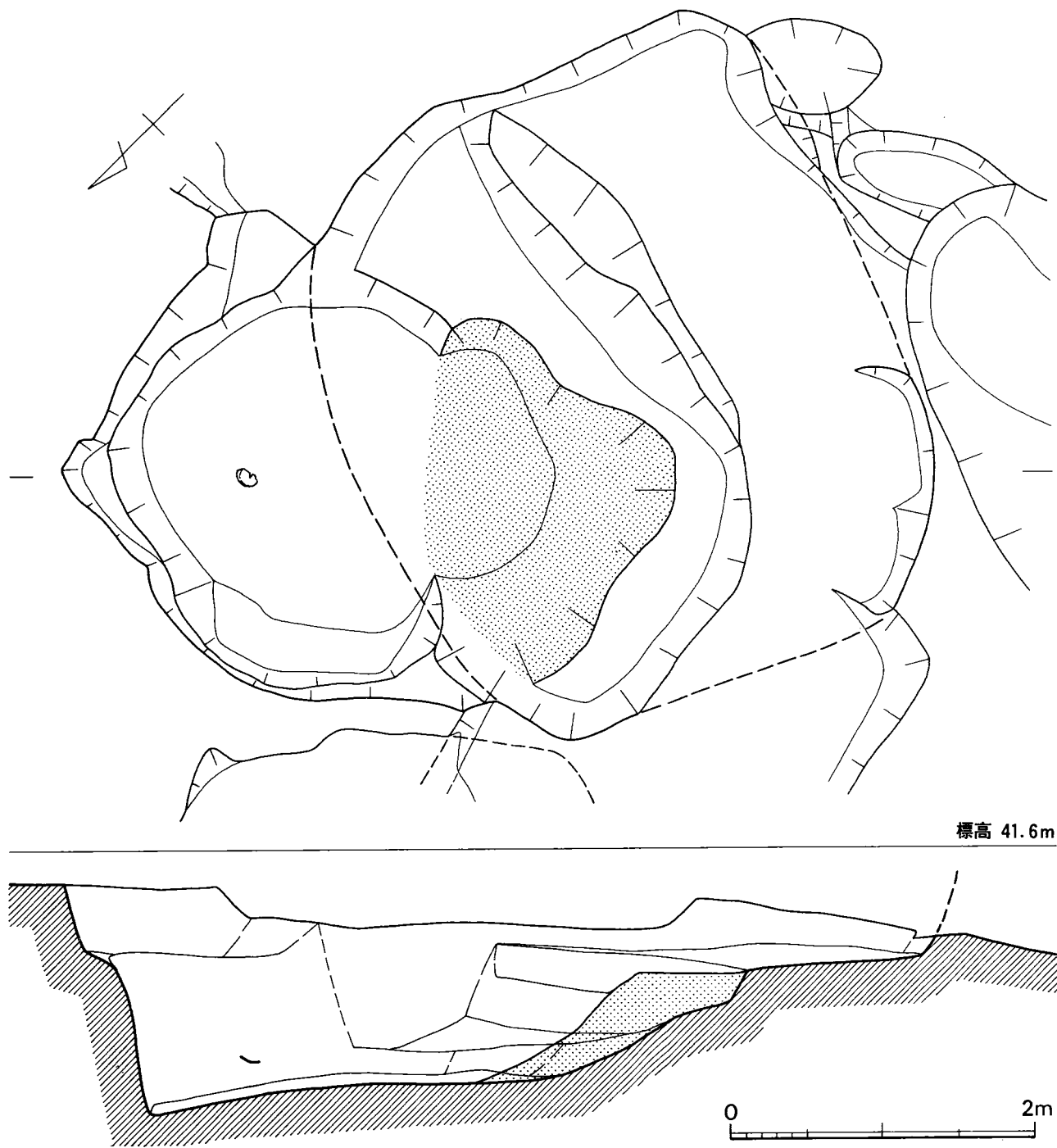
昭和49年度の試掘で、トレンチの北西側に確認していた墓壙らしい遺構は、やはり甕棺墓壙の南東コーナ部分であり、攪乱されていない部分もあった。墓壙内の大半は攪乱され旧状を失っているところが多いが、墓壙東側・南東角・南西角・北西角付近の一部が旧状のまま残っていたことから、墓壙の平面形と規模は容易に復原できる。墓壙の攪乱は、文政5年を第1回とすると、第2回目の攪乱が墓壙の西側辺を破壊する長方形竪穴が現代に掘られている。この第2回目の攪乱は、2号甕棺の第2回攪乱ともなり、2号甕棺の小破片を1号甕棺墓攪乱土内に混入させている。この攪乱坑の深さは1号甕棺墓壙の1段目掘方と同じ深さ(2号甕棺墓壙ともほぼ同じ)であったために、墓壙を大きく破壊するものとはなっていない。しかし、文政5年の遺物を含んだ攪乱土を搬出したのは確かであろう。第3回目の攪乱は、第1・2回目との前後関係は不明であるが、墓壙の外の南西側に楕円形坑がある。この攪乱は甕棺墓壙の攪乱に直接関係しないかもしれないが、墓壙内の南側辺中央付近を乱している可能性もある。

第1回目の文政5年の攪乱は、最初発見の銅剣・銅戈の出土レベルまでは土塚用の土取りであったろうから、この土取り坑の深さは甕棺遺物を含む南側の現在では浅く残る攪乱坑の底面と同一であろう。同様な浅い攪乱坑は東側にも延びており、南側ほどではないが甕棺内遺物が含まれていた。すなわち、棺外副葬の銅剣・銅戈は、南側と東側の攪乱坑の深さ内で出土したことになり、この時下の甕棺上面の深さのぎりぎりの線にきていることになる。甕棺発見後の攪乱は、甕棺内の攪乱と甕棺の取上げに集中したらしく、ほぼ円形の攪乱坑となっている。したがって、上甕の周辺や下部には攪乱されない墓壙内埋土が残り、墓壙内の2段目の段築は破壊されていなかった。

甕棺墓壙は、主軸をほぼS22°Wに向けた長方形竪穴であるが、現状では南北長5.2m、東西幅4.2m、深さ1.45mの大きさとなっている。通例の弥生中期の甕棺墓壙は、竪穴墓壙に加えその竪穴の一側壁に横壙か斜壙を掘って下甕を挿入するが、1号甕棺墓もその状況が復原できる。墓壙を平面的に見ると、全体的に上部が削平されているのは別として、東西両側辺が北東側と北西側でカーブしていることから、東西両側辺が北側辺に移る角を表わしている。この両角の曲線をもとに北側辺を復原すると、墓壙は東西長さ4.15m、南北長約3.6mの隅丸長方形



第 5 图 南小路 I-5~7 遺構配置図 (1/100)



第 6 图 南小路 1 号甕棺墓塚实测图 (1/40)

をしていることになる。

墓壙内南側には2段の段築と各段に平坦面を設けており、3段目が最下段となるが、2段目下の底面が攪乱されていなかったことから、現況の最下段底部もさほど攪乱されず、甕棺を取上げたただけであったようだ。すなわち、甕棺が埋置される墓壙最下段底面は、割合平坦なものであったようだ。墓壙の段築は、1段目の平坦部が最も広く空間を取り、墓壙竪穴部床面積の約43%を占めている。2段目の平坦部は、甕棺埋設方位が墓壙より西側に片寄るところから、東側が他の部分より平坦部が広く取られている。この2段目の平坦部は、北東端の一部を盗掘によって失っているが、他の部分はまったく攪乱されておらず、完全に原形を保っているといえてよく、その掘込まれた形態から容易に甕棺埋設方位を推測することができる。

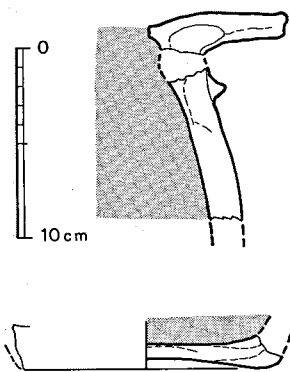
墓壙2段目の掘込みの位置が上甕の方向と位置を示すことから、その甕棺の方位はほぼS44°Wに向き、墓壙底面の傾斜角度が8°であるから甕棺もこれに近い10°前後の傾斜角度で埋置されていたであろう。盗掘時の円形穴は下甕の位置を示すが、これは墓壙では横壙の部分にあたるので、この横壙を上から完全に破壊していることになる。甕棺は、「柳園古器略考」（以下「略考」と略す）によって合口式甕棺であることが判明しているが、その大きさは「其甕の……深サ三尺余。腹ノ径リ二尺許。大サ貳箇ともに同し」ということからすると、一般に見られる高さ1m前後の甕棺が埋置してあったことになり、2号甕棺と比較すると高さにして20cm前後小さくなる。

(2) 甕 棺 (第7図)

1号甕棺は、完全に近く取上げて搬出したらしく細片が残っていただけである。破片は、極細片を含めて26片しかなく、口縁部・口縁下の凸帯・底部破片があるが、完全に1個体分だけである。調査時には口縁部が2種類あり、これが上甕と下甕であると思われた。ところが、2号甕棺を復原していくと、口縁部の1種は2号甕棺の下甕のものであった。

1号甕棺は、破片が細片であるためにその大きさを計測することができないが、底部のみ径13.6cmの大きさであることがわかる。細片から計測できる甕棺各部の寸法は、口縁幅7.4cm、口縁最大厚さ2.2cm、胴部厚さ1.7cm、底部厚さ0.85cmを測ることができる。

甕棺の特徴は、口縁部は内傾し、上面にふくらみがあるが、先端は摘上げられている。口縁内側はわずかにコ字形に突出し、口縁下には三角凸帯をめぐる。底部は上げ底ぎみにくぼみ肉薄である。甕棺の器面調整は、口縁部が内外面共ヨコナデ、口縁下は内外面共凸帯付近までヨコナデされている。胴部は、外



第7図 1号甕棺実測図(1/4)

南小路1号甕棺墓

面が荒れて調整不明で、内面は朱が付着しこれも調整法不明であるが、どうやらナデているようだ。

胎土は、細砂（石英・長石・金雲母・赤褐色粒）を含み、明るい茶色をしているが胎土内は黄味が強い。甕棺内面には朱を塗布し、口縁上面もその傾向があるが、口縁上面から外面には黒塗りも見られるところから、上面の朱は内面の朱が付着したものと思われる。

甕棺の時期は、弥生中期後半の新しいものである。

(3) 副葬品

1号甕棺墓の副葬品は、「略考」にその大半が紹介されている。その種類は、次のとおり。
(名称は、本報告書で使用するもの)

棺 外

有柄中細銅剣 1 中細銅戈 1 朱入小壺 1

棺 内

細形銅矛 1 中細銅矛 1
重圏彩画鏡 1 四乳雷文鏡 1
重圏斜角雷文帯「清白」銘鏡 1 重圏「清白」銘鏡 2
連弧文銘帯鏡26以上
ガラス製璧 1(8) ガラス勾玉1(3) ガラス管玉多数(60以上)

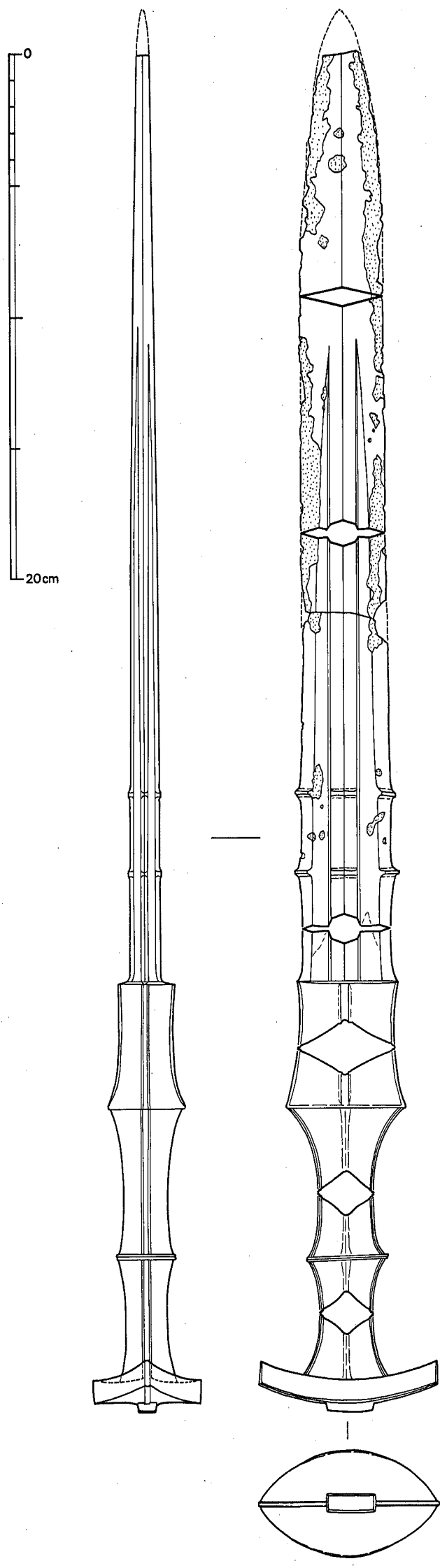
であるが、調査の結果は()のように改められると同時に、新発見のものとして金銅四葉座飾金具8個分が追加された。

① 銅剣・銅矛・銅戈

有柄中細銅剣（図版5・6，第8図） 棺外の甕棺上に切先を上にして立ててあったもので、現存全長51.5cmのもの。切先を欠損しているので、復原全長53cm前後となる。銅剣各部の寸法は、柄部全長162mm，柄部最大幅45.0mm，柄部最小幅19.95mm，柄部最大厚27.15mm，柄部最小厚16.2mm，柄飾部幅67.8mm，厚さ40.8mm，身部背最大厚11.85mm，身最大幅34.2mm，刳方突起最大幅38.55mm，突起部最大厚12.45mmの大きさ。

銅剣は、身・柄・柄飾が同鑄で作られており、類例は朝鮮半島にもなく、身の部分のみを舶載細形銅剣と比較しても、身の関から切先までの長さが37cm前後となることから、舶載品とすることができない。銅剣の銅質も、全体に漆黒色の光沢があり、細形銅剣と違って中細や中広の一部に見られる銅質であり、確実に日本製とすることができることから有柄中細銅剣とした。

現在この銅剣は福岡市の聖福寺所蔵で、京都国立博物館が保管し、重要文化財の指定を受けている。



第 8 图 1 号甕棺出土有柄中細銅劍実測图 (1/2)

細形・中細銅矛 棺内から2本出土したもので現存しないが、青柳種信の良好な図（図版5の右）が福岡市歴史資料館に残っている。「略考」によると、「一口は長サ壹尺四寸三分。一口は長サ壹尺壹寸五分」とあるから一方は長さ約43.3cm、他方は長さ約34.8cmの大きさのものとなる。この2本の銅矛の図は、「略考」・「筑前國怡土郡三雲村古器図説」（以下「図説」と略す）と福岡市歴史資料館蔵の「青柳種信資料」（以下「資料」と略す）にあるが、前二者は現実の銅矛とは違い模式図化されている。ところが図版5の右のように「資料」は、現実の銅矛に近く一級資料である。後藤直氏が指摘するように（註1）、「資料」の図は現物の形をなぞって描いたと見てよいので、銅矛の長さは長い方が一尺五寸八分（47.9cm）、短い方が一尺四寸三分（43.3cm）となる。「資料」では、短かい方の節帯部分が一部切れることから、「略考」・「図説」を参考にすると、2本共に鈕が節帯にかかるが、節帯の幅は長い方が広く、短い方が狭く描かれている。また鈕も短い方が丸く、長い方が三角形に近く描かれているところから、両者に型式的違いが考えられる。長い銅矛は、以上の点などから中細銅矛の可能性が考えられるが、法量的に近いものに福岡市南区門の浦出土例（東京国立博物館蔵）がある。

中細銅戈（図版5の左）これは、棺外の銅剣の側から出土したもので、現存しない。「略考」には、「本の方に莖^{クキ}あり、長サ七分、巾六分、莖^{クキ}より鋒^{サキ}まで長サ壹尺貳寸弱」とあるから全長約36.3cmの大きさとなる。しかし、図はやはり「資料」（図版5の左）がよく銅戈の特徴を表わしている。この「資料」の鋒部の特徴と長さから、中細銅戈のうちでも大型の部類のものとなる。

② 銅鏡

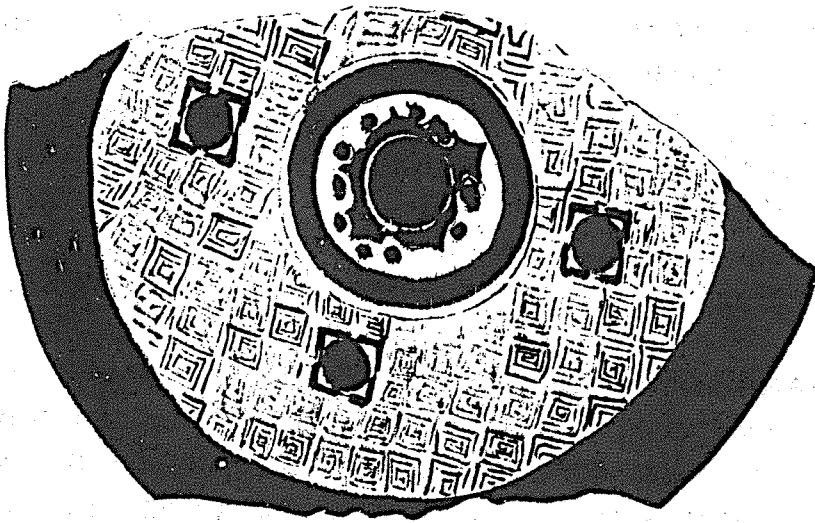
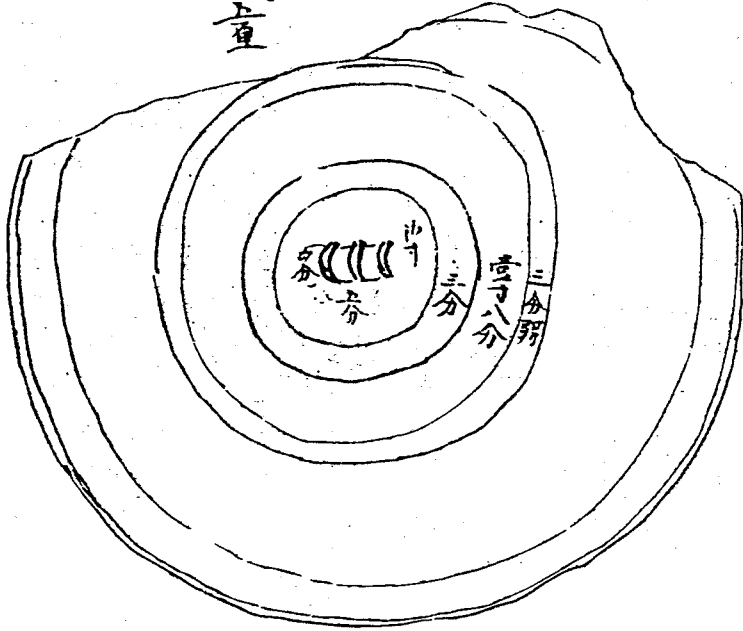
銅鏡については、「略考」には「甕中に古鏡大小三十五面」とあり、「都合三十五面也」とも書いているが、実際は31面分の鏡の説明しかしていない。

発掘調査によって出土した鏡片は、「略考」の5面の鏡の図中4面と同一鏡がある。さらに、「資料」には3種の鏡の原拓が残っているが、このうちの2面とも鏡片が接合できた。この3種の原拓は、1面が連弧文「清白」銘鏡の完形品、1面は重圈斜角雷文帯「精白」銘帯鏡で「略考」の1面と同じ、他の1面は重圈「清白」銘帯鏡で、これと接合できた。

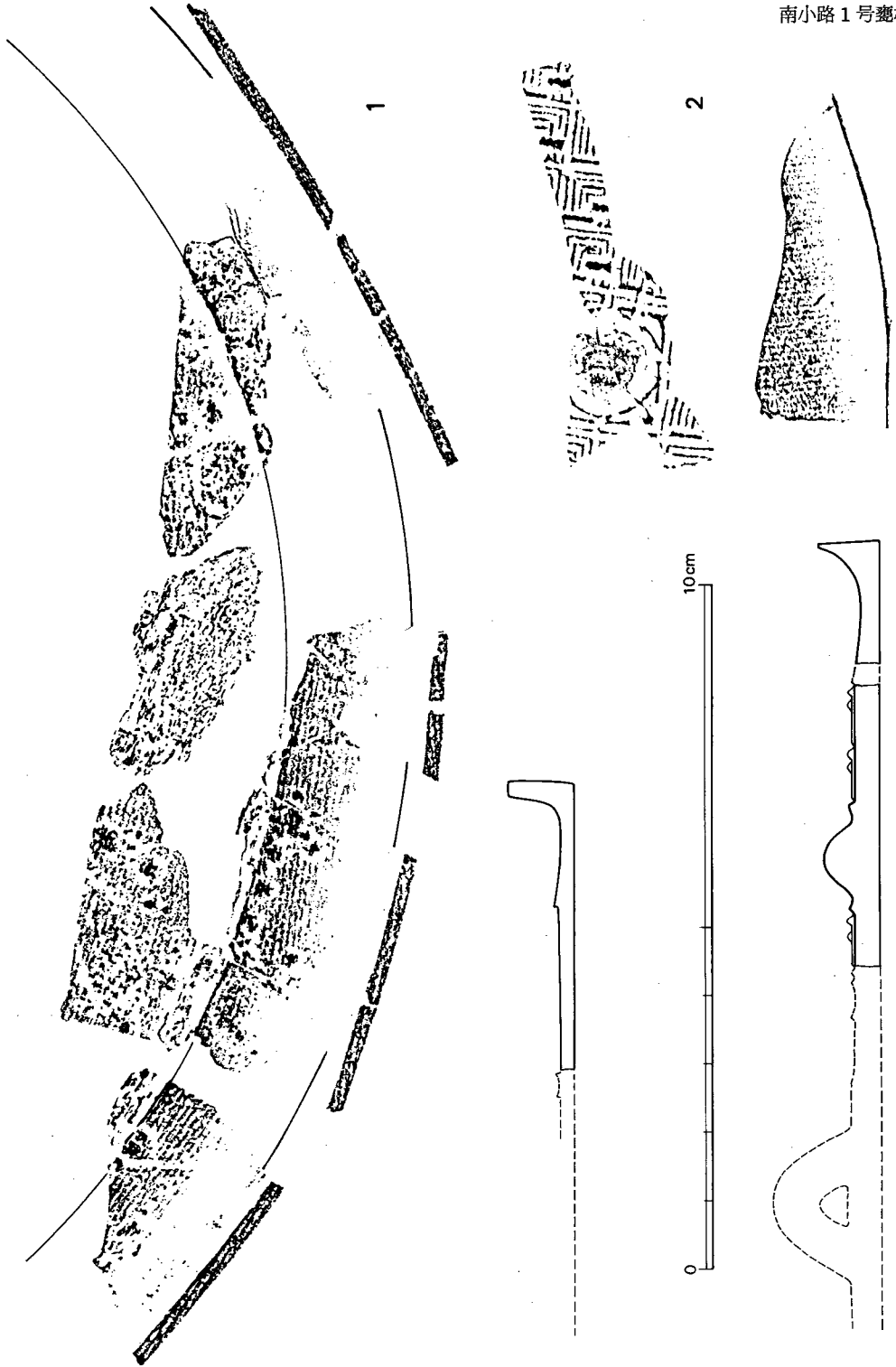
これらの銅鏡のうち、現存するのは「略考」の図の中の1面で、現在重要文化財の指定を受けている。

1 **重圈彩画鏡**（巻頭図版1-1、8-2、図版7-1、第9図上、第10図1）この鏡は「略考」に「其ノ大なるは徑リ九寸。背文なし」と記載されていることから、これまで重圈素文鏡と呼ばれていたものである。出土した鏡片は、「略考」の図（第9図上）の欠落した左側の大部分が出土しているが、細片であるのと無数の亀裂から、鏡の正確な直径を出すことができない。したがって、「九寸」をもとに復原すると直径27.3cmの大型鏡となる。鏡片は、縁から円

徑九寸
切高貳分五厘



第 9 図 「柳園古器略考」の重圈文鏡と雷文鏡



第10图 1 重圈彩面镜 (径27.3cm) 2 四乳雷文镜 (径19.3cm)

南小路1号甕棺墓

圈に接する部分まであり、部分的な計測は可能である。縁高9.7mm、縁上端幅2.6mm、七縁最薄部厚さ2.1mm、最厚部厚さ2.8mm、地文厚さ2.2mmとなっている。鏡面は丁寧な磨きで、灰黒色と銀色光沢があり、縁は漆黒色の光沢がある。しかし、彩画のある地文は灰黒色で研磨していないために光沢がない。鏡背面の縁以外の部分には、朱・青色・白色の付着物があるところから、注意をしていたのであるが、その付着物の大半がすでに剝落しているところから彩画鏡とするには躊躇するところがあったが、重要文化財の指定を受けている守屋美孝氏蔵鏡の彩画人馬鏡(径22.6cm)、(巻頭図版8-3)を氏のご好意で実見することができたことにより、両鏡の彩画たる共通点を見出すことができた。

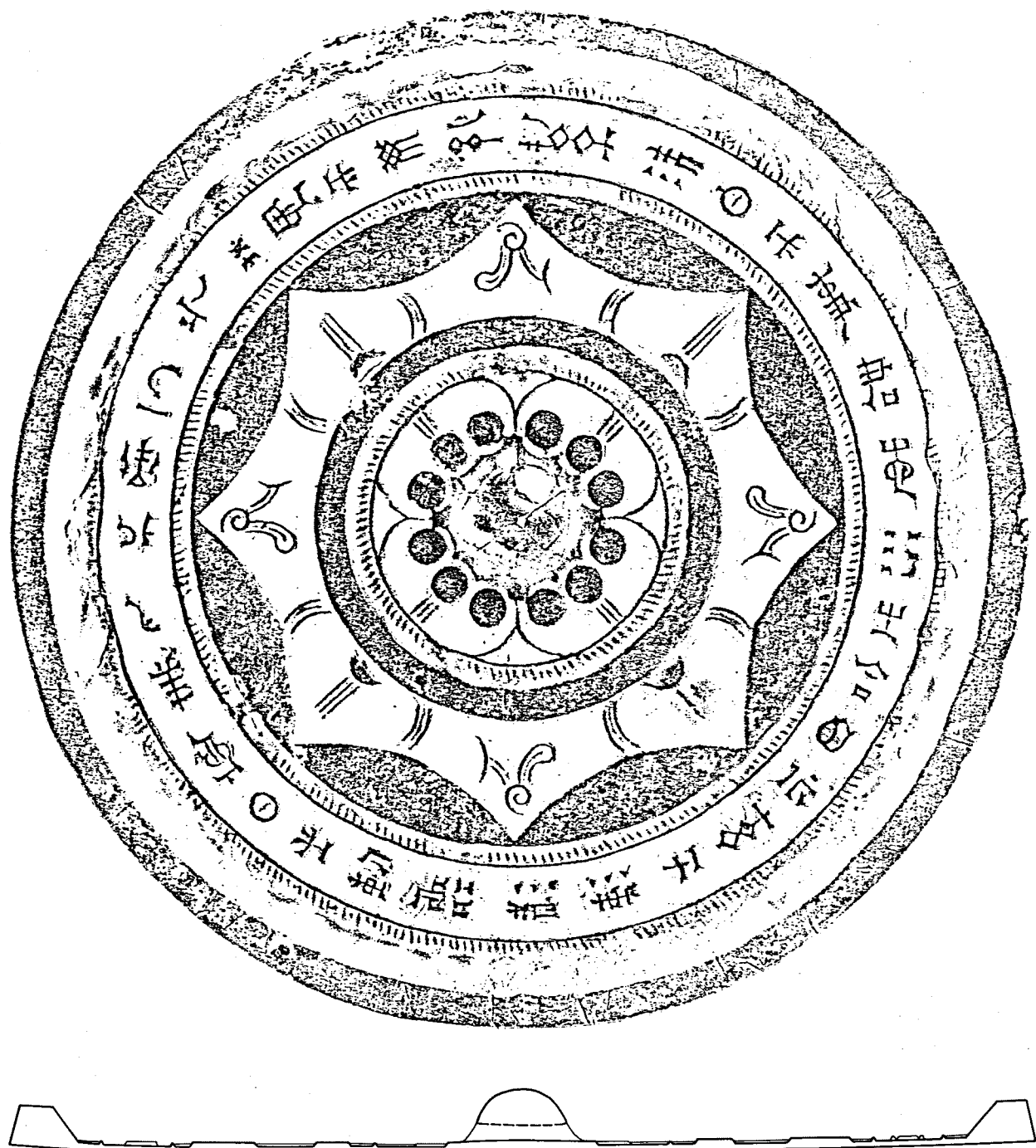
両鏡の共通点は、高い七縁、三稜鈕、鏡面が平直、そして最後に円圈に平行して同心円にめぐる白色彩線が決め手となった。これらの諸特徴から戦国式鏡である。

2 四乳雷文鏡(巻頭図版1-2、図版7-2、第9図下、第10図2) 発掘調査では、鏡縁・乳・羽状獣文地の一部が出土した。鏡片から計測できる各部の寸法は、直径19.3cm、縁高9.0mm、縁上端幅0.65mm、七縁最薄部厚さ2.95mm、最厚部厚さ3.6mm、乳径10.8mm、乳部厚8.15mm、乳方座径16.9mmである。この鏡は、七縁であるが、鈕座の四葉連珠文から前漢鏡とすることができるが、前漢でもその前半の古い鏡式である。なお、鏡縁に付着していた錆状固形物を多少強引に剝離したところ、中から水滴状の水銀がころがり出た。

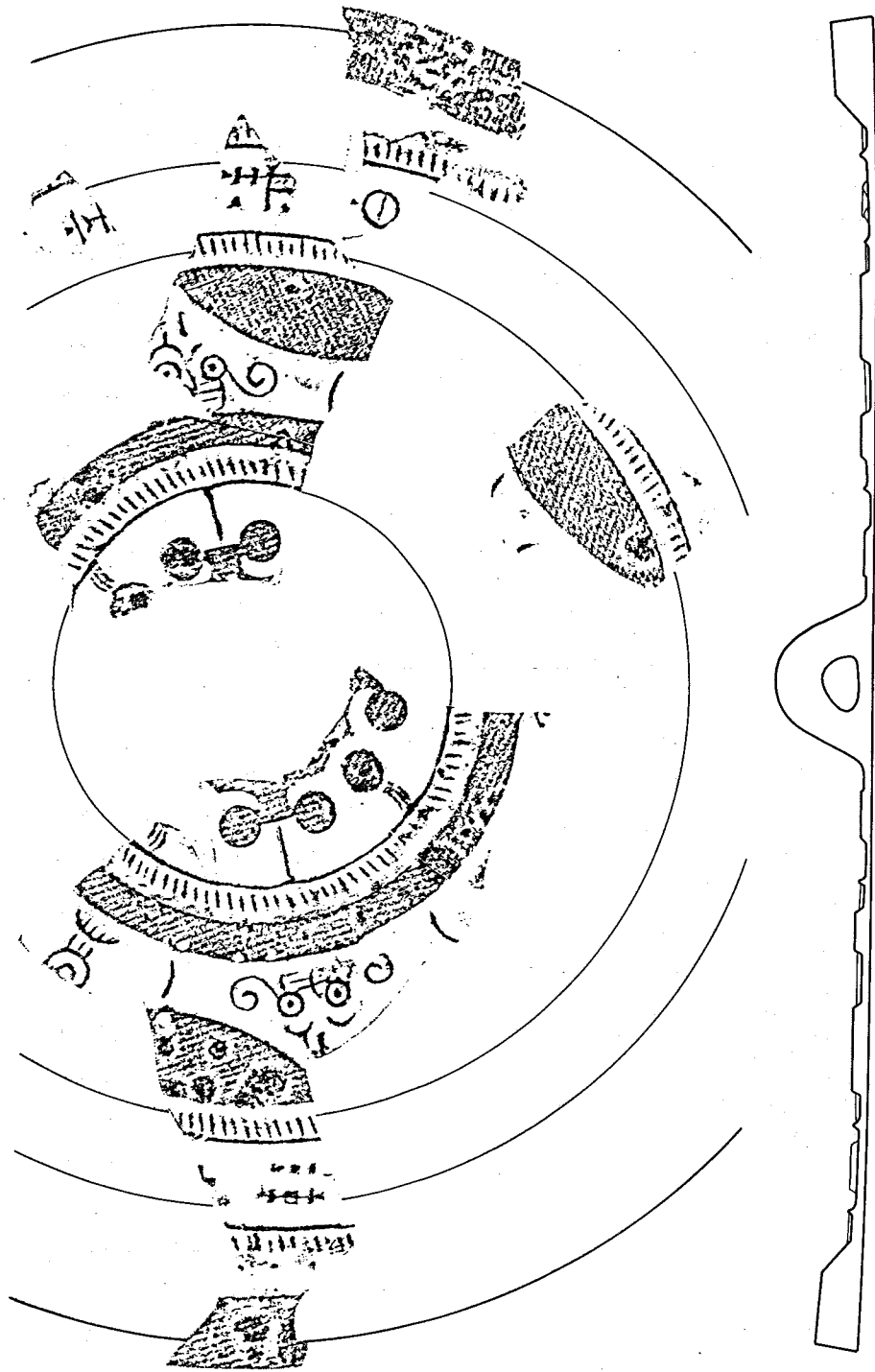
3 連弧文「清白」銘鏡①(図版8、9-2、第11図) 『略考』に図示されているもので、現存して有柄中細銅剣と共に重要文化財に指定され、京都国立博物館に保管されている。調査では、欠落していた鏡片(図版8)の一部が出土した。直径164mm、鈕径19.2mm、縁厚6.5mm、縁上面幅5.4mmの大きさ。銘帯があり、「潔清白而事君、愆法之合明、倂玄而流澤、恐疎而日忘、美之、外承可兌、永思而毋絶」とあるが、かなり脱字がある。なお、泉屋博古館蔵鏡(鏡一)に同型鏡が1面ある(図版9-1)。

4 連弧文「清白」銘鏡②(図版10-4、第12図) 調査で、鈕と部分的ではあるが各部が出土したので図のような断面図が復原できた。鏡は、直径182mm、鈕径21.7mm、鈕厚13.35mm、縁厚5.85mm、縁上面幅10.0mmの大きさで、銘帯に「清白」「流澤」「丕」がある。鑄造後に研磨した弧文の上面などには銀色の光沢が残り保存良好で、鈕孔内には紐も残存している。また、縁の鏡面側角が割合粗いヤスリ状のケズリで面取りされている。鈕と鈕座には同心円状の、鏡縁側面には横に走る研磨痕が明瞭であるところから、使用による摩滅は考えられない。

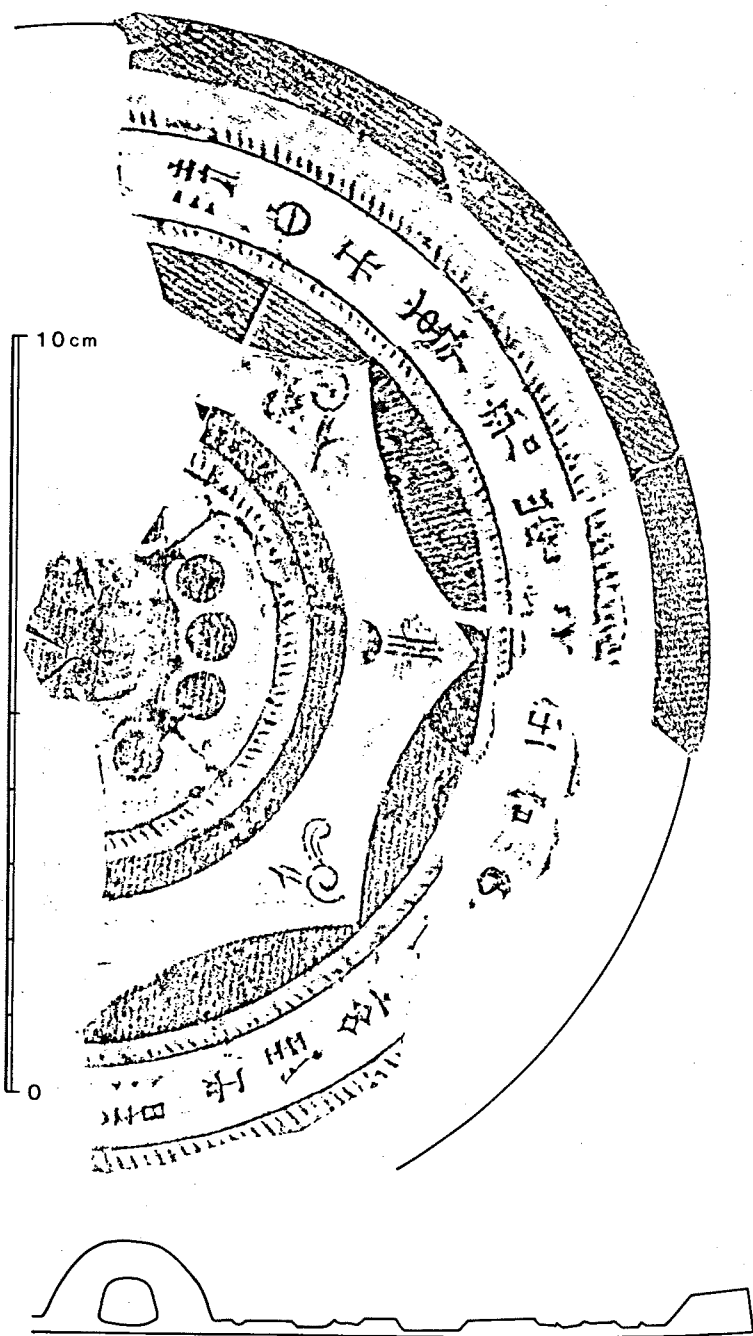
5 連弧文「清白」銘鏡③(図版11、第13図) 調査で半分にし少し足りない破片が出土した。直径164mm、鈕径約22mm、鈕部厚さ12.1mm、縁厚さ5.8mm、縁上面幅7.6mmの大きさで、縁の外側両角はシャープに研磨されている。銘帯には、「清白而事君、愆法之合明、倂玄錫而澤」の文字が残っている。鏡は、全体に青緑色の錆に覆われて、鈕孔内には紐が残存していた。鈕孔の両縁は角が鋭利で、面取りや使用による摩滅は見られない。この鏡は、他鏡と比較する



第 11 圖 3 連弧文「清白」銘鏡① (徑16.4cm)



第12图 4 连弧文「清白」铭鏡③ (径18.2cm)

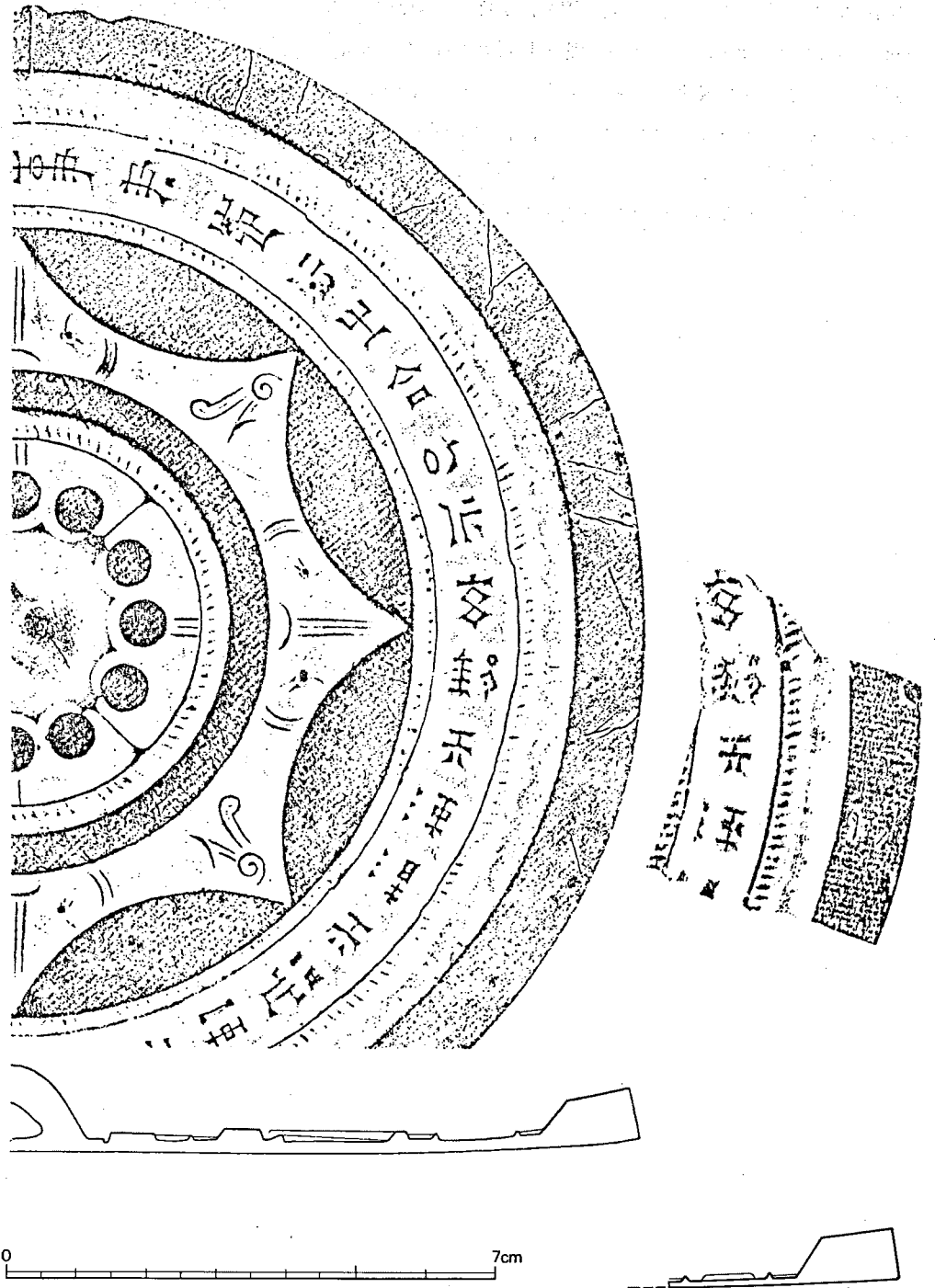


第 13 図 5 連弧文「清白」銘鏡③ (径16.4cm)

と弧文幅が狭いのも特徴。

6 連弧文「清白」銘鏡④ (図版12-6, 第14図) この鏡は、調査で出土した1片のみであるが、その特徴と銘文・寸法・鑄型傷などから、立岩35号甕棺墓出土鏡と同型鏡であることが判明した。各部の寸法は、直径18.0 cm, 縁厚さ6.5(内側)~7.45mm(外側), 縁上面幅10.1mm, 銘帯幅12.0mmで、銘帯には「玄錫而流瀝」とある。この鏡片はとくに銘帯部分に錆が生じているが、銘帯から櫛歯文帯(外側)にかけて見られる鑄型傷が本鏡と立岩鏡に見られるところから同型鏡とした。この鏡の縁は、鏡面側の角がわずかに面取りされているが、上端角はシャープに研磨されている。

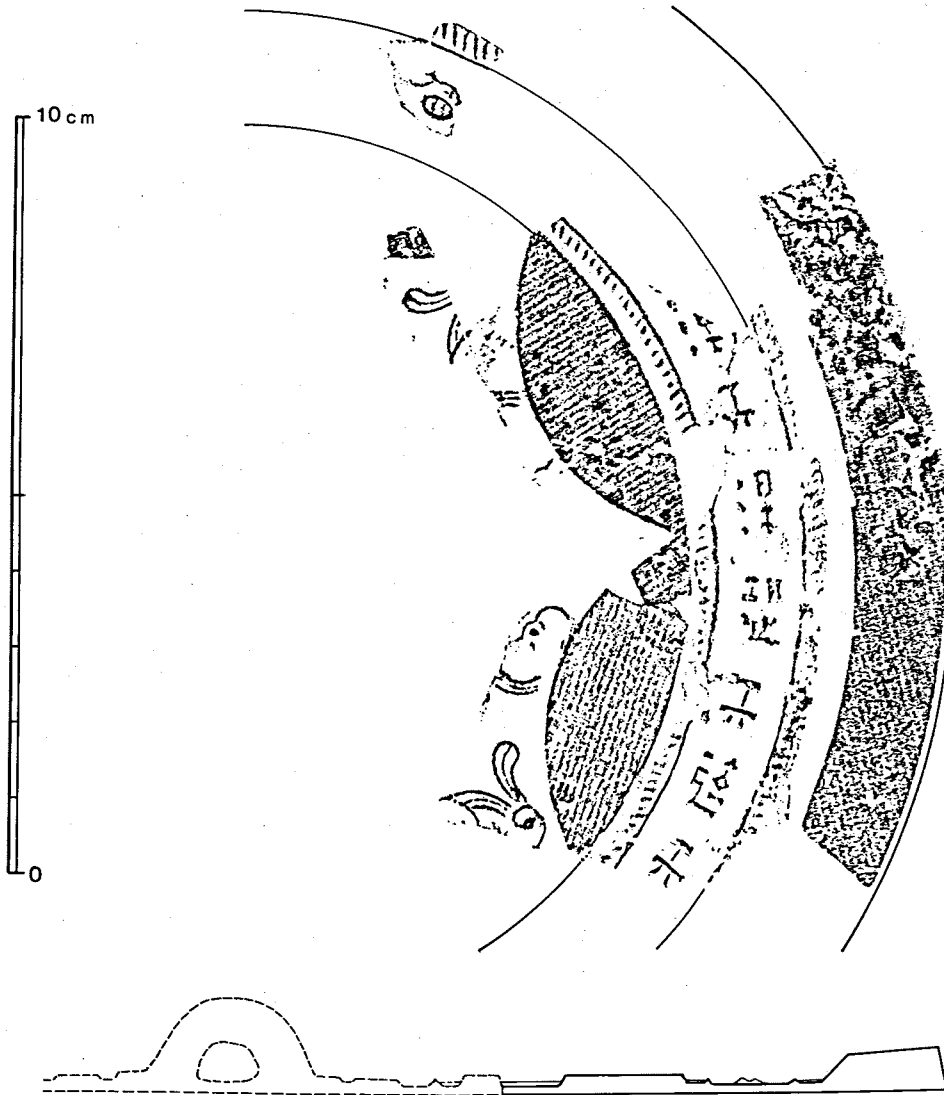
7 連弧文「清白」銘鏡⑤ (図版13-7, 第15図) 1号甕棺出土連弧文「清白」銘鏡



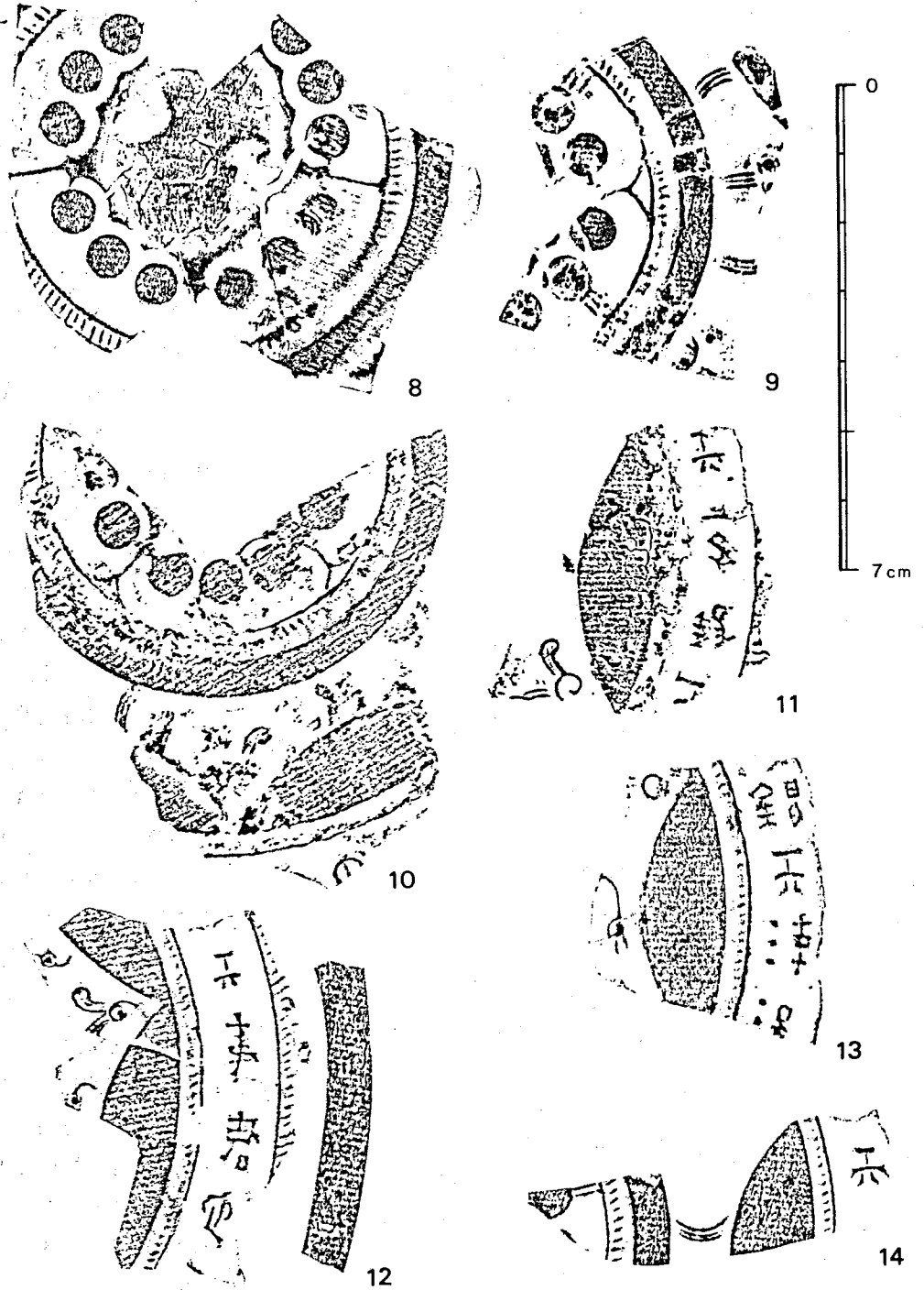
第 14 図 6 連弧文「清白」銘鏡④と立岩35号甕棺出土鏡(左) (径18.0cm)

南小路1号甕棺墓

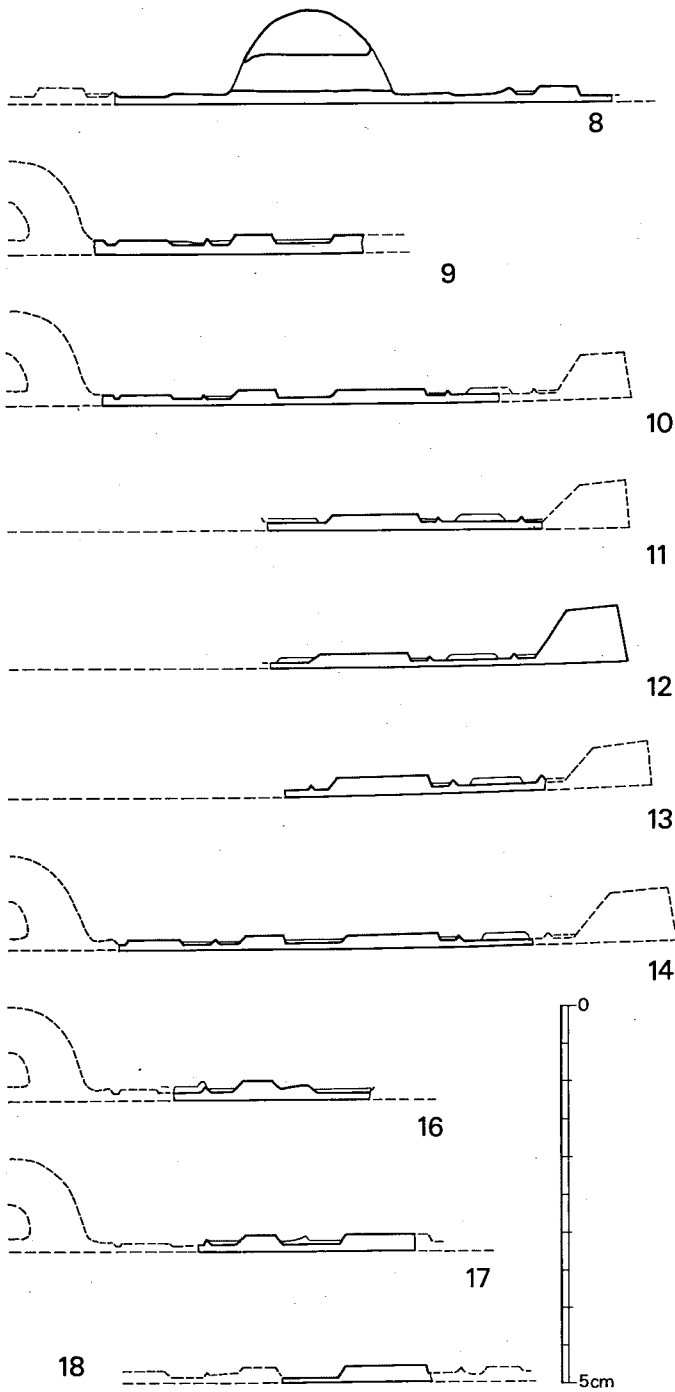
の中で、最も鏡縁と弧文幅の広い鏡で、直径18.8cmの大きさ。各部分の寸法は、縁厚さ4.85～5.5mm、縁上面幅11.95mm、弧文上面最大幅15.2mm、弧文部厚さ2.45mmを測る。鏡は全体に青緑色の錆で覆われて保存もよくないが、銘帯には「明」「流而澤恐而疏而」の文字が残っている。この銘帯には特徴があり、書体は楔形でありながら「而」の字を多く使用しており、前漢末の鏡式であるゴシック体銘文を持つ昭明鏡に近い型式を持っている。2号甕棺墓出土の楔形書体の昭明鏡と同様な型式をとるものである。



第15図 7 連弧文「清白」銘鏡[◎] (径18.8cm)



第16图 8~14 連弧文「清白」銘鏡⑥~⑫ (実大)



第 17 図 8~18 連弧文「清白」銘鏡断面実測図 (実大)

8 連弧文鏡⑥ (図版13-8, 第16・17図8)

この鏡片には、鈕・鈕座・円圈部分があるが、円圈の外側に櫛歯文帯がないところから、連弧文鏡系とした。各部の寸法は、鈕径22.35mm, 鈕部厚さ12.35mm, 鈕座厚さ1.5mm, 円圈外側直径70.4mm, 円圈部厚さ2.25mmを測る。鏡には、部分的ではあるが銀色の光沢があるが、鈕・珠文・櫛歯・円圈の一部に湯冷えによる形くずれがあり、文様の不鮮明な部分がある。また、鈕の一部に朱が付着しているが、鈕座と連珠文に鈕を中心に回転した同心円の機械的研磨痕が残っている。鈕孔は、一方の縁が面取り状を呈すが、形くずれした側に形くずれして縁が不整形に鋭利な部分と面取りされたような部分がある。

9 連弧文鏡⑦ (図版13-9, 第16・17図9)

この鏡片は、弧文間の文様や厚さなどから小片ながら他の鏡片と区別できるが、銘文や鏡縁片との関係は不明。

鏡には、鈕座の珠文・円圈

・弧文間の文様の一部が残り、円圏外側は半径約3.5cmになるところから直径約16.4cmの大きさに復原できる。各部の寸法は、円圏部厚さ2.65mm、円圏上部幅4.65mm、珠文部厚2.2mmとなり、鑄造後研磨した珠文と円圏上面は白銀色の光沢がある。鏡面には、水銀を含有する錆状固形物が付着している。固形物を剝離すると、鏡面は白銀色の光沢がある。

10 連弧文「清白」銘鏡⑧（図版14-10、第16・17図10） この鏡片は、前例の2に近いところがあるが、各部の寸法に違いがある。本鏡も円圏の径などで復原すると直径16.4cm前後の大きさとなるが、円圏部厚さ2.2mm、珠文部厚さ1.45mm、弧文部厚さ2.3mmとなる。この鏡片は、鏡背の文様間全面に水銀を含有する錆状固形物が付着している。銘帯には、「白」または「日」とある。

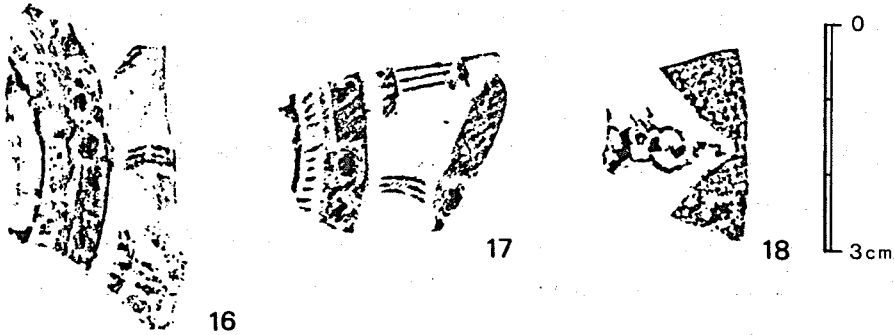
11 連弧文「清白」銘鏡⑨（図版14-11、第16・17図11） この鏡片は、前記鏡と鏡背面に水銀を含有する錆状固形物が付着するなど類似点があるが、連弧文間の花卉と銘文の位置関係が前鏡と違っていることから別鏡である。本鏡には、連弧文・花卉・銘帯が残っており、銘帯に「而玄錫_罫」とある。鏡の直径も前鏡と同じ16.4cm前後であろう。

12 連弧文「清白」銘鏡⑩（図版14-12、第16・17図12） この鏡片は最も保存のよいもので、鏡縁に水銀含有固形物が付着している以外にほとんど錆がなく、鑄造後研磨する鏡面、縁上面・側面・弧文上面は銀色の光沢があり、他の研磨しない部分は黒鉛色をしている。銘帯の文字部分など多少湯冷による文様のシャープさがなく、鑄造後に研磨した面の角は鋭利で、縁の側面は他の鏡と同様に、ヨコの研磨痕が明瞭である。銘帯には、「_罫而事君怨_罫」の楔形書体の文字が残っている。鏡縁は直接に接合できないが、鏡の半径と付着物などから同一個体とした。

13 連弧文「清白」銘鏡⑪（図版14-13、第16・17図13） これも1片のみであるが、弧文間の文様と銘文から他鏡片と識別できる。鏡片は、弧文外周が半径5.5cmほどになるところから、直径約17cmの大きさに復原できる。各部の寸法は、弧文部厚さ2.35mm、弧文最大幅12.15mmのもの。銘帯には、「錫而流澤」の楔形文字がある。

14 連弧文「清白」銘鏡⑫（図版14-14、第16・17図14） これも細片であるが、星文から銘帯の部分まで残っている。復原すると直径約18cmほどのものとなるが、各部の寸法は弧文部厚さ2.0mm、珠文部厚さ1.45mm、弧文と円圏間の地厚さ0.9mmとなっている。銘帯には、「而」のみ残っている。円圏と弧文上面が研磨され銀色光沢を放っているが、銘の文字上端にも研磨が及び、平坦面をもつ楔形書体となっている。

15 連弧文「清白」銘鏡⑬（図版15） この鏡は「資料」に原拓が1枚あるもので、唯一の完形鏡。鏡の直径は16.7cmの大きさである。拓本であるところから正確な大きさではないが、湿拓と違うところから大差ないように思える。鏡も1号甕棺に最も多い鏡式であるところから、「略考」には図がないが、三雲出土鏡としてよいだろう。1号甕棺墓出土連弧文「清白」



第 18 図 16~18 連弧文鏡①~③ (実大)

銘鏡の中には、連弧文間の文様に多少の変化があり、その中でも②鏡は日本出土品の中には見られないものがある。この③鏡の場合は、全体的に拓本が不鮮明であるために、確かでないが、どうも小乳状突起の周囲に花卉が4枚あるように見える。同じく不鮮明な銘帯は、「潔清白而事君，愆法之舛明，倂玄錫而流澤，恐疎而日忘，美之，外承可兌，而毋絶□」とあり、現存する①鏡に似たところがある。

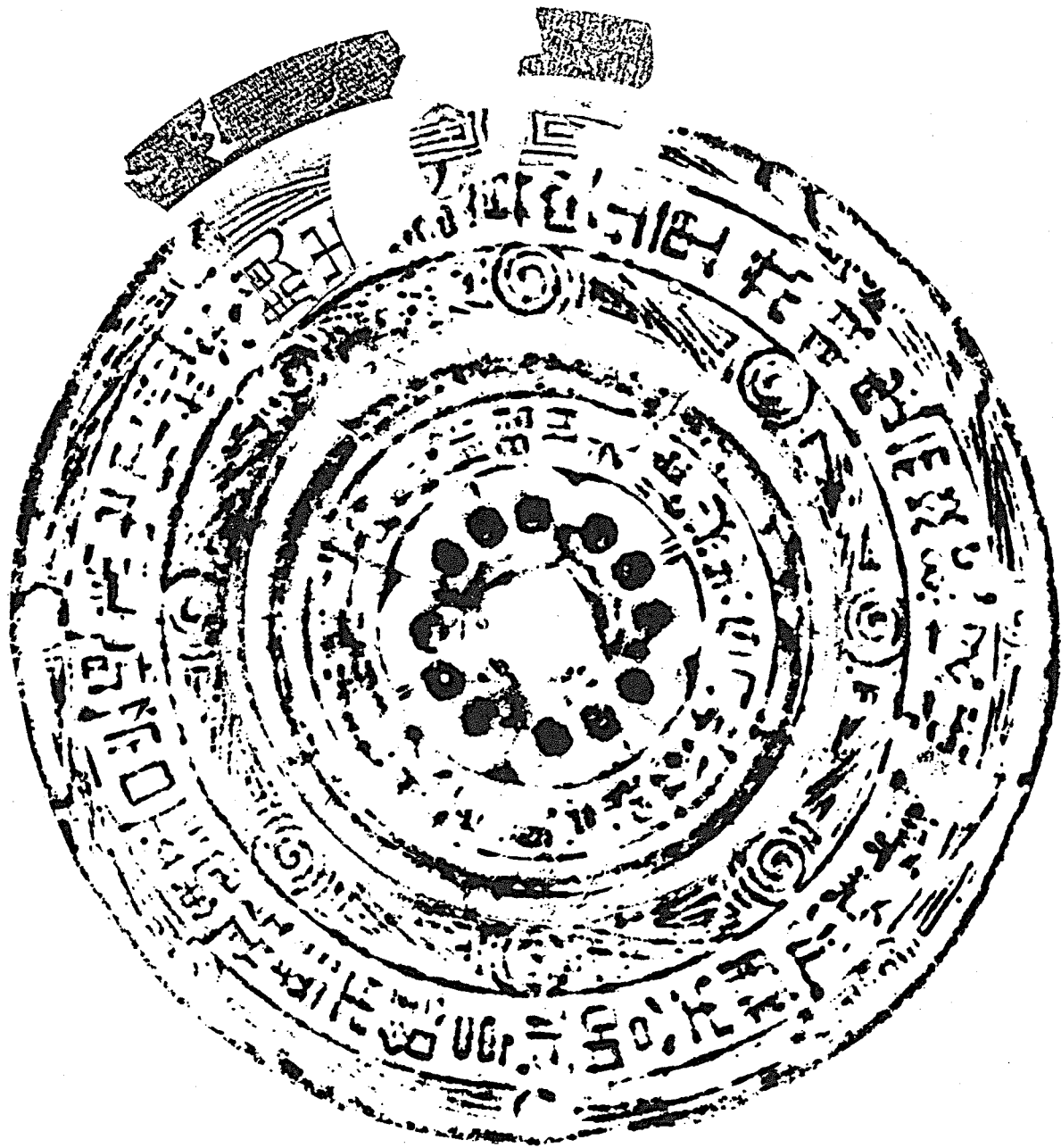
16 連弧文鏡① (図版16-16, 第17・18図16) 鏡片だが円圏を中心に内側に楯歯文帯，外側に連弧文帯，内側の文様帯があることから連弧文銘帯鏡であることが判明する。円圏部の厚さは約2.7mmである。全体に錆が多く，背面に赤色顔料付着。

17 連弧文鏡② (図版16-17, 第17・18図17) ①と同じ小片であるが，円圏と連弧文の一部が残っている。連弧文内側文様帯の三重線弧文が，前鏡①と逆であることから，その他の鏡片とも別個体であることが明瞭。円圏部厚さ2.35mm，弧文部厚さ2.4mm。鏡面は淡緑色に錆ているが，背面は灰黒色を呈する。

18 連弧文鏡③ (図版16-18, 第17・18図18) 連弧文部の細片であるが，弧文間の花卉文が他鏡と違う。花卉は形くずれのため不鮮明である。弧文部2.2mm，地部0.9mmの厚さ。鏡面と弧文上面が淡緑色に錆ているが，他は黒色を呈する。

19 重圏斜角雷文帯「精白」銘鏡 (図版16-19, 第19図) この鏡は，「略考」に図，「資料」に原拓が3枚あるもので，発掘調査で銘帯と鏡縁の一部が出土した。「略考」の説明によると，鏡の直径は「徑五寸五分」(16.7cm)と説明しているが，「資料」の原拓によると直径18.2cm前後のものである。出土した鏡片から復原できる直径も18cm前後のものとなることから，「略考」の「五寸五分」は誤記であろう。

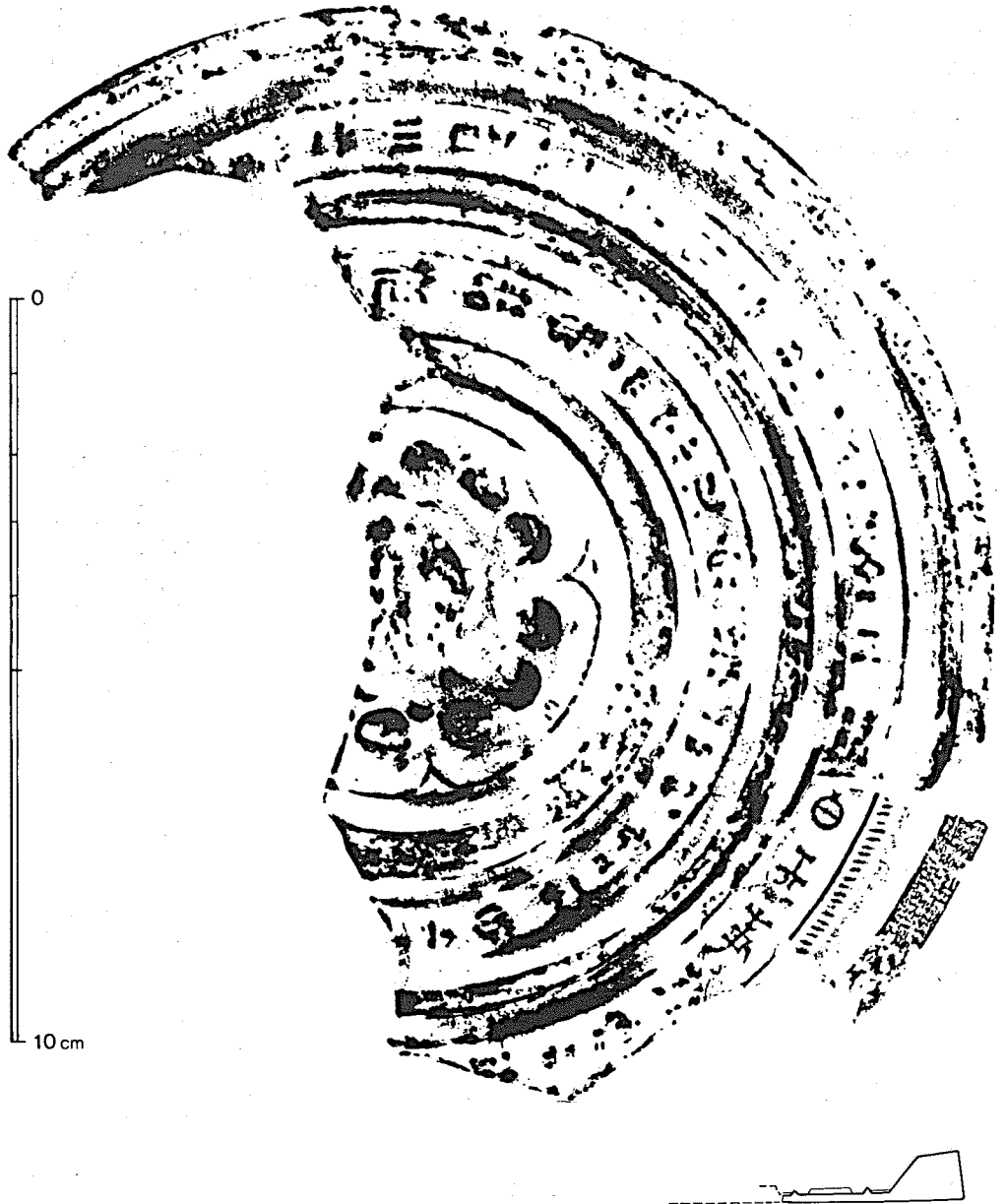
鏡は，連珠文鈕座で銘帯と斜角雷文帯を各々二重にめぐらしている。内銘帯には，「内精質昭明，光輝象夫日月，心忽揚而願忠，壅塞而不泄」。外銘帯には，「潔精□事君，愆驩之合明，



第 19 圖 19 重圈斜角雷文帶「精白」銘鏡 (徑18,2cm) (『青柳種信資料』)

扱玄錫之澤，忘疏日忘，懷美之窮禮，承驩之□_〇，思交靈之京，願思而毋絶」とある。

鏡各部の寸法は，縁厚さ6.15~6.55mm，縁上面幅10.2mm，銘文上厚さ2.6mm，銘帯地厚さ1.9mmとなっている。鏡面と縁外側との角は，わずかに面取りがしてある。

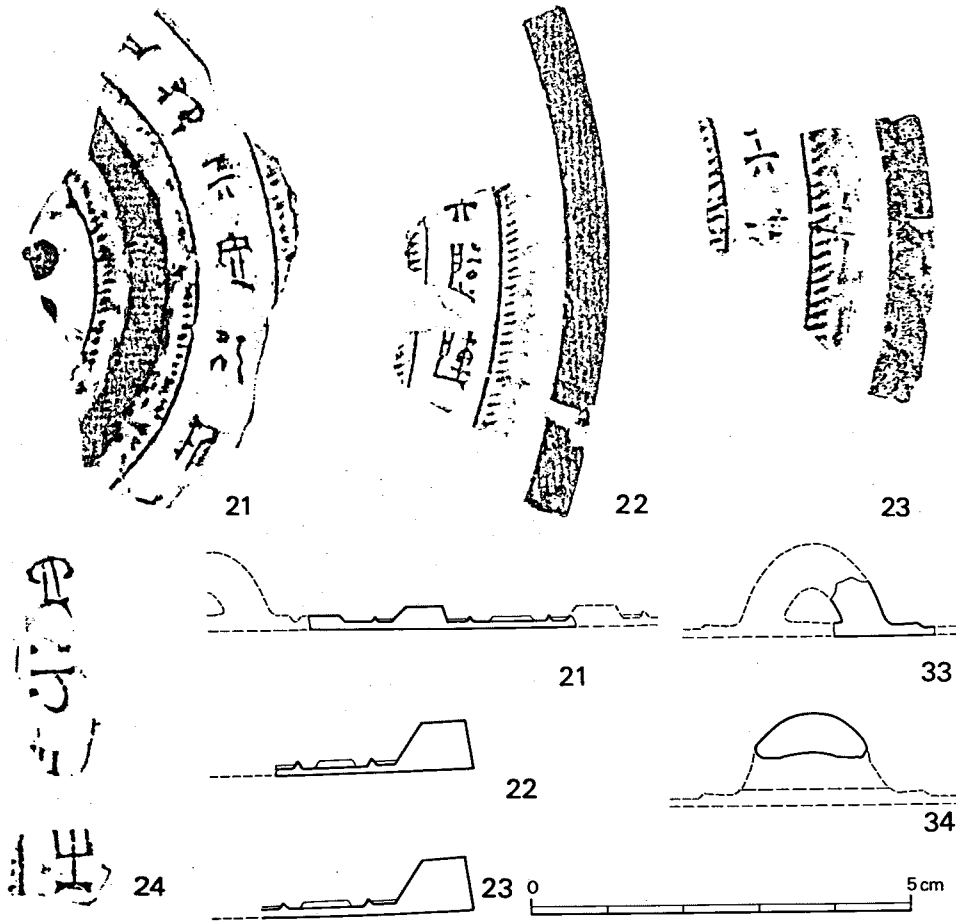


第 20 図 20 重圈「清白」銘鏡① (径16cm)

南小路1号甕棺墓

20 重圈「清白」銘鏡① (図版16-20, 第20図) この鏡は、「略考」の図とは別個体で、「資料」の原拓とこれに接合できる発掘調査の出土品である。鏡は、原拓と出土品を含めても半分ほどの破片で、直径16cmの大きさのもの。各部分の寸法は、縁厚さ6.25~6.75mm、縁上面幅5.7mmある。銘帯は楔形書体で、内銘帯に「内清而以昭而明, 光」「然壅塞而不泄」。外銘帯に「潔而清白而事君, 愆而運」「□而永思□□而絶□」とあるが、不鮮明で読み取れないところが多い。出土した破片を見ると鏡縁はシャープに研磨され、鏡面との角も面取りされているが、銘文には湯冷えによる丸味がある。

21 重圈「清白」銘鏡② (図版16-21, 第21図21) この鏡片は、発掘調査によって出土したもので、鈕座から内銘帯までの一部が残っている。この破片は、重圈「清白」銘鏡①とは銘文が重複するところから別個体であるが、「略考」とは比較できない。「略考」の図によると、内銘帯にも「清白」銘が書かれているところから、これは破片の合成である可能性が強い。現



第21図 21 重圈「清白」銘鏡②, 22~24, 33・34号鏡 (実大)

実の鏡だとすると別個体となり、重圏「清白」銘鏡が3面となるが、「略考」には「二重に識あるもの。此ノ二鏡のみなり」とある。

本鏡の内銘帯には、「忽揚而忠，然壅塞」^{〔壅〕}とあるが、銘帯にかぎらず文様が不鮮明で、鏡片部全体に湯冷え現象がおきている。しかし、円圏と鈕座の上面には研磨による光沢があり、鈕座の珠文上面には鈕を中心とした同心円の研磨痕が残っており、各角はシャープに仕上がっている。

「略考」に図が掲載されているものは、内銘帯に「清白」銘が使用されている以外に重圏「清白」銘鏡①とは明らかに銘文構成が違っている。図には、連珠文鈕座・円圏・内銘帯・外銘帯・鏡縁が描かれており、内銘帯に「潔」「而永思^{〔京〕}願而毋絶」^{〔京〕}、外銘帯に「潔清」「明，伋玄而流澤，恐疎而日^{〔忘〕}，而美之，外承可^{〔完〕}，而毋絶」と判読できる文字がある。この図は、前述したように内銘帯に「内質」銘が使用されずに「清白」銘が使用され、しかも「永思」と「而毋絶」の間に「令京願」銘がくるなど混乱が見られることから破片の合成である可能性が強い。ちなみに、外銘帯は脱字があるものの混乱は見られない。したがって、重圏「清白」銘鏡②と「略考」の図は同一個体で、「略考」の「二重に識あるもの。此ノ二鏡のみなり」を信用したい。

22 「清白」銘鏡①（図版16-22，第21図22） この鏡片は、これまでの鏡とは別個体であるが、連弧文式と重圏式の区別のできないもの。しかし、次の鏡片と同じく連弧文式である可能性が強いもの。鏡は直径16.0cm，縁厚さ6.2～6.75mm，縁上面幅5.85mm，銘上面部厚さ2.1mm，銘下地厚さ1.1mmを測る。銘帯には、「而疏遠」と楔形書体で鮮明に残る。

23 「清白」銘鏡②（図版17-23，第21図23） この鏡片は、縁に無数の亀裂を生じているが、錆は少ない。鏡面に布痕がある（「三雲遺跡」Ⅳに分析あり）。

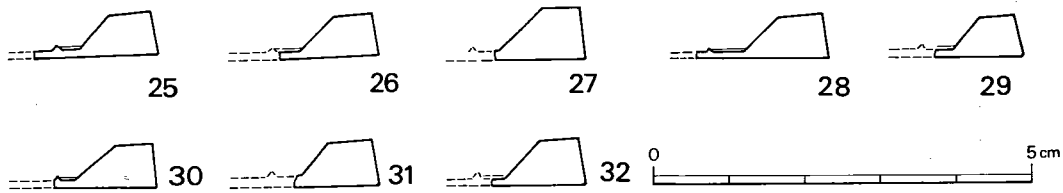
鏡は、復原すると直径約銘帯に16.3cmとなる。銘帯には、「而^{〔流〕}」とある。

24 「清白」銘鏡③（図版17-24，第21図24） これは、銘帯の小片が2個のみあるもので、書体と文字が多少大きいことから、他鏡と区別できる。銘文は、「怨^{〔法〕}之」と「之」の4字のみである。鏡背面は黒色を呈して錆がないが、「之」の鏡面のみ淡緑色の錆がある。鏡背面全体に赤色顔料が付着している。

25 鏡縁①（図版17-25，第22図25） 鏡縁の厚さ，幅，直径の同じものが3片ある。鏡は直径約16cm，縁厚さ5.45～6.15mm，縁上面幅5.6mmの大きさで、内側に櫛歯文帯がある。縁外周はヨコの擦痕が残る，鏡面との角に面取りがある。

26 鏡縁②（図版17-26，第22図26） 小片で、直径は①と同じ約16cmの大きさ。縁厚さ5.8～6.2mm，縁上面幅5.2mm。縁外周はヨコの擦痕があるが、他はなめらか。一部に淡緑色の錆があるが、他は銀色光沢あり。

27 鏡縁③（図版17-27，第22図27） 直径約16cmの大きさで、縁厚さ6.8～7.0mm，縁



第22図 25~32 鏡縁①~⑧ (実大)

上面幅4.4mm。鏡面との角にごくわずかな面取りあり。

28 鏡縁④ (図版17-28, 第22図28) 細片であるが、背面に錆状固形物が付着することから、連弧文「清白」⑨と同一個体である可能性のあるもの。縁厚さ5.75~6.35mm, 上面幅6.6mm。

29 鏡縁⑤ (図版17-28, 第22図29) 直径約15cm程のものであるが細片。縁厚さ5.4~5.7mm, 上面幅4.75mm。鏡面との角に面取りがある。

30 鏡縁⑥ (図版17-30, 第22図30) 細片で、直径約16cm前後。縁厚さ5.7~6.0mm, 上面幅5.35mm。全面に擦痕が著しく、鏡面との角に面取りらしきものがある。

31 鏡縁⑦ (図版17-31, 第22図31) 細片で、縁厚さ6.1~6.4mm, 上面幅6.15mm。鏡面との角にわずかな面取りあり。

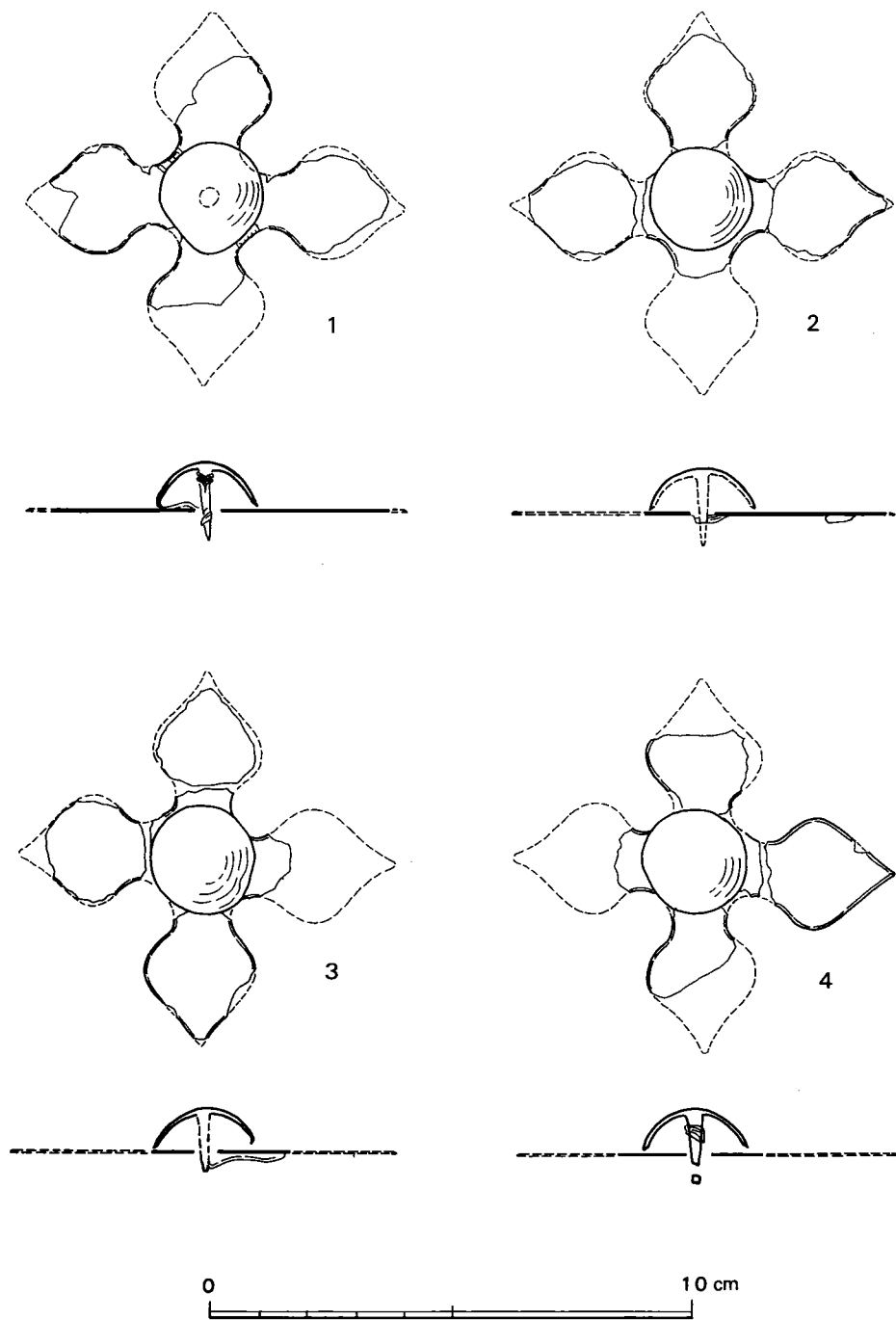
32 鏡縁⑧ (図版17-32, 第22図32) 細片で、縁厚さ6.5mm, 上面幅5.6mm。面取りがあり、楯歯文に赤色顔料付着。

33 鏡鈕① (図版17-33, 第21図33) 鈕の4分の1程度の破片で、鈕座の一部が付属する。鈕径は約21mmで、鈕孔の一部も残っている。鈕座は12星文を持つものであるが、星文部分はわずかに残るのみ。鈕孔両縁は丸味があるが、面取りであるか、摩滅によるものであるかは判断できない。鈕座部の厚さは、1.75mmである。鈕と鈕座には、同心円状の研磨痕があり、鏡面共に漆黒色の光沢がある。

34 鏡鈕② (図版17-34, 第21図34) 鈕の頂部の破片で、鈕孔の天井部も残っている。全体に無数の亀裂があるが、錆はほとんどなく黒色の光沢がある。鈕孔両縁は丸味があるが、鈕頭に同心円状の研磨痕が明瞭に残っているところから、摩滅による丸味ではなく、面取りして丸く仕上げたものらしい。

③ 金銅四葉座飾金具 (巻頭図版2, 図版18・19, 第23・24図)

この飾金具は、「略考」や「資料」にまったく記録のないもので、今回の調査で得た新資料である。金具本来の原形は、厚さ0.6~0.7mmの1枚の銅板から切抜いた四葉形の中央に鑄造した半球状銅器を組合せたものであるが、出土品中には原形をとどめたものはなく、全て破片

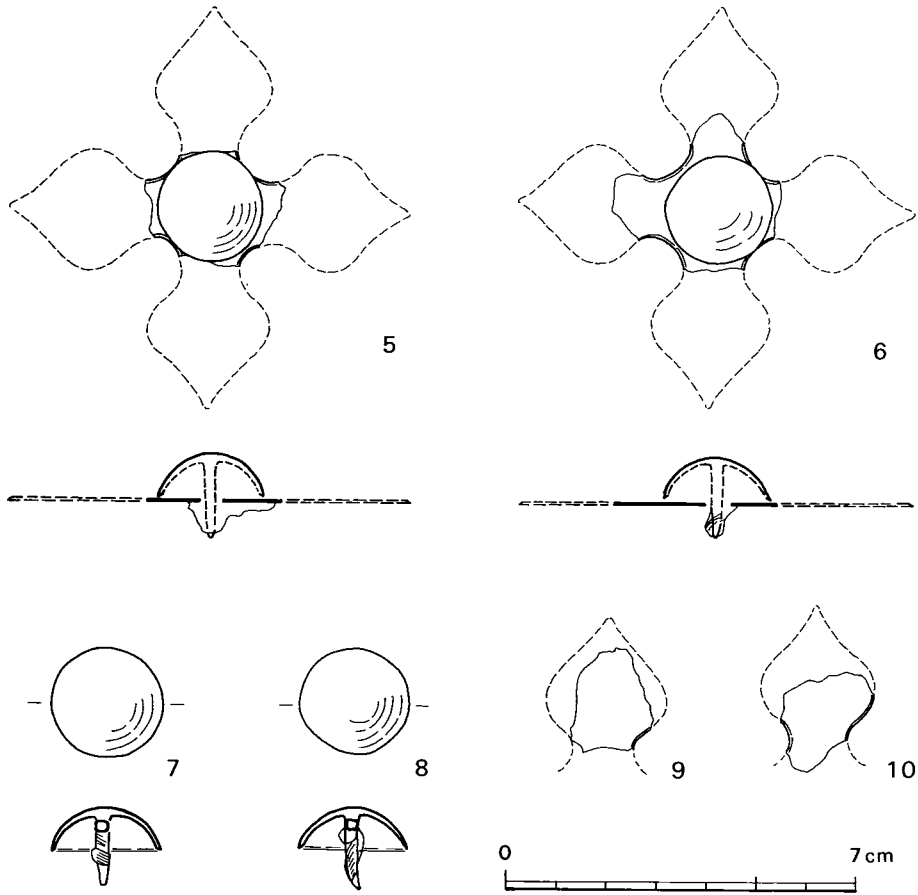


第 23 图 金铜四葉座飾金具実測図① (2/3)

南小路1号甕棺墓

となっている。しかし、半球状部は破損しにくいいためか、出土した8個の全部が原形をとどめている。したがって、四葉部分が原形をとどめているものが少なく正確な全体数がかめないが、半球部分からすると、確実に8個体の金銅製四葉座飾金具が存在したことになる。

1は3枚の葉形が接合できた金具で、原形が復原できると同時に、大きさも推測可能となった。これによると、最大直径7.8cmで、1枚の葉形の最大幅2.3cm、基部幅1.2cm、半球部径2.1~2.3cm、半球高1.0cmの大きさである。四葉座と半球部は、本体に取付ける際に組合されて一体となるのであるが、そのために四葉部の中央に径4mmの円孔があり、半球部内側に長さ1.5cmの突起が同鑄されている。突起の根元径3mm弱の方錐形で、四葉形と組合せた際に、長さ約6mmが鋌状に突出して本体に取付けられることになる。また、半球部の断面形は、周縁が内側から片刃状に尖るように仕上げられている。飾金具は、四葉形上面全面と半球部外面に鍍金されている。鍍金は、半球部で隠れる四葉形銅板中央部にもある。



第24図 金銅四葉座飾金具実測図② (2/3)

この飾金具裏側には、紐状繊維が付着している。この紐状繊維は、方錐形突起に結着された撚糸に端を発しており、四葉板両面に付着している平坦な紐も、元は径1mm弱の撚糸であることがわかる。その結び方も、突起に結着する方法として最も適切な「巻結び」である。すなわち、半球内側の突起根元に結着された撚糸の両側を四葉座の円孔を通して対角線状に巻付けて引出し、本体に結付けたものらしい。或は、四葉板の上面側に付着している繊維は量的に多いようにも思えるので、突起に結着された撚糸は直接円孔を通して内側の本体に結付け、四葉板上面の繊維は別の紐である可能性もある。

2は、1枚の葉形が接合できたもので、葉形基部と半球部が錆付いたままである。写真と実測図に示した他の2枚の葉形は、分離した葉形のうちから、2に接合できた葉形に最も近い形のものを選んだ。基部中央から葉形先端までのいわゆる半径は、3.9cmの大きさである。各部分は、半球部径2.15cm、高さ0.9cm、葉形最大幅2.25cm、基部最小幅1.05cm、葉形板厚さ0.7mmである。1と同様に上面全面に鍍金されている。半球部内面が観察できないが、中央の孔から方形突起と紐2本が出ており、紐2本は対角線上に延びている。突起の先端は新しく欠損しているが、葉形下面には水銀朱とガラス管玉1個が錆付いている。錆付具合から、攪乱前に付着したものであり、飾金具と管玉の棺内における副葬時の位置関係の資料となるものである。葉形の裏面に朱が付着していることは、大半の金具に見られるが、2の金具は特に多く付着している。

3は1枚の葉形も接合できないが、葉形の基部が割合長く残存していることから、分離した葉形の中から最も適合するものを3枚選んだ。図面下側の葉形から復原すると、半径3.8cm、半球部径2.15cm、高さ0.85cm、葉形最大幅2.25cm、最小幅1.15~1.2cm、葉形板厚さ0.7mmである。葉形板と半球部が錆付いているので、半球部内面は観察できないが、中央の円孔から突起が4mm突出し、2本の紐が同一方向の葉形に延びている。金具上面全体に鍍金されているのは同一であるが、朱は裏面のみではなく半球部上面全体に付着している。

4も同様に1枚の葉形も接合できないが、図面右側の葉形が最も可能性が強く、他の2枚も可能性がある。大きさは、半径約4cm、半球部径2.2cm、高さ0.9cm、葉形最大幅2.3cm、最小幅1.15~1.2cm、葉形板厚さ0.6mmである。やはり、上面全面に鍍金され、裏面に薄く朱が付着しているが、葉形上面の一部に濃く朱が付着している。半球部内面には、方錐形突起中央部に紐が「巻結び」状に結着されているが、その両端は残存していないので行方は不明だが、一部が1の金具と同様に半球部と葉形板の間に残っている。巻結びされた紐は、1ほど撚糸が明瞭ではない。

5は1枚の葉形も接合できないが、半球部と葉形基部が錆付き、裏面に突起とその周囲に紐が布状に広がって残存している。金具上面には鍍金され、裏面には薄く朱が付着している。半球部径2.15cm、高さ0.9cmの大きさで、裏面に突起が7mm突出している。

南小路1号甕棺墓

6も葉形が接合できないが、基部が割合よく残っている。半球部径2.1~2.2cm、高さ0.9cmの大きさで、葉形基部最小幅1.15cm、葉形板厚さ0.6mmである。金具の上面には鍍金されているが、裏面は鍍金も朱も付着していない。裏面には突起が6.5mm突出し、若干の紐らしきものの付着が見られるが、延びていた方向は不明。

7は半球部のみのもので、葉形板が付属していなかったもの。直径2.2cm、高さ0.9cm、突起長1.4cm、突起基部一辺3mmの大きさで、突起は方錐形を呈する。金具の上面には鍍金され、内面の突起には紐が巻付いた痕跡がある。半球部の断面は、最大厚が頂部で約2mmあり、周縁が他と同様に片刃状を呈する。

8も7と同様に半球部のみ。直径2.15cm、高さ0.9cm、突起長1.5cm、突起基部一辺3mmの大きさ。外面には鍍金され、突起には紐が巻付いている。断面形は8と同様である。

9・10は所属不明の葉形の一部であるが、この外に細片が多数ある。

④ ガラス璧（巻頭図版3-1、図版20~22、第25図）

ガラス璧は、「略考」や「資料」によると、棺内の重ねられた鏡の間に挟んであったもので、「略考」によると「唯一箇断て二片となる物あり」これによると径二寸八分（8.5cm）、穴径七分（2.1cm）、厚さ式分許（0.6cm）の大きさであるという。

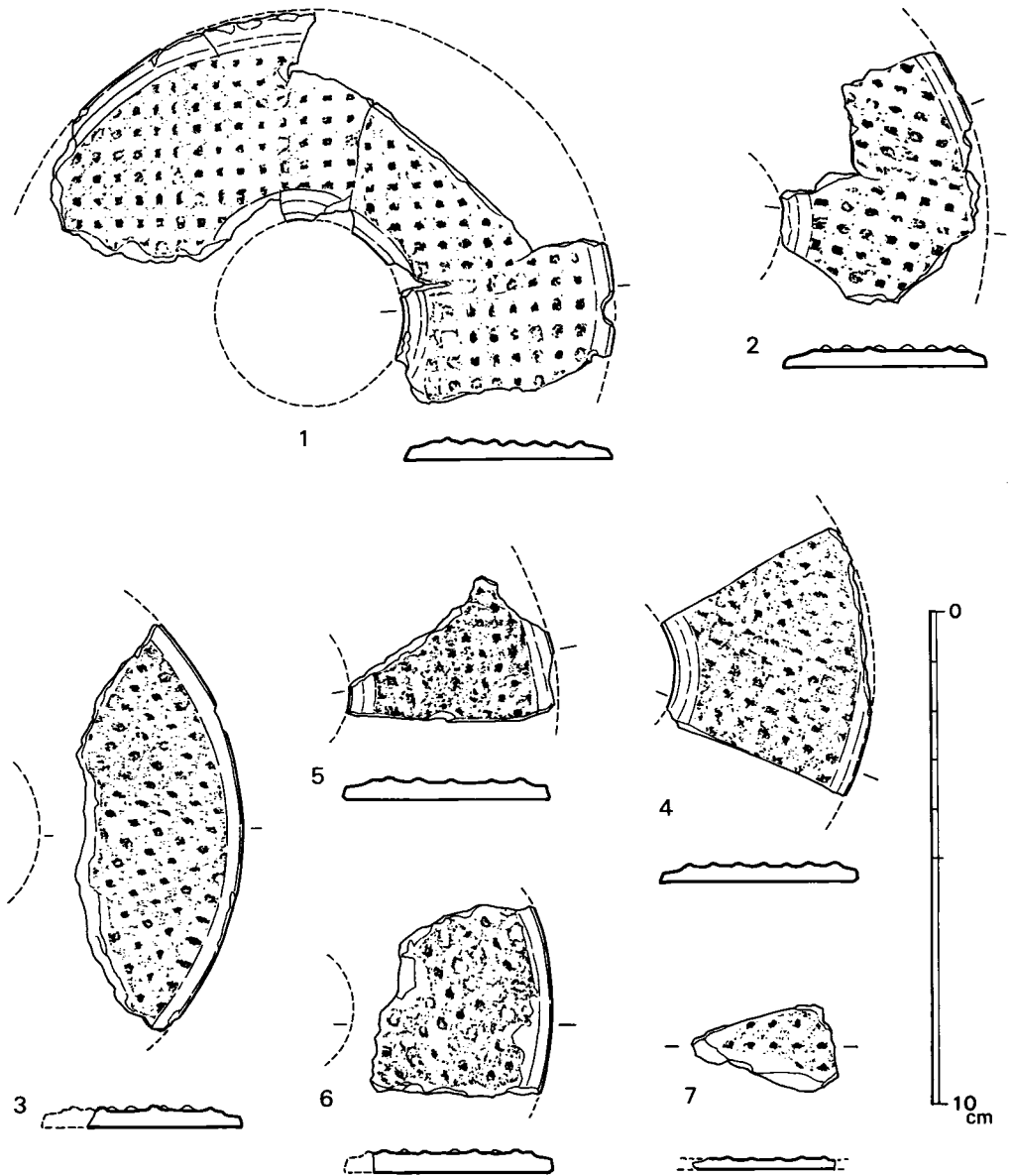
発掘調査では、大小の破片が20片程発見されたが、このうち13片が個体を識別でき、7個体に復原整理できた。したがって、「略考」や「資料」に記載されて1個を合せると合計8個以上が存在したことになる。

1は出土品中最も多く破片が揃ったもので、原形の3分の1以上がある。大きさは、直径12.3cm、内径3.8cm、穀粒文部最大厚さ5.0mm、外縁端厚さ2.8mm、内縁端厚さ3.2mmある。厚さは、穀粒間で内側（3.6mm）から外側（3.05mm）に向って薄くなっている。穀粒文は片面のみで、裏面は完全に平坦で縁取りもない。穀粒文は、3.5×4.5mmの長方形の底辺をした截頭方錐形を呈するが、頭部は丸味がある。穀粒文の底辺が長方形を呈するのは、鑄造後に不鮮明な穀粒文を際立たせるために、穀粒間を溝状に連続して研磨したもので、結果的に方眼状に研磨し、穀粒が長方形となったのである。表面は全体に淡褐色を呈するが、一部に飴色や淡緑色の光沢の部分がある。裏面は渦巻状にガラス湯の流れが観察でき、全体的に白色を呈する中で、部分的に淡緑色や濃青緑色をした部分があり、本来は濃青緑色をしていたことがわかる。裏面が直線的に平坦であることと側面の一方傾斜から、鑄型は片面のみである。両面に朱が付着している。

2は、1とほぼ同形のものであるが、厚さの点において1と異なることから別個体とした。大きさは、外径約12cm、内径約3.8cm、外縁厚2.4mm、内縁厚2.5mm、穀粒部厚4.2mm、地文厚3.6mmである。穀粒文は、底辺3.5×4.0mmの截頭方錐形で、頭部に丸味があり、1と同様に穀粒間を溝状に研磨している。表面は全体に淡褐色を呈するが、一部に飴色と淡緑色の部

分がある。裏面は白色であるが、一部濃青緑色の部分がある。表面に朱が付着している。

3は1片のみの破片で、外径12.2cmの大きさであるが、内縁を欠く。厚さは、外縁端3.0mm、穀粒部4.3mm、地文3.8mmである。穀粒文は、1・2ほど明瞭でないが、溝状研磨はされている。穀粒文部と外縁には明瞭な段を有するが、裏面は完全に平坦で、裏面と側縁の角



第25図 ガラス壺実測図(2/3)

南小路1号甕棺墓

にわずかな面取りがある。表面は淡褐色、裏面は乳白色を呈し、裏面に流水状の縞がある。

4も1片のみの扇形の破片である。大きさは、外径12.2cm、内径4cmで、厚さは外縁端2.1mm、内縁端2.4mm、穀粒部3.9mm、地文3.2mmで、1と同様に外側ほど薄くなっている。表面は剝離して乳白色を呈すると同時に穀粒文が不鮮明であるが、穀粒間を溝状に研磨しているのは他と同様である。裏面は淡褐色を呈するが、一部剝離して乳白色のところもある。裏面と縁との角は、内縁がわずかに内湾して角が突出するのに対し、外縁が面取りされているらしい。

5は外縁と内縁の一部を残している小片で、4と同様に表面が剝離して乳白色を呈するが、厚さと裏面内縁を大きく面取りしている点が4と違うことから別個体である。大きさは、外径約12cmとなり1～4と大差ない。厚さは、外縁端2.7mm、内縁端2.85mm、内側穀粒部4.9mm、地文4.6mmであるが、外側ほどわずかに薄くなっている。裏面は淡褐色を呈し、ブロック状に剝離する。

6は内縁を欠く破片で、表面は虫食い状に小孔が無数にある。大きさは外径11cmで、1～5より明らかに小さい。厚さは、外縁端3.2mm、穀粒部4.8mm、地文4.4mmで、穀粒文は不鮮明である。裏面と外縁との角に面取りがある。表面は淡褐色、裏面は乳白色部が多く、外縁に朱が付着している。

7は細片で同一個体と思われるものが2片ある。7は内外縁を欠くが、1～6と比較すると極端に薄手であることが特徴。また、穀粒文も丸くて小さいのも他と違う。厚さは、穀粒部が2.6～2.85mm、地文が2.25～2.35mmである。両面共に白色を呈する。大きさは不明だが、『略考』に記載されているような小型ではなかろうか。

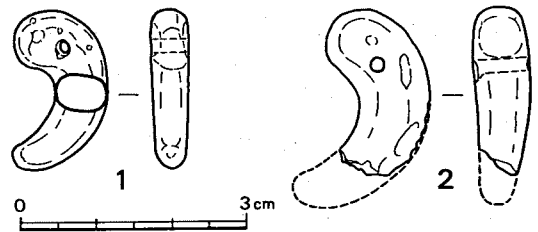
8(図版5)は「資料」の図で、外径二寸八分(8.5cm)、内径七分(2.1cm)、厚さ貳分(0.6cm)のものである。これが最小のものであるが、7とは厚さが違う。『略考』によると「両方共に聖土を塗たる如くにして、半面に霰紋あり、厚サ貳分許、側て見れば、聖土の如きもの、^{シラツチ} ^{ヌリ} ^{アラレノモン} ^{ソバタテ} ^{ナカ} ^{アメイロ} ^{ツヤ} ^{ビイドロ}、中心は飴色にして澤あり、硝子の如し」という。これは現存していない。

⑤ ガラス勾玉・ガラス管玉

『略考』には、「甕中に古鏡大小三十五面、銅銚大小二口、^{マガタマ} ^{クダマ} 勾玉一、管玉一あり、玉はいづれも練物にして鹿也、其数甚多かりしかども、悉く破碎て甕中に泥の如し、其内二ツ全物あり、形いと矮少なり、色は粉紅色なり」とある。これによると、勾玉と管玉各1個の完形品があり、それは小さなものであることが判明するが、勾玉と管玉のいずれが多いのか、両方が多いのか不明である。今回の発掘調査では、管玉が圧倒的に多く出土していることから、勾玉は今回の2個を合わせて合計3個があったことになる。いずれにしる勾玉は、この3個のみであった可能性もあるが、いずれも小型品である点が難点である。

勾玉(巻頭図版1-3、図版22-2、第26図) 1は完形品で、全長21.1mmの大きさ。頭

部最大幅8.45mm, 尾部幅4.65mm, 頭部厚さ4.95mm, 尾部厚さ3.95mmで, 割合扁平な横断形をしている。孔は若干一方が大きく径2.0mmで斜行して貫通している。表面は全体に光沢のある白色を呈するが, 気泡状の小さな円形のくぼみが多く, 朱が付着している。



第26図 1号甕棺出土ガラス勾玉実測図(実大)

2は尾部を欠損し, 現存長21.7mmの大きさ。1と比較すると全体に大きく, 復原すると全長約27mmとなるが, 頭部と胴部の差のない形態をとる。頭部幅9.85mm, 胴部幅9.2mm, 頭部厚さ6.9mm, 尾部厚さ6.1mmを測る。孔はやはり一方がわずかに大きく径2.3mmの大きさである。表面は風化が著しく凹凸が多いが, 全体に白色をしている。孔内に朱が付着している。

管玉(図版22-3, 表1)「略考」などによると多数のガラス管玉が存在したようだが, 今回の調査では計測可能なものが約60個あるところから, 総数は100個以上になる可能性は十分考えられる。

出土した管玉は, 完形品が少ないために, 正確な数値は出せないが, 全体から見ると細形の個別的には均一の外径と孔径をした白色に風化した鉛ガラスの管玉ということができる。計測値から見ると, 長さは完形品で11.2mmから13.1mmのものがあり, 12.5mmのものが多い。直径は, 3.2mmから5.5mmのものがあり, 4.5mm前後のものが多いが, 3・12・30のように一方が大きいものもある。孔径は, 1.4mmから2.65mmの大きさのものまでであるが, 外形に比例するとはかぎらないようだ。玉類は全部に朱が付着しているといえる。

表1 1号甕棺出土ガラス管玉計測表

(単位: mm)

No.	長さ	径	孔径	No.	長さ	径	孔径	No.	長さ	径	孔径
1	11.1	4.15	1.65	10	10.1	3.8	2.15	19	11.1	4.2	1.75
2	12.5	4.45	2.55	11	12.5	4.2	2.1	20	10.2	3.6	1.5
3	12.25	5.5 4.9	2.0	12	13.1	3.85 3.6	1.9	21	10.5	4.25	1.75
4	11.2	4.0	1.95	13	10.85	4.25	1.8	22	9.35	4.25	1.6
5	12.5	4.5	2.25	14	12.9	4.0	1.75	23	8.4	3.8	1.7
6	11.3	4.75	2.1	15	11.2	3.9	1.7	24	12.9	4.4	2.35
7	12.5	4.5	2.4	16	10.6	4.4	2.3	25	10.45	4.1	1.9
8	12.1	4.3	2.1	17	10.7	4.1	2.3	26	10.4	3.9	2.25
9	12.2	4.4	2.3	18	10.1	4.1	1.8	27	10.3	4.2	1.9

南小路1号甕棺墓

No.	長さ	径	孔径	No.	長さ	径	孔径	No.	長さ	径	孔径
28	11.85	4.0	1.9	39	9.2	4.0	1.8	50	7.3	3.5	1.8
29	11.5	4.75	2.5	40	10.65	3.7	1.85	51	8.3	3.6	1.4
30	8.6	3.2 3.9	1.45	41	9.25	3.9	1.45	52	7.2	4.2	1.95
31	11.0	4.35	2.15	42	7.7	4.25	2.15	53	8.45	3.9	1.6
32	11.9	3.9	1.65	43	12.4	5.2	2.4	54	7.4	4.9	2.15
33	12.3	4.5	2.1	44	9.1	4.0	1.7	55	6.9	4.3	1.9
34	10.9	4.1	2.2	45	9.0	4.5	1.45	56	6.6	4.6	2.4
35	11.7	4.45	2.4	46	9.4	5.15	2.7	57	10.75	4.0	1.7
36	10.4	4.6	1.9	47	7.9	4.4	2.1	58	7.1	4.1	1.75
37	10.6	3.9	1.95	48	7.2	4.95	2.65	59	7.55	4.75	2.0
38	11.2	4.4	1.75	49	7.5	4.5	1.7	60	4.8	4.0	1.4

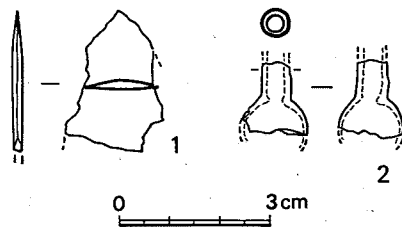
⑥ その他の遺物

1号甕棺内遺物を含んだ攪乱土は、墓壙の南東側凹地のほかに、東側の凹地にも及んでおり鏡の細片や朱が出土しているが、これに混入していた遺物で近代以後のものは別にして、時期の不明な次の3点がある。それは、ガラス小玉・小鉄片・青銅製品の各1点である。

ガラス小玉 (図版22-4) 小玉は、明るい緑味青色(浅葱色)をした不透明なもので、径2.2mm、厚さ1.3mm、孔径0.7mmの小型のものである。本体にほとんど気泡が見られず、表面の光沢は古さを感じさせない。色と質的な面から弥生や古墳時代のものではないだろう。

鉄片 (図版22-4, 第27図1) これは昭和49年度の「井原・三雲遺跡発掘調査概報」で鉄鏃として扱ったものである。錆落しの結果、鉄鏃とするには疑問があるところから、鉄片として扱っておく。当初左右対称に見えた側辺は、一方側にわずかながら欠損部があることと、基部も大きく欠損しており、この形態のものは弥生時代の鉄鏃にないことにもよる。しかも、片面は鑄らしきものがあるが、他面は割合平坦であることもある。しかし、時代的には弥生時代のものでもよいが、形態が不明である以上1号甕棺の遺物としては採用できない。

青銅製品 (第27図2) 昭和50年度の調査で出土したもので、墓壙東側の整地層に接していた。製品は径6mmの管状部と直径13mmの球部からなり、中空である。製品の両端を欠くので、本品が主体部を示すものか、単なる部品であるのかさえ不明。弥



第27図 鉄片, 銅製品実測図 (2/3)

生時代や中国製品に類例がないようであり、1号甕棺に伴わないものとしてよいだろう。第3章の鉛同位対比測定でも同様な結果を得ている。

また、このほかに整地層に含まれていたいかにも新しい玉類などは省略したし、鏡片などが含まれた土には当然ながら近世の陶磁器や瓦片も含まれていた。なお、昭和49年度の概報の鉄鏃1の次に不明銅器片1と記載していたのは、水銀を含む鏃の一種で、鏡などの青銅器に密着していたためにシャープな面が残っていたものであったので、製品としては以上述べてきたものが全てである。

3. 2号甕棺墓

2号甕棺墓とは、昭和50年度の調査で発見した北側の甕棺墓をいう。

(1) 甕棺墓壙（巻頭図版5-2，図版24・25，第28図）

2号甕棺の墓壙は、1号甕棺墓の北西側にあり、1号の墓壙から20cmしか離れていない。墓壙は、南側を後世の攪乱によって破壊されており主軸の長さは不明であるが、復原は可能であろう。墓壙の現状は、長さ2.3m、最大幅2.5m、深さ1.15mの大きさであるが、長さを復原すると2.8m前後のものとなるだろう。墓壙の平面形は隅丸の梯形を呈するが、底面が割合平坦であることも特徴である。墓壙の壁面の北辺の東寄りに横穴を掘って甕棺を挿入するが、深さは1.05mあるものの、甕棺は約75cm奥までしか挿入されていない。墓壙は、横穴を掘る際に北側の床面も長楕円形の舟底状に掘りくぼめているが、これも約30cmの深さでしかない。また、甕棺が墓壙の東寄りに位置することから、東側の墓壙壁が内湾して掘られている。

墓壙は、攪乱によって南側を破壊されているが、墓壙にとっては小規模ながら最大の攪乱が他にある。それは甕棺の合口に当る部分で、横穴の入口に相当する部分を破壊している。すなわち、これが第1回目の攪乱で、これによって棺内と甕棺の合口部が荒されたのである。第2回目の攪乱が南側を破壊したのであるが、この攪乱は上甕の底部に当たるところから、結果的に上甕の約半分を破壊するまで進んでいる。しかし、この攪乱は甕棺のみに集中したらしく、それ以上に墓壙の床面さえ破壊していない。

墓壙で問題となるのが、床面で発見された鏡片である。昭和50年度の概報には、「甕棺東側の墓壙床面には、5面分の鏡片が副葬されていた」と記載している。これは、棺内の攪乱土内で鏡片その他が出土する場合にかなりの朱が検出されるのに対して、墓壙内の鏡片はまったく朱を伴わずに床面でのみ出土することから、墓壙内のものは鏡片供献あるいは祭祀と考えたからであった。ところが、最終的な遺物整理によって墓壙内の鏡片と攪乱された棺内の鏡片と

南小路2号壙棺墓

接合できる同一個体のものが2面分あることが判明した。このことから、1回目の攪乱で上壙内に残った鏡片を2回目の攪乱で上壙内に残った鏡片を2回目の攪乱によって墓壙内に散乱したとすることもできるが、難点は残っていた上壙内の攪乱土中には壙棺片以外の遺物は発見できなかったことである。しかし、上壙内には朱が塗布されていないことと、2回目の攪乱壙の床面が同時に墓壙の床面であったとすれば、墓壙内の鏡片は2回目の攪乱によって散乱したとする方が無難に思える。2回目の攪乱が部分的に墓壙の床面に達していたのは事実であるから、副葬に際して鏡片を棺内と棺外に分けたとするよりは難点がなからう。

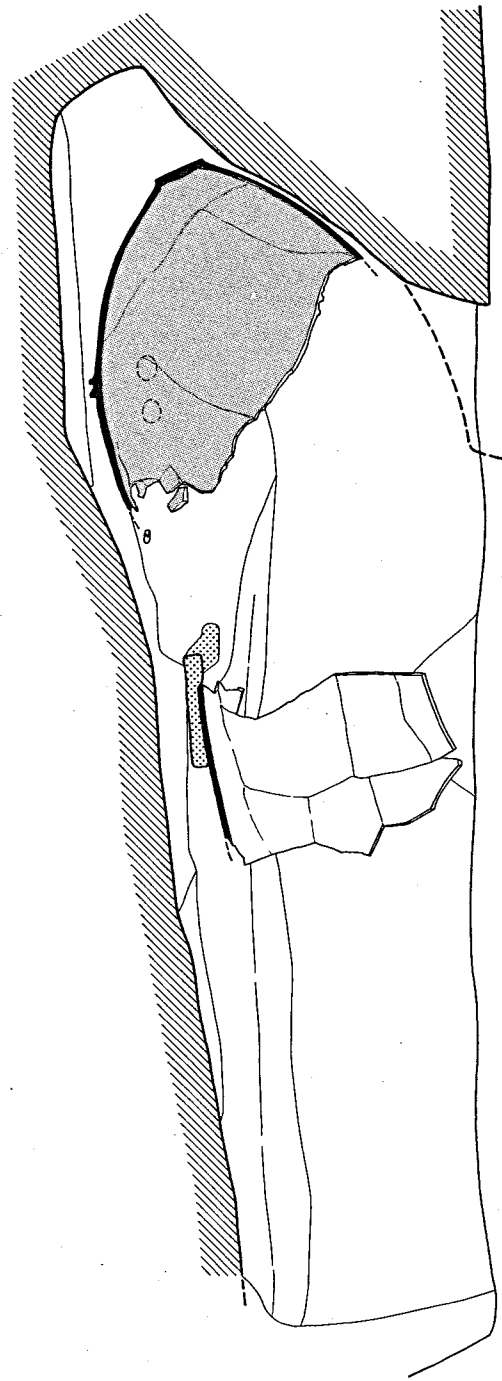
(2) 遺物の出土状態 (巻頭図版6, 図版26・27, 第28図)

2号壙棺は、2回の攪乱によって大半の遺物が失われたと思われるが、攪乱土中にかなりの遺物が残っていたことも幸いした。また、半分以上を破壊されながらも壙棺本体が原位置に残っていたことと、棺内に1面の完形鏡が原位置にあり、棺壁に残る鏡の「影」と合わせて、鏡副葬の実体を把握することができた。

前述したように、1回目の攪乱によって棺内のみが荒され、棺内の遺物が散逸したが、攪乱後流入した土砂に多くの遺物が含まれていたことは幸いした。棺内に副葬されていた遺物の総数は、これらの遺物を整理復原したことによって、最低数はつかむことができたが、実数は不明といわざるを得ない。

2号壙棺は、墓壙を検出した当初から墓壙端に朱が混入した部分があることがわかり、南側の攪乱壙をさらえると同時に、朱が混入する小穴の調査にも着手した。掘り始めて間もなく朱混入土の中で鏡片を発見することができた。すなわち、棺内流入土のいたるところで朱や鏡片が出上し、これが壙棺内であることが判明したのは遅れてからであった。むしろ、棺内の床面が判明してからは遺物の量が少なくなったが、下壙西側内壁に密着していた原位置の鏡1面のほかに勾玉の4・5個が壙棺合口部中央付近の床面近くに集中していた。しかも、最後に出土した硬玉勾玉は、攪乱壙の床面にあった。しかし、これらの勾玉が出土した位置は、床面になっている壙棺でさえ破壊していたので原位置ではない。ただ、勾玉が合口部中央付近に副葬されていたことは予想されるし、壙棺の傾斜から考えてもこの位置が被葬者の頭部に当ることは確実であろう。すなわち、副葬品が集中していた合口部が最も荒される結果となったが、勾玉のような小物は、壙棺を破壊したからこそ原位置近くに残存したのであろうと考える。

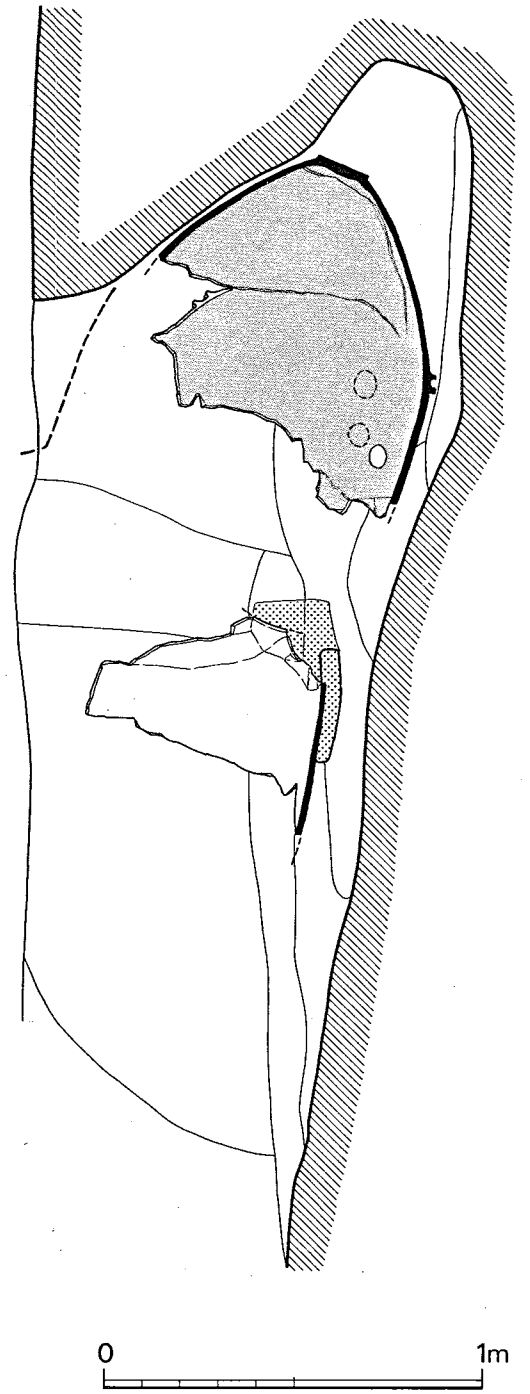
鏡の位置は、原位置のものが主軸中心から離れた被葬者の左脇に当たる位置にあるが、これは下壙の口縁から鏡の中心までの距離が42cmのところである。さらに、実物の鏡はなかったが、不鮮明ながら同様な位置に円形の影が残っていた。この影は、棺内壁にかろうじて朱が付着しているなかで、朱が付着せずに黒味ある縁取りの円が観察できるもので、棺内壁の乾燥具



標高 41.6m



標高 41.6m



第 28 图 南小路 2 号甕棺墓实测图 (1/20)

合によって見えなくなるものもある。何よりも、この円形影の大きさが、復原整理できた鏡の大きさと合致することがうれしい。鏡影の位置と大きさは、左側で口縁から49cmのところ、直径6.5cmの影、63cmのところ、直径約7.5cmの影、右側で57cmのところ、直径6.5cmの影、68cmのところ、直径6.5cmの影があった。さらに、破壊された下甕を復原したところ、中央に近い左側に当たる口縁から12cmのところ、直径8cmの明瞭な影を持った破片が接合できた。

これらの鏡の影に出土した実物を照合すると、原位置にあったのが8号鏡の日光鏡、その横と右側の2面が径6.5cmであるから、9・12～16・20・21号鏡など8面の日光鏡がある。左側の最下にある径7.5cmが1号の星雲鏡、7・10・11号鏡の日光鏡がある。この場合1号鏡は棺外、10号鏡は一部が棺外墓壙で発見された破片であり、朱を伴っていないことから除去しておいた方がよいであろう。最後に頭部近くにあった直径8cmの鏡は、4号鏡のような昭明鏡であろう。

なお、鏡以外に青銅利器や鉄器の痕跡は、棺内には見られなかった。

また、1回目の攪乱は、1号壙棺より早い中世であったらしく、近世の遺物はまったく見られないと同時に、出土するのは青磁や土師器の細片であった。この時期のものは、南小路I-5に近接して遺構があることで当然であるし、1号壙棺の遺物は2号に混入していないが、2号壙棺片は少量ながら1号壙棺攪乱壙に混入していた。

(3) 壙 棺 (巻頭図版7)

2号壙棺は、ほぼ同形同大の超大型甕を合口にした接口式の壙棺である。壙棺は、墓壙の主軸とほぼ一致したS31°Wの方向に向け、約20度の傾斜に埋設されている。埋設に際しては、両甕の合口部の外面に3～5cmの厚さに青色粘土を巻いて密封している。埋設された合口壙棺の外形は、全長2.43m、最大径90cmの超大型墓となり、他に類例を見ることができない。

上 甕 (図版28-2, 第29図) 上甕は、底部付近を欠損し、胴部も3分の1以上の破片がない。現存高106cm、口縁外径83cm、口縁内径65cm、胴部最大径87cm、凸帯部外径86.8cmの大きさで、底部を復原すると高さ121cmとなる。口縁部は、多少傾斜のある逆L字形で、口唇部を幅8.8cm、厚さ2.4cmに補強した堅牢な作りである。口縁下には、断面台形の貼付凸帯が1本めぐらされている。胴部は、さほど張出すことなく胴下半にいたるが、口縁から50～60cmのところ、最大となっている。胴部凸帯は、最大部より下にあり、貼付のコ字形凸帯を2本めぐらしている。この甕は全体的に見ると、胴部凸帯から上が著しく長く作られており、超大型甕を作るために胴部凸帯から上を伸ばしたことがわかる。

粘土帯の接合は、胴部凸帯の下8cmのところ、擬口縁があるところから、ここで一度中断されているが、少なくとも胴部下半が外側から内側に傾斜した面を持ち、胴部上半はその反対と

南小路2号甕棺墓

なっている。粘土帯は、結果的に幅9～11cmのものとなっているが、その接合に際して胴部中位で約半分を上下の粘土帯に重複させている。口縁部近くにいたっては、粘土帯の3分の2を重複させ器肉の厚さを増して補強している。

器面の調整は、口縁上面にヨコの粗いハケ目が見られ、内側端部と外面は口縁下9cmのところまでヨコナデが見られる。以下内外面共にナデ調整が行われているが、器表面に化粧土が塗られているらしく、器面の保存のよいところは胎土中の細砂粒は肉眼で観察することができない。しかも、器面の化粧土上にはハケ目や板痕は見られず、布又は皮でナデ調整したと見られる微細条痕が見られるだけである。

胎土は、器面の保存のよいところが全体的ににぶ橙色であるが、化粧土の剝離したところはうす橙色に近い明るい色を呈する。部分的には、にぶ赤味橙色のところと黒斑がある。胎土に細砂（石英・長石）を含むが、微細な金雲母と角閃石も観察できる。

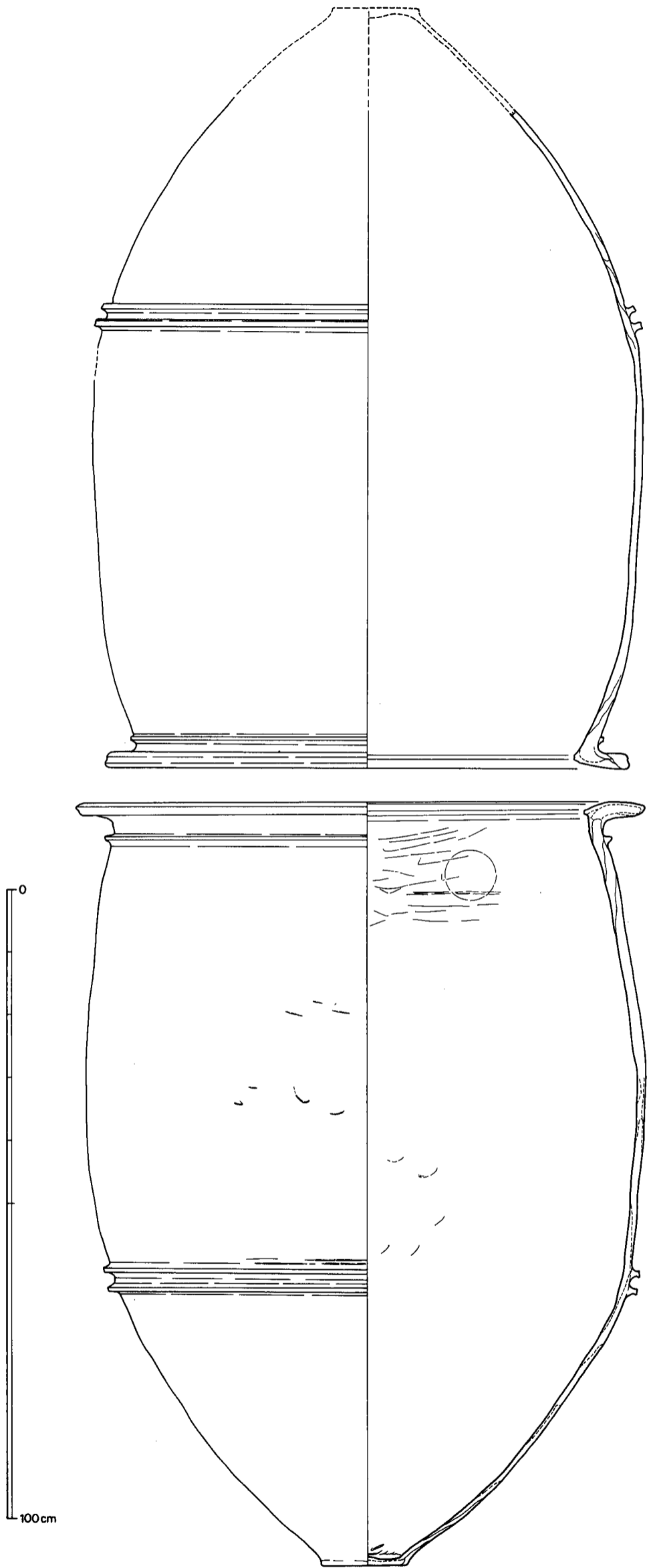
また、甕棺外面には黒色顔料が塗布された痕跡があるが、内面には黒塗りの痕跡も朱塗りの痕跡もない。

下 甕（図版28-1、第29図）下甕は、全形を復原することができたが、上半の3分1弱が欠損している。大きさは、器高122cm、口縁外径90cm、口縁内径71cm、胴部最大径89cm、胴部凸帯外径85cm、底部径13.9cmである。口縁部は、上部平坦面に丸味のある逆L字形で、幅9.7cm、厚さ2.7cmの堅牢なものに作られ、内側に0.7cmほどコ字形に突出する。口縁下の凸帯は、背の高い台形を呈するものが1本めぐり、胴部は、上甕と同様にさほど張出さず、口縁から50cm位のところで最大となる。やはり、胴上半を伸して作っているところから、胴部凸帯は下位に位置し、貼付のコ字形2本をめぐらしている。

粘土帯の積上げは、胴部凸帯から下半が外側から内側に傾斜した接合、上半がその反対の接合法をとっているが、胴部中位と下半部中位に擬口縁らしきものが見られる。粘土帯は、幅12～15cmほどのものになり、約半分ほどを重複して接合しているが、上半部ほど器肉を厚く仕上げている。底部の接合は、1枚の円板を基本に、さらに内側に重ねた1枚を伸ばしているが、一方で外側から円板と両方を補強している。器肉の厚さは、底部で1～1.4cm、下半の最薄部で0.6cm、上半の口縁凸帯下で2cmとなっており、下半部がいかに薄く作られているかわかる。

器面の調整は、口縁上面が粗いハケヨコナデ後にかかるくヨコナデされ、内側端部と外面は口縁下12cmほどのところまでヨコナデされている。さらに、胴部凸帯付近はヨコナデされているが、その他の胴部外面は条痕がつかないヘラ（板）状具でナデ仕上げされ、ナデ端部にその圧痕のみを残している。内面胴部も外面と同様であるが、口縁直下のみ粗いケズリ状のヘラナデが行われ、口縁下23cm以下の丁寧なヘラナデと対照的である。また、内外面共にヘラ状工具によって寄せられた化粧土の溜りがところどころに見られる。

胎土には、細砂（石英・長石）を少量含むが、微細な金雲母と角閃石らしきものも含まれる。



第 29 図 南小路2号寝棺実測図(1/8)

甕棺内外面の表面はにぶ橙色で、内部はうす橙色に近い胎土をしている。外面には、径16~50cm大の黒斑が4ヶ所に見られる。

甕棺内面には部分的に朱が付着しているが、塗布されたものであるかどうか不明。しかし、外面は明らかに黒色顔料が塗布されている。なお、口縁部上面の黒塗りは不明である。

下甕は、全体的に見て器形が均一ではなく、口縁の傾斜や口縁下の凸帯が波打っている。胴部のふくらみも一定せず、図の断面部と反対の外形線部だけでも違っている。

(4) 副葬品

2号甕棺墓の副葬品は、1号甕棺墓のような記録がないので実態が不明である。したがって、出土品の実数から推測するしかない。

棺内に副葬されていたと思われる遺物は次のとおりである。

前漢鏡 22面以上

星雲文鏡 1

連弧文「昭明」銘鏡 4

重圏「昭明」銘鏡 1

連弧文「日光」銘鏡 16以上

ガラス製垂飾 1

勾玉 13

硬玉勾玉 1

ガラス勾玉 12

2号甕棺には、多量の鏡と玉を持ちながら武器を副葬していないことが問題となるが、攪乱されていることから大型の遺物は容易に目に付き取出された可能性がある。この点からすると小物の玉類は別として、大型鏡もこの対象となる可能性がある。しかし、鏡の場合は不用意に取上げると破砕しやすいことから、今回発見の6号鏡のように破片として残る可能性が強いため、中型や大型鏡が存在したとしても複数ではないと考える。武器が存在した場合は、それが青銅製であるか、鉄製であるのかが関心の持たれるところであるが、甕棺内にはいずれの錆などの痕跡もなかった。武器が鉄製であった場合には錆が残り易いが、青銅製の場合は鏡のように輪郭が密着しないかぎり、それとは判断できないだろう。少なくとも鉄製武器は副葬されていなかったと見てよいが、青銅製武器の場合も可能性は少ないだろう。

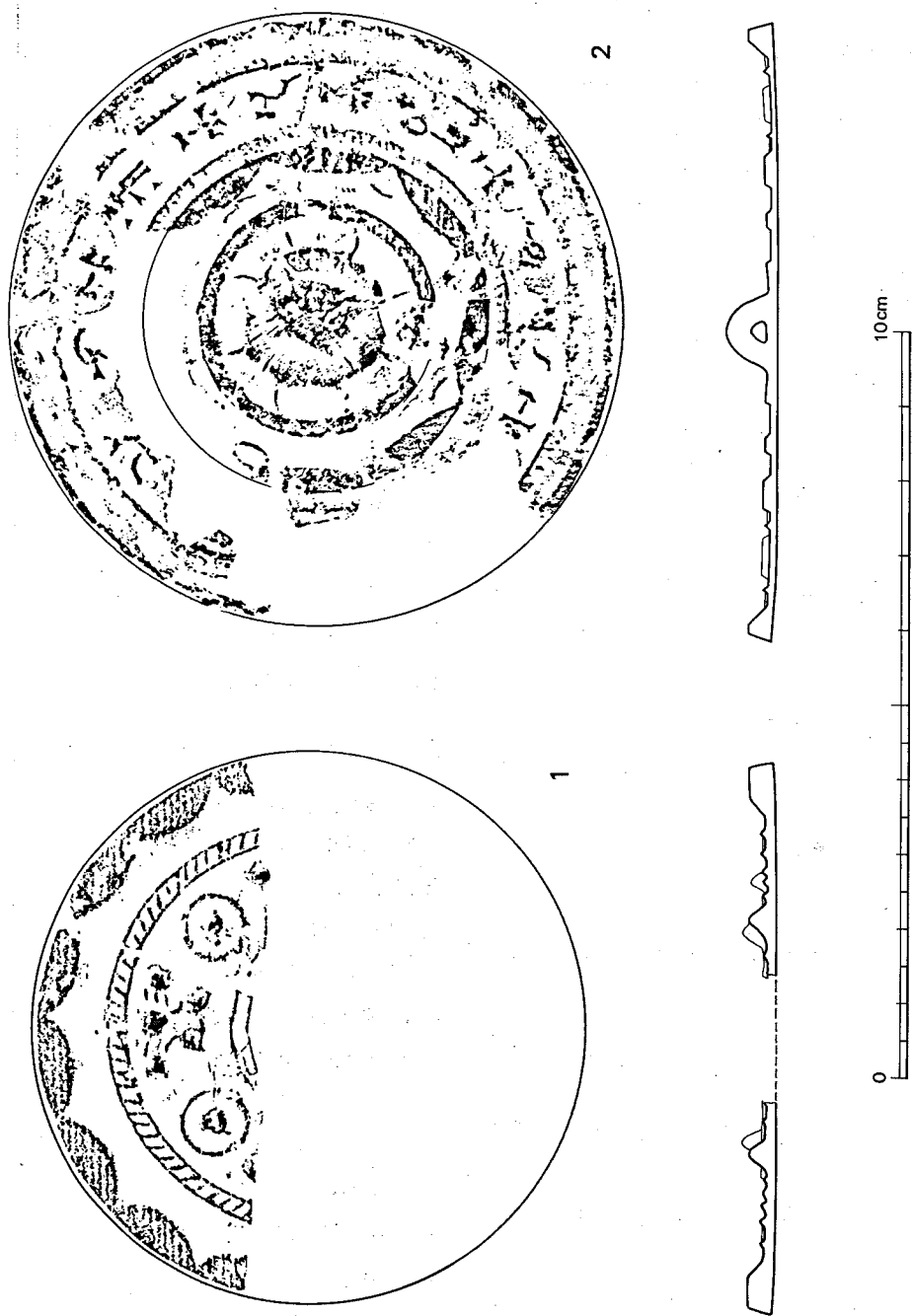
① 銅鏡

2号甕棺墓の副葬品は、1号甕棺墓と同様に銅鏡の占める比率が最も大きい。2号甕棺墓に副葬された銅鏡は、直径6cmから11.4cmの小型鏡のみで、1号甕棺墓が中型鏡を主体として大型鏡をも含むのと対照的である。したがって、2号甕棺墓の場合は、鏡の個体差が少ないために細片の個体識別が困難である。2号甕棺墓の銅鏡は、前漢鏡のみの副葬で22面を識別した。

表2 2号甕棺出土前漢鏡一覽表

号	型 式	直 径 (cm)	縁 厚 (mm)	上縁幅 (mm)	特 徴
1	星 雲 文 鏡	7.4	3.5	4.3	背面全面に赤色顔料塗布。 鈕欠損。 円座乳。
2	連 弧 文 「昭明」銘鏡	8.3	3.25	1.25	細片に破碎。保存状態不良。 円圈，円座鈕，鈕径10.85mm。 背面に赤色顔料塗布。
3	連 弧 文 「昭明」銘鏡	8.3	(3.4)	(2.0)	細片に破碎。大半が欠損。保存状態不良。 円圈，円座鈕，鈕径10.85mm。 背面に赤色顔料塗布。
4	連 弧 文 「昭明」銘鏡	8.0	3.25	1.2	1/4ほどの破片。型くずれあり。 円圈，円座鈕。 赤色顔料付着せず。
5	連 弧 文 「昭明」銘鏡	6.2	2.15	1.9	細片に破碎。保存状態不良。 円座鈕。 背面に赤色顔料塗布。
6	重 圈 「昭明」銘鏡	11.4	5.95	3.5	鏡縁と銘帯の一部。 背面に赤色顔料塗布。
7	「日光」銘鏡系	7.6	4.5	2.3	鏡 縁。 背面に赤色顔料付着。
8	連 弧 文 「日光」銘鏡	6.36	3.05	1.1 1.3	完形。32.8g。保存良好。 円座鈕，鈕径10.85mm。 赤色顔料わずか付着。
9	連 弧 文 「日光」銘鏡	6.5	3.25	1.0	1/8ほど欠損。保存良好。 円座鈕，鈕径11.0mm。 背面に赤色顔料付着。
10	連 弧 文 「日光」銘鏡	7.2	3.65 3.8	1.8	半分ほど欠損。 円座鈕，鈕径12.15mm。 背面に赤色顔料塗布。

号	型 式	直 径 (cm)	縁 厚 (mm)	上縁幅 (mm)	特 徴
11	連 弧 文 「日光」銘鏡	7.4	4.2	2.5	小片。保存状態不良。 背面に赤色顔料付着。
12	連 弧 文 「日光」銘鏡	6.5	2.75	1.3	1/6ほどの破片。保存良好。 背面に赤色顔料塗布。
13	連 弧 文 「日光」銘鏡	6.5	3.2 3.35	1.35 1.4	1/6ほどの破片4片。 背面に赤色顔料付着。
14	連 弧 文 「日光」銘鏡	6.4	2.95	1.2	1/6ほどの破片。保存良好。 面取りあり。 背面に赤色顔料塗布。
15	「日光」銘鏡	(6.5)	3.5	1.9	鏡縁と銘帯の一部。 面取りあり。 背面に赤色顔料付着。
16	「日光」銘鏡	(6.5)	3.1	1.05	小片。鏡縁と銘帯の一部。 背面に赤色顔料塗布。
17	「日光」銘鏡系	7.5	2.45	1.0	鏡縁と櫛歯文帯のみ。細片。 棺外の同所出土に円鈕座の細片あり。 背面に赤色顔料塗布。
18	「日光」銘鏡系	(8.2)	3.8	2.4	鏡縁の細片2個。 1片の背面に赤色顔料塗布。
19	「日光」銘鏡系	6.0	3.25	1.7	鏡縁と銘帯の一部の細片1個。 背面に赤色顔料塗布。
20	「日光」銘鏡系	6.5	3.6	1.45	鏡縁と銘帯の一部の細片。 背面に赤色顔料塗布。
21	「日光」銘鏡系	(7.0)	2.5	1.35	鏡縁と銘帯の一部の細片。 背面に赤色顔料付着。
22	「日光」銘鏡系	7.0	3.25	1.7	鏡縁の細片。 背面に赤色顔料塗布。



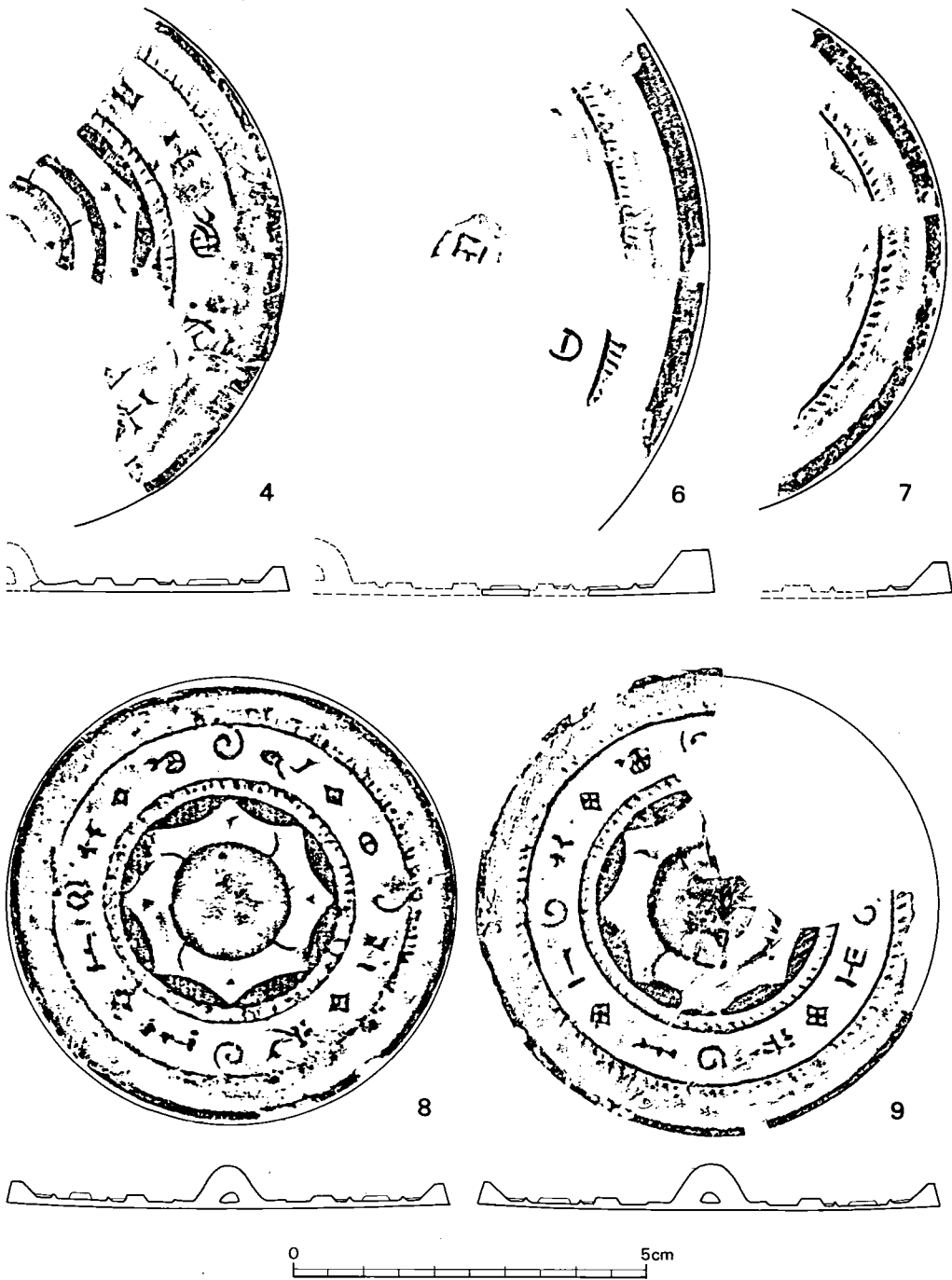
第 30 图 1 星雲文鏡 (徑7.4cm) 2 連弧文「昭明」銘鏡① (徑8.3cm)

鏡の個体識別に当っては、第1に鏡型式の違い、第2に鏡の直径の違いで識別したが、鏡縁のものでは識別できないので、鏡縁の厚さと上縁幅の差によって個体分けした。この場合、とくに「日光」銘鏡系のもので直径6.5cm前後のものが10面前後あり、このうち鏡縁のみの15号鏡以下をどう識別するかが問題となった。すなわち、鏡縁が錆で計測不可能な場合はその鏡片は除外し、錆やふくらみがない部分があって計測可能な鏡片のみを識別して個体分けした。この場合、別個体として識別した基準は、鏡縁の厚さと上縁幅のいずれかが0.3mm以上の差があるものとした。これは、完形鏡やそれに近い鏡の数箇所を計測した結果、同一個体はこれ以内の差にとどまる結果を得たからである。また、数値差が0.3mm前後の場合は、楯歯文や銘帯等の厚さなども参考にした。

1 星雲文鏡（図版29-1、第30図1） 棺外の墓壙床面から2片に分かれて出土したが、本来の位置であるか疑問のあるもの。鏡は、鈕を欠損した約半分の破片。鈕座は細線円圈座で、円座乳を4個配置する型式。鏡直径が7.4cmと小型であることから、文様帯の省略が目立ち、16連弧文縁はあるものの、内帯の連弧文は完全に省略し、小乳も5個一組となっている。なお、小乳頂部や鏡縁各角にわずかながら摩滅による丸味が見られるが、縁側面のヨコの粗い研磨痕は残っている。また、背面全面に赤色顔料が塗布されているが、縁側面と鏡面には付着していない。

2 連弧文「昭明」銘鏡①（巻頭図版4-3、図版29-2、第30図2） 棺内に散乱していた細片が5分の3ほど復原できたもので、保存状態が悪い。鏡は円座鈕に円圈をめぐらし、細い8連弧文帯をもつ。銘帯には、楔形書体で「七、内而清而以而昭而明、光而」とあり、「而」が1字毎に挿入されているのが特徴。鏡面と背面の鑄造後研磨する縁・弧文・円圈・鈕と鈕座は黒色の光沢があるが、背面の他の部分には全面に赤色顔料が塗布されている。なお、鈕孔や縁の各角は鋭利で摩滅はなく、縁側面もヨコの粗い研磨痕が残っている。3号鏡と同型鏡の可能性あり。

3 連弧文「昭明」銘鏡②（図版29-3、第34図3） 2号鏡と同じ直径8.3cmの鏡であるが、2号鏡より保存状態が悪く、破片も少ない。3号鏡は、鏡縁が少なく保存が悪いので正確な数値は出せないが、若干2号鏡より厚目の数値が出ている。これが2号鏡と同一個体でないことは、鈕・円圈・銘文の「清」が接合できるし、この部分が2号鏡と重複していることで明らかであろう。ここで問題になるのは、鏡法量の数値と共に、銘文の「清」の字が2号鏡の「清」と楔形書体と大ききまで同一とってよいことである。ここでは、3号鏡に鏡片が少ないことと、全体に保存が悪いことから2号鏡と同型鏡の可能性のあることを指摘しておくにとどめたい。銘帯には、「而」「清」の2字のみがある。鏡には、背面の文様間に赤色顔料が塗布されている。なお、墓壙出土小片に連弧文・銘帯の一部の小片があるが、銘文は「田丙」らしく、これが正しいとすると、2号鏡とは同型鏡にならない。しかし、この小片が3号鏡の破片であ



第31图 4 连弧文「昭明」铭镜③ 6 重圈「昭明」铭镜
7~9 连弧文「日光」铭镜①~③ (实大)

る確証もないことから、別個体の可能性もある。

4 連弧文「昭明」銘鏡③（図版29-4, 第31図4） 2・3号鏡と同型式であるが、直径8.0cmとわずかに小型で、鈕を欠く4分の1ほどの破片。直径が小さい分が、円座と円圏の間や弧文が最も幅が狭くなっている。銘帯には、「昭而明，光而」とある。鏡は、鏡面・円圏上面・弧文上面・縁の各面がよく研磨され、各角は摩滅することなくシャープであるが、銘文の「明光」の部分から縁にかけてに型くずれがあり、地膚に小さな凸凹が著しい。また、鏡全体に完全に赤色顔料が付着しないのは、2号壙棺では本例のみである。

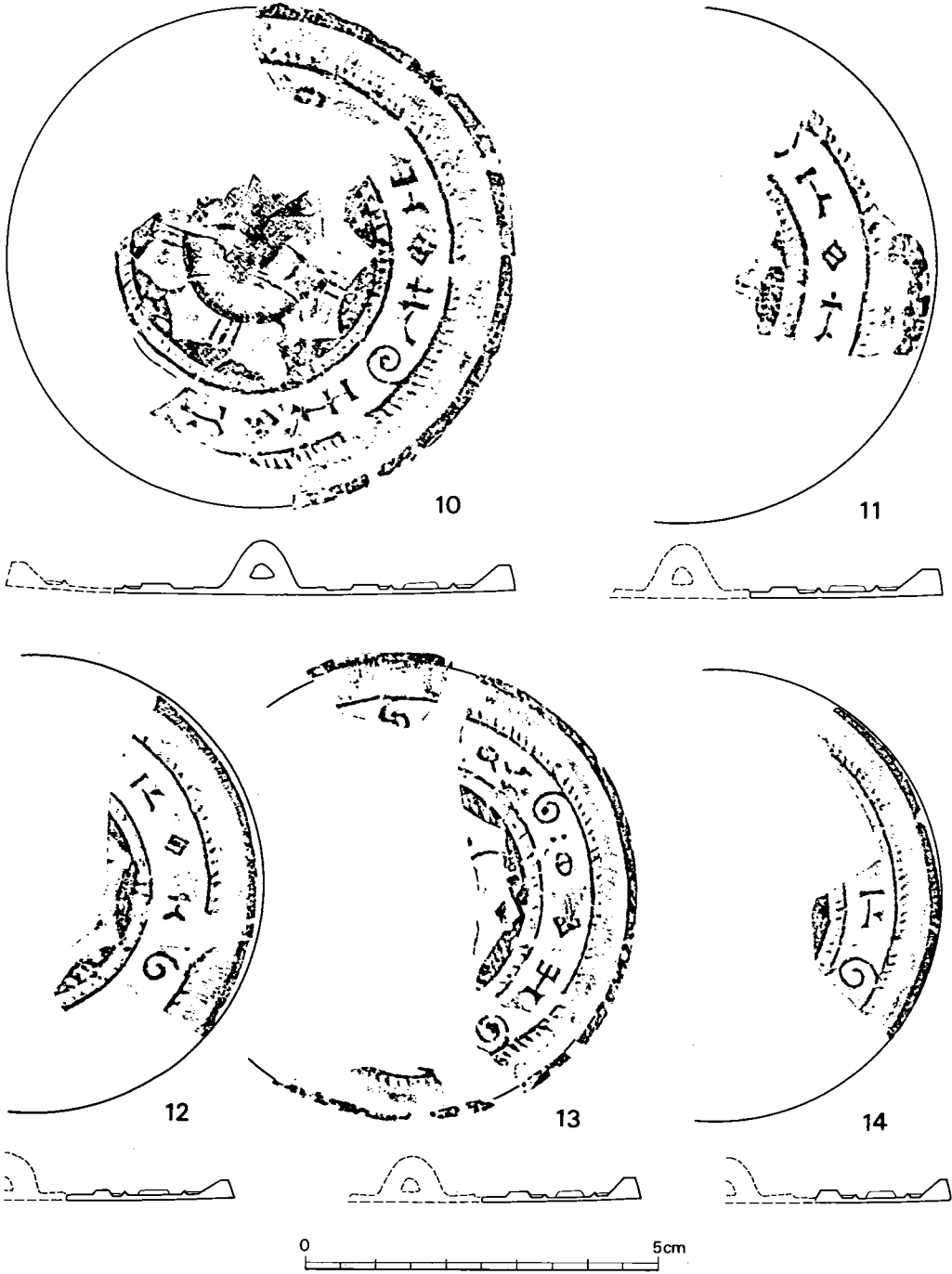
5 連弧文「昭明」銘鏡④（図版29-5, 第34図5） 本鏡は、「昭明」銘鏡では最小の直径6.2cmの大きさ。また、鏡縁も厚さ2.15mmと薄いために、縁上面幅1.9mmでも広く扁平なものとなっている。本鏡は小型であるために、円圏が省略され、円座の次に連弧文帯となっている。銘帯には、「内而」「夫」とあるが、書体は細く弱々しい。鏡背面の文様間には、赤色顔料が塗布してある。なお、鏡は保存が悪く、鏡面の剝離が著しく、現状では拓本がとれない。

6 重圏「昭明」銘鏡（図版29-6, 第31図6） 本鏡は、縁と銘帯の一部の小片であるが、直径11.4cmあり2壙棺副葬品中最大のものである。銘帯には、同一厚さの「月」らしきものと菱形文がある。「月」の書体で本例のように中の点が縦線状になっている例は、「巖窟藏鏡」（第二集上, 第54図）や中国陝西省長安洪慶村出土鏡（径12cm）（註2）にあることから「昭明」銘鏡とした。しかし、この2例は連弧文型式で、本例のような菱形文が同一個体とすると五島美術館藏鏡〔114〕（図版30-2）や「筑前須玖史前遺跡の研究」の第35図の(2)のように内銘帯に「日光」銘を持つ重圏「昭明」銘鏡でなければならない。本鏡の文様構成は、直径10cm位のものから鈕座に連珠文が使用され、11cm以上のもののが大半が連珠文になるところから、五島美術館藏鏡のように連珠文座・円圏・内銘帯・円圏・外銘帯の型式をとると思われる。

なお、背面には赤色顔料が塗布されている。

7 「日光」銘鏡系①（図版31-7, 第31図7） 鏡縁が2片あるだけであるが、直径7.6cmから「日光」銘鏡とした。しかし、5号鏡に例を取るまでもなく、「昭明」銘鏡の可能性も強い。鏡縁は、各角がシャープで、側面のヨコの研磨痕が明瞭である。背面には、赤色顔料が付着している。

8 連弧文「日光」銘鏡②（巻頭図版4-1, 図版31-8, 第31図8） 1・2号壙棺墓を通じて唯一の原位置出土であり、完形鏡である。棺内で被葬者の両側に一列に並ぶなかで、左側上腕部付近に副葬されていた直径6.36cmの小型鏡。文様構成は、円鈕・円座・連弧文帯・銘帯からなる。銘帯には、「見日之光，天下大明」の楔形書体の文字と、各字間に渦文と菱形文を交互に配している。鏡背面は、出土の際に鏡と壙壁間に土が詰まらない空間があったためか、取れにくい錆が多く付着している。また、微量ながら赤色顔料らしきものが付着している痕跡もある。



第 32 図 10~14 連弧文「日光」銘鏡④~⑧ (実大)

9 連弧文「日光」銘鏡③(図版31-9, 第31図9) 8号鏡と同型式であるが、直径は6.5cmの大きさである。銘帯は、「之光, 天下大明」があり、「見日」を欠損している。各字間に渦文と菱形文を交互に配するのと同様である。鈕孔内には紐らしきものが残存しているが、鈕孔の両端縁角はシャープで摩滅していない。背面の文様間には、赤色顔料が付着している。

10 連弧文「日光」銘鏡④(図版31-10, 第32図10) 棺内攪乱土中のもとの墓壙床面で発見された破片が接合できたものである。鏡式は8・9号鏡と同じで、銘帯に「之光, 天下」とあり、各字間に渦文と菱形文を交互に配する。背面に赤色顔料を塗布している。

11 連弧文「日光」銘鏡⑤(図版31-11, 第32図11) 鏡の直径7.4cmで、南小路の確実な連弧文「日光」銘鏡としては最大のものであるが、10号鏡と非常に似ている。しかし、銘文が重複するし、各字間の渦文と菱形文の位置関係が違うことから同一個体でも同型鏡でもない。銘文は「下大」の2字が残っている。背面にわずかに赤色顔料が付着している。

12 連弧文「日光」銘鏡⑥(図版31-12, 第32図12) 8・9号鏡に似ているが、各字間の渦文と菱形文の位置関係が違っている。銘帯には、「下大」があり、背面に赤色顔料が塗布されている。これも棺内と墓壙床面の破片が接合できた。

13 連弧文「日光」銘鏡⑦(図版32-13, 第32図13) 8・9・12号鏡と似ているが、銘帯の渦文と菱形文の配置は12号鏡と同じ。12号鏡とは、鏡縁の厚さと櫛歯文の太さが違う。銘帯には、「見日之」とあり、「日」の前に…文が配されているのが特徴。2片を接合できないが、数値が近いので同一個体とした。

14 連弧文「日光」銘鏡⑧(巻頭図版4-2, 図版32-14, 第32図14) 小片であるが保存の良好なもので、直径6.4cmの大きさ。この鏡の特徴は、第1に鏡背面の赤色顔料の塗り分けが明瞭なことである。それは、鏡縁と連弧文帯に塗らずに、銘帯など肉の薄い部分にのみ塗布している。この現象は2号壙棺の他の鏡でも見られるが、厚い平坦な部分は剝離の可能性が考えられた。なお、赤色顔料の塗布されない部分はすべて淡緑色に変化している。第2に鏡面と鏡縁側面の角に、鏡縁側面と同じ粗い研磨で面取りされていることである。銘帯には、「下」の文字とこれに続く渦文が1個残っている。

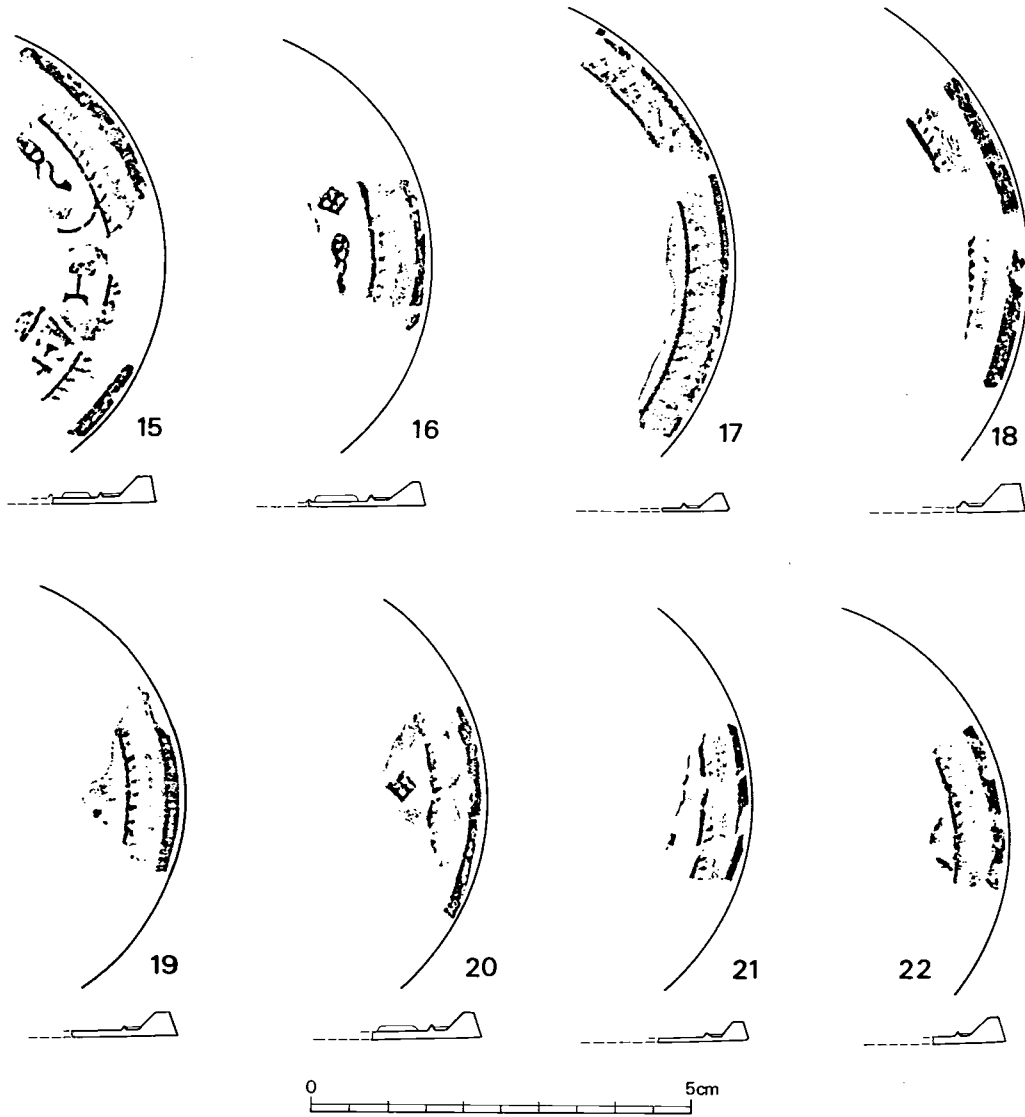
15 「日光」銘鏡⑨(図版32-15, 第33図15) 鏡縁と銘帯の一部が残る3片で、保存が割合よい。銘帯には、「見」・「之」・「光」と弧文があり、2号壙棺出土の他の「日光」銘鏡が渦文と菱形文の組合せであるのに、本例のみ渦文のかわりに弧文が使用されている。鏡面と縁側面との角にわずかに面取りがある。なお、この3片は同一個体とはかぎらないが、縁の厚さと幅は微少差であるところから同一個体とした。背面には、3片共赤色顔料が付着している。

16 「日光」銘鏡⑩(図版32-16, 第33図16) 15号鏡と同様な小片で、銘帯に「見」と菱形文が残っているが、「見」は铸上がりが悪く不鮮明である。背面に赤色顔料が塗布されている。

南小路2号甕棺墓

17 連弧文「日光」銘鏡⑪ (図版32-17, 第33図17) 墓壙床面から出土した小片で, 2個の鏡縁から別個体であることを認定した。なお, 連弧文「日光」銘鏡としたのは, 付近出土の細片に連弧文・渦文・円座の一部が出土していることからであるが, 同一個体となる確証はない。また, 墓壙出土鏡片中には, 円座部の微片もあるが, 「日光」銘鏡で連弧文帯をもつ場合に円座を使用しないだろう。本鏡の特徴は, 直径 7.5cm という割に縁が細いことである。背面には, 赤色顔料が塗布されている。

18 「日光」銘鏡系⑫ (図版32-18, 第33図18) 鏡縁のみ2片あるだけで, 型式は不明。直



第 33 図 15~22 「日光」銘鏡⑨~⑯ (実大)

径が 8.2cm あるところから、「昭明」銘鏡の可能性もある。一片の背面には赤色顔料が塗布してあるが、他片はわずかに付着しているだけ。

19 「日光」銘鏡系⑬(図版32-19, 第33図) これは鏡縁のみ1片で、銘帯の一部があるが銘文は不明。型式が不明な点は

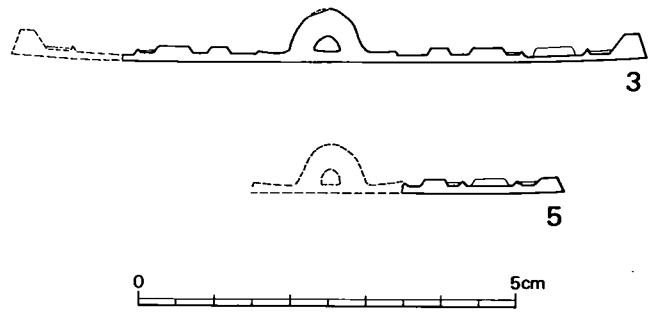
18号鏡と同じであるが、直径が 6.0cmと2号壙棺出土鏡中最小である点からして、「日光」銘鏡とした。背面に赤色顔料が塗布されているが、縁側面にも一部付着している。

20 「日光」銘鏡系⑭(図版32-20, 第33図20) 鏡縁と銘帯の一部の小片で、銘帯に菱形文のみが残っている。計測値は15号鏡に近いが、縁上縁幅に差があることと、本鏡は鏡面との角がシャープであることから別個体とした。背面に赤色顔料を塗布している。

21 「日光」銘鏡系⑮(図版32-21, 第33図21) 直径7cmの鏡で、縁と銘帯の一部が残っている。銘文は不明だが、鏡縁が薄いことと鏡面角の明瞭な面取りが特徴。背面に赤色顔料が付着している。

22 「日光」銘鏡系⑯(図版32-22, 第33図22) 直径7.0cmの鏡で、縁と銘帯の一部が残っている小片。銘帯には、渦文らしき一部が残っている。縁側面のヨコの粗い研磨が明瞭で、鏡面との角もシャープである。背面に赤色顔料が塗布されている。

以上が個体の識別が可能な鏡であるが、このほかに識別不可能な細片が40片以上存在する。2号壙棺墓副葬の鏡の特徴は、一般の壙棺墓と比較すれば多数副葬である点が第1の特徴となるが、多数鏡副葬墓と比較すると小型鏡に限定されるところに第1の特徴がある。このことは、隣接した1号壙棺に大型と中型鏡が集中することと比較するとなおさらである。しかし、前述したように、2号壙棺に中型鏡が副葬されていたものが攪乱によって排除されたのであれば多少条件が違ってくるが、中型鏡が多数あったとは考えられない。ちなみに、1号壙棺の場合でも無傷で取出されたのは、1・2面であつたらしく、「資料」に完形鏡が1面存在するだけである。このように考えてくると、三雲以外では最多数の前漢鏡を副葬する須玖岡本D地点大石下壙棺墓が問題になってくる。須玖岡本は、30面前後の前漢鏡を副葬するが、大型・中型鏡の中に小型鏡を8面前後含んでいる。須玖岡本遺跡の実態は不明な点が多いが、もし1基の壙棺墓に大型から小型鏡までを混在させたものであるとすれば、弥生時代から古墳初期の期間では特例となることから、逆に三雲の1・2号壙棺墓は順当であることになる。しかし、須玖岡本



第34図 3・5 連弧文「昭明」銘鏡③・④(実大)

南小路2号甕棺墓

の場合は、夔鳳鏡のように明らかに時期の違うものは除外するとして、1基の出土品として銅剣2本、銅矛6本は多いように思えるし、三雲のように隣接した2基以上が混入した可能性も考えなければならない。

南小路2号甕棺墓副葬の鏡の第2の特徴は、鏡背面に赤色顔料を塗布したものが多くということである。赤色顔料を塗布した鏡は、22面中で確実なもの14面、可能性のあるものがさらに5面あり、確実に塗布していないのは4号鏡の1面のみである。このほかに2面がわずかに赤色顔料が付着しているものがあるが、このうち1面も塗布したものと考えてよいだろう。というのは、他の弥生墓地や古墳は別として、この2号棺は棺内に水銀朱を塗布または散布しているが、鏡背面に塗布又は付着しているのは鮮かな茜色の朱ではなく、暗いベンガラ色である。さらに、このベンガラらしい顔料は、鏡背面の全面に塗布されるのではなく、鏡縁・連弧文上面・円圈上面には塗布されていない可能性が強い。しかし、星雲文鏡は連弧文縁の上面には確実に塗布しているところから、他の鏡式も塗布したものの、上面の平坦面は铸造後なめらかに研磨しているところでもあり剝離しやすい可能性もある。いずれにしろ、弥生時代において赤色顔料を鏡背面に塗布することは特例であるといえ、副葬品の構成から被葬者が女性である可能性があることも考え合わせると、祭祀的色彩の強さをいっそう感じてならない。

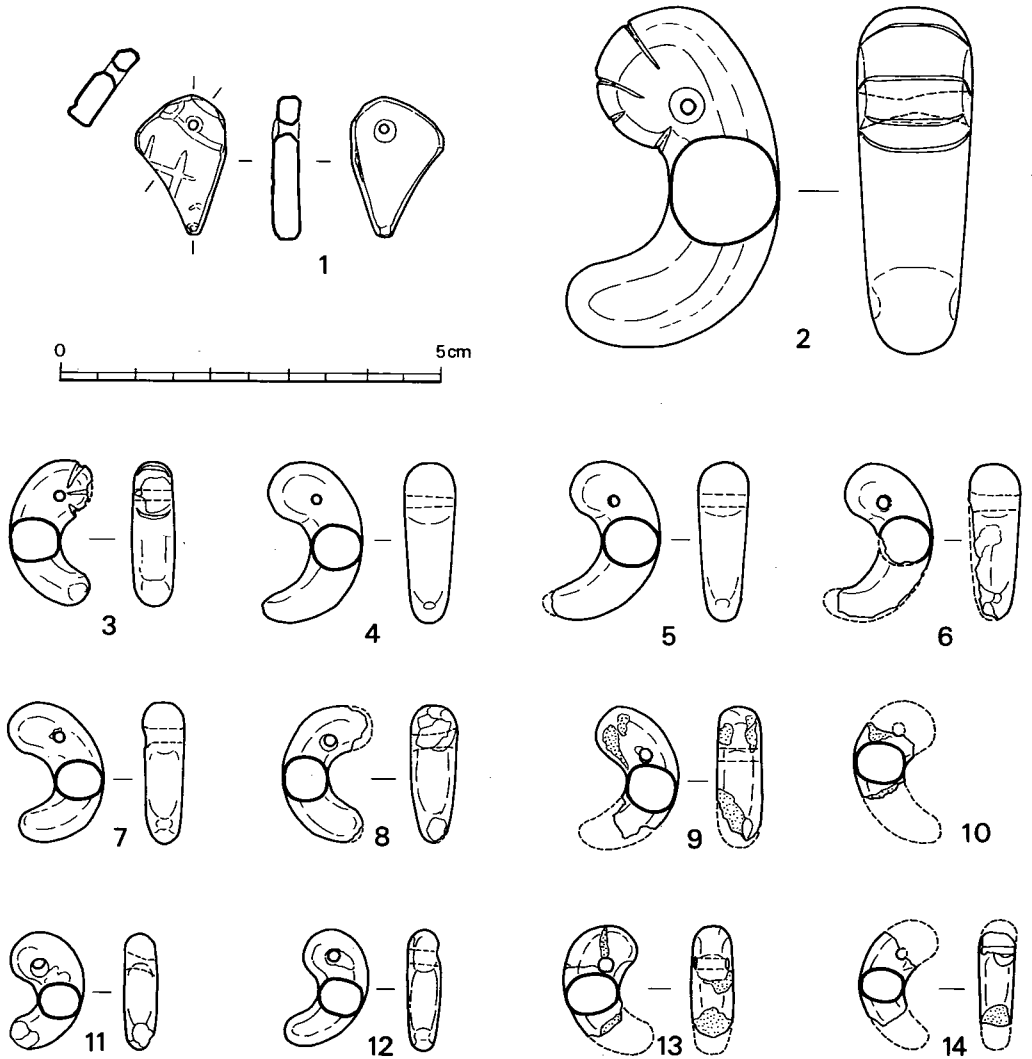
② ガラス製垂飾（巻頭図版4-4、図版33-1・2、第35図1）

これは棺内攪乱土中の発見で、平面的には甕棺の合口付近から出土したが、床面から20cm以上浮いていた。出土位置からは、副葬状態や使用法は確定できない。本品は、分析によるとバリウムを含んだ鉛ガラスで、現在は半透明のさえた青緑色をしている。この垂飾の形状は、丸味のある不整三角形をしており、長さ18.6mm、最大幅12.4mm、最大厚3.7mmのもので、丸味のある方に穿孔されている。穿孔は両側穿孔で、外側で直径2.95mm、貫通部で1.15mmの大きさとなっている。

本製品の側面観は、板ガラス状を呈するが、わずかながら穿孔されている側が湾曲している。この湾曲に片寄りがあることと、外側にあたる面の弧を描く段、さらには同面に見られる格子状の溝が、このガラス製品の原形を暗示しているといえる。単に湾曲した点を特徴としてあげると、容器状の原形を想定するが、この湾曲が局部的であることや弧を描く段と格子状の溝は、ガラス壁以外の何物でもない。これを1号甕棺墓のガラス壁と比較すると、4号壁の裏面の内縁側が湾曲しているし、穀粒文間を研磨した溝の間隔も5mmと同一である。ただし、溝の間隔は他の壁もほとんど同じであるから、4号壁の破片であるというわけではない。ただ、この垂飾品をガラス壁の破片とした場合に、穿孔とは別の破片の端部に径3.7mmの半円状のくぼみがあることと、裏面の一辺に沿ってわずかな段が残っていることが気になる。ガラス壁であることを疑うのではなく、ガラス壁が破片となった経緯に関係ある傷、または破砕するための切

込みである可能性はないかということである。表面の穀粒文を平坦に研磨してつぶしている以上は、単なる破片の転用ではなく意図的である可能性があるが、これ以上は推測でしかない。

もう1つの問題点は、保存のよきにある。1号壙棺のガラス壁の全部が乳白色に変化し、半透明の青緑色が残るのは局部的であるのに対して、この垂飾にされた破片は、完全に原色が残っているといってよい。分析の結果は両者に大差がないが、垂飾は被破壊分析であることから微細な部分は不明といわざるを得ない。なお、出土時には全面に朱が付着していたので、水銀の数値も加わっている。



第 35 図 2号壙棺出土装身具実測図 (実大)

③ 勾玉

勾玉は、2号甕棺墓から合計13個出土している。このうち最大のものが硬玉製で、他の12個はガラス製である。

硬玉勾玉（巻頭図版4-5、図版33-1、第35図2） 勾玉は全長45.2mmの大型のもので、丁字頭の型式をとる。勾玉の各寸法は、頭部径17.4mm、胴径14.7mm、尾径11.0mm、頭部厚15.05mm、尾厚10.55mm、孔径4.8～5.3mmの大きさとなっている。孔は両側穿孔で、孔に向って3本、孔に向かない1本、合計4本の細い溝を刻んで丁字頭としている。硬玉としては割合質のよい淡緑色を呈するが、白味のある部分もあり最上質とはいえない。頭部に多少平坦な部分もある。

ガラス勾玉（巻頭図版3-2、図版33-3、第35図3～14、表3） ガラス製勾玉は、出土12個のうち半数の6個が完形品といってよいが、このうち最大のものが4と5で全長21.15mmある。また、3のように丁字頭型式のものもあり、3本の溝を刻んでいる。最小のものが11と12で全長15.95mmとなり、全体にガラス製勾玉は小型品である。形態的に見ると、4～6の頭部が大きく、尾に向って細まる型式で最も形がよいといえるが、この3個は計測値から見ても鑄造後の研磨による差を考えると同范といえる。このような視点から観察すれば、7～9や11・12も同形態をしており、同范もしくは同じ鑄型の複数鑄造と思われる。これらの勾玉を側面から観察すると、4～6と他の勾玉に違いがあることが明瞭であろう。すなわち、4～6は頭部から尾に向って均一に細くなるのに対して、他の勾玉は厚さが一定せず、10～13のごとき

表3 2号甕棺ガラス勾玉一覧表

(単位mm)

No.	全長	頭径	胴径	尾径	頭厚	尾厚	孔径	備考
3	19.2	7.9	7.0	5.0	5.4	5.2	1.6	丁字頭。胴厚5.6。朱が一部付着
4	21.15	8.25	6.9	4.35	6.8	4.75	1.4～1.85	朱付着
5	21.15	8.1	7.35	4.9	6.8	4.65	1.9～2.2	多量の朱が付着
6	20.5+	7.8	6.55+	—	6.6	—	2.2～2.5	わずかに朱付着、保存不良
7	18.1	7.1	6.6	4.75	5.8	4.55	1.8～2.0	朱付着
8	18.3+	6.9	6.2	5.6	6.15	4.6	1.7	一部に朱付着、保存不良
9	17.2+	7.15	6.7	—	5.75	—	1.7	孔内に朱付着
10	9.55+	—	6.7	—	—	—	—	朱付着。胴厚5.5
11	15.2+	7.3	6.0	4.35	3.9	3.75	2.4～2.9	胴厚4.5
12	15.95	6.95	6.0	4.55	3.8	2.95	2.05～2.3	胴厚4.55
13	14.25+	7.5	7.3	—	5.2	—	2.1	胴厚5.5、朱付着
14	12.1+	6.3	6.2	—	4.6	—	1.8	朱付着

注 Noは第35図の遺物番号と同じ。

は胴部が最も厚くなっている。これは鑄型の型式の違いにあると思われる、4～6は2枚1具の鑄型であるのに対して、他の勾玉の大半は片面のみの鑄型で、表面張力を利用した鑄造ではなからうか。

穿孔は、鑄造時に何らかの棒をセットされるものと思われるが、孔の両側でわずかながら大きさに差があることと、同箱とも思われる7～9には孔の位置にわずかなずれがある。また、11・12などは、面に対し直角の穿孔ではない。

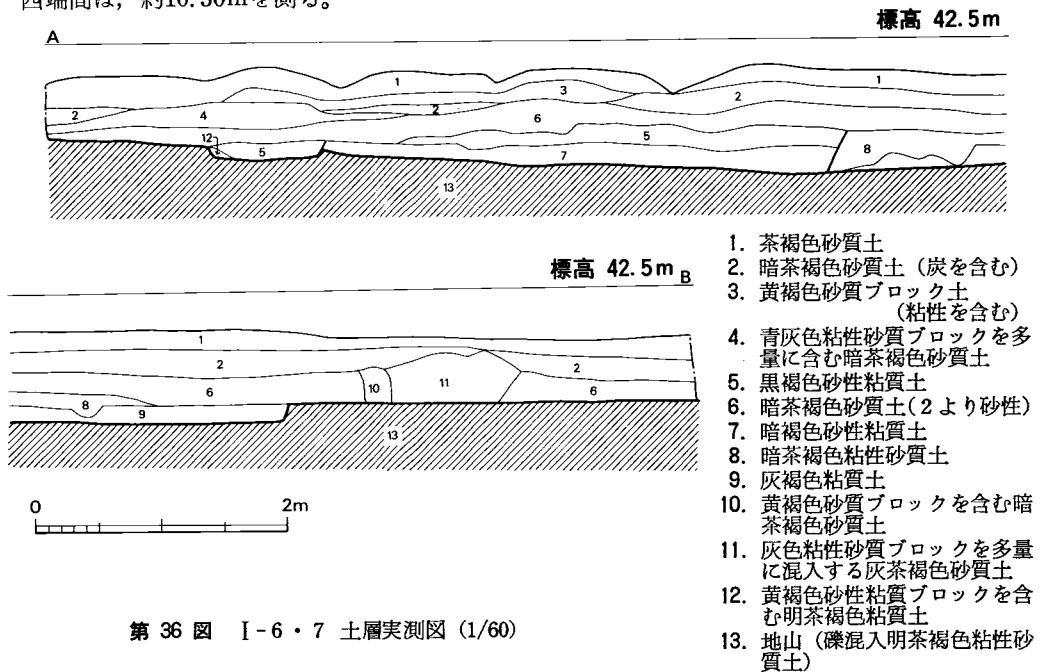
ガラス製勾玉は、現在全部乳白色化しているが9を分析した結果、バリウムを含む鉛ガラスであった。
(柳田)

4 周辺遺構と遺物

(1) 祭祀溝 (図版34, 第5・36図)

I-6・7で検出したが、第36図に示す7層が当初のもので、7層上位の5層は小溝とした遺構がここまで広がっていたものと考えた方がいいようである。1層は耕作土、2～4層は遺物包含層である。

このように考えると、中央部での現存祭祀溝上面幅2.36m・下面幅2.00m・主軸N14°Wを測る。溝床はほぼ平坦で、若干東側が低い南・北間では差がない。溝東端から1号甕棺墓墓塋西端間は、約10.30mを測る。



第 36 図 I-6・7 土層実測図 (1/60)

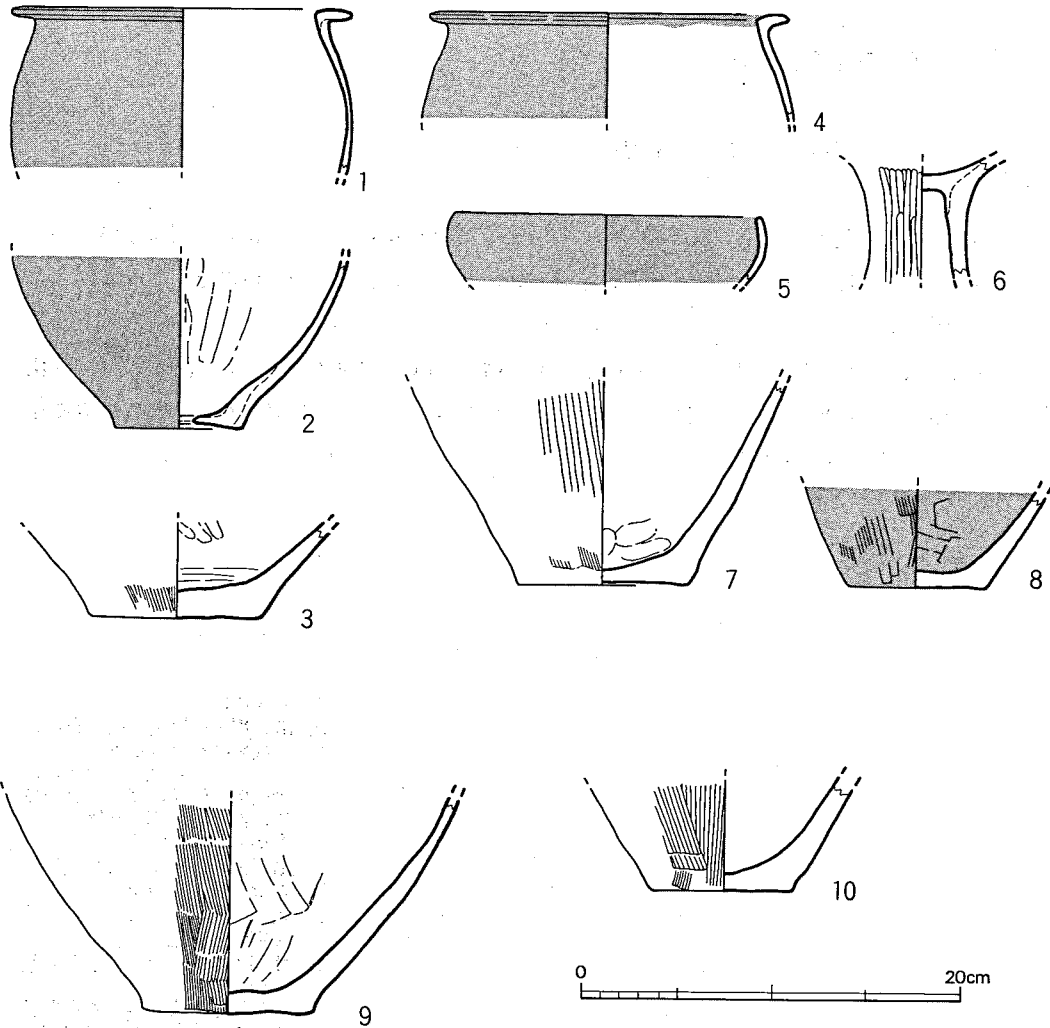
南小路 I-6・7

なお、溝底の標高は、北側で41m、中間で50~41m、南端で40m、I-6出土土壙底も、同41.49m~41.29mを測り、ほぼ等しいことから、一連の溝であったことも考えられる。

土器 (図版35, 第37~40図)

第37・38図に示したものは7層出土のもので、11は潰れた状態で出土した。第39・40図に示したものは5層出土のもので、出土土層の区別はできなかったが、明らかに新・旧の差が認められる。

7層出土土器 (1~11) 1・4は丹塗摩研の壺で、胴部最大径は上位にあり、口縁部上面



第 37 図 祭祀溝下層出土土器実測図① (1/4)

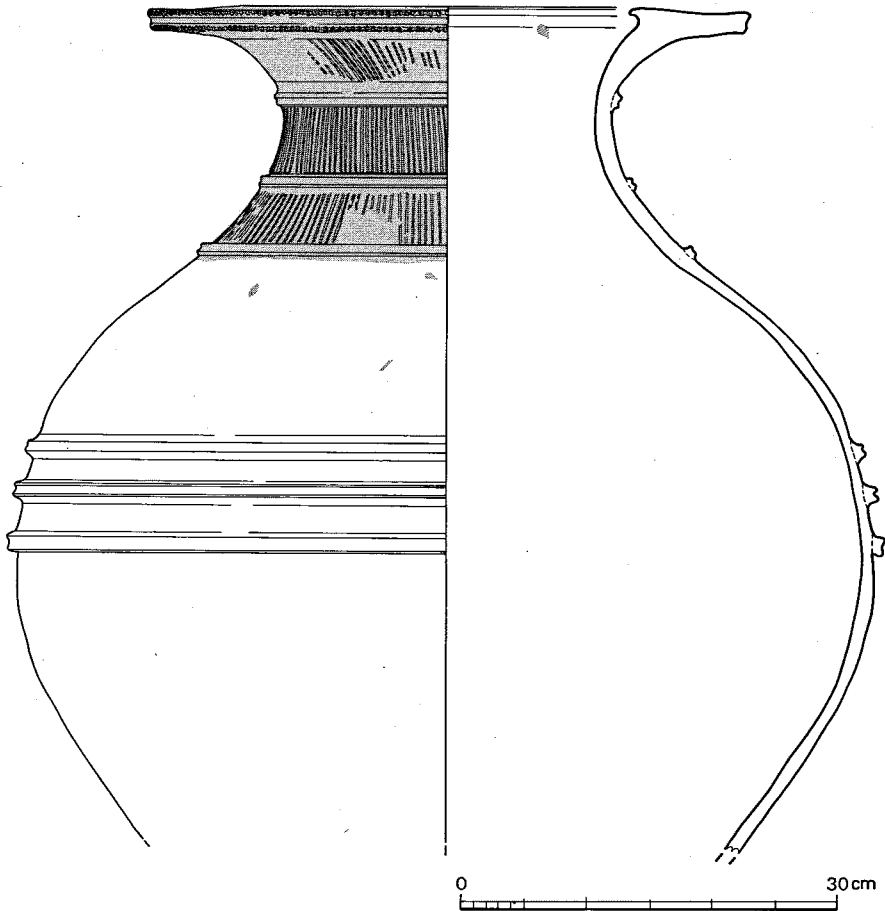
は水平で、下面の胴部との屈折もシャープである。1の口径は18.0cmを測る。2も丹塗摩研の同種の壺で、底部を焼成後に穿孔する。3は大きく外湾しつつ開口する中型の広口壺底部である。

5は器内外共にヨコナデを丁寧に施し、丹塗りであるが研磨を施さないが、脚付椀である。

7～10はいずれも甕の底部で、8は器内外共に丹を施し、器外は研磨するやや厚手の底部片である。

11は溝南側で、床面近くで潰れた状態で出土した大型の壺で、器外胴下位に丹塗りをしないが、暗文・刻み目を丁寧に施す。胴下位は出土していない。口径48.0cm、胴部最大径 69.8cmを測り、器高は83cm前後であろう。

5層出土土器 (12～30) 12～14は口縁部の形状は同じで、いずれも胴部最大径が中位ある

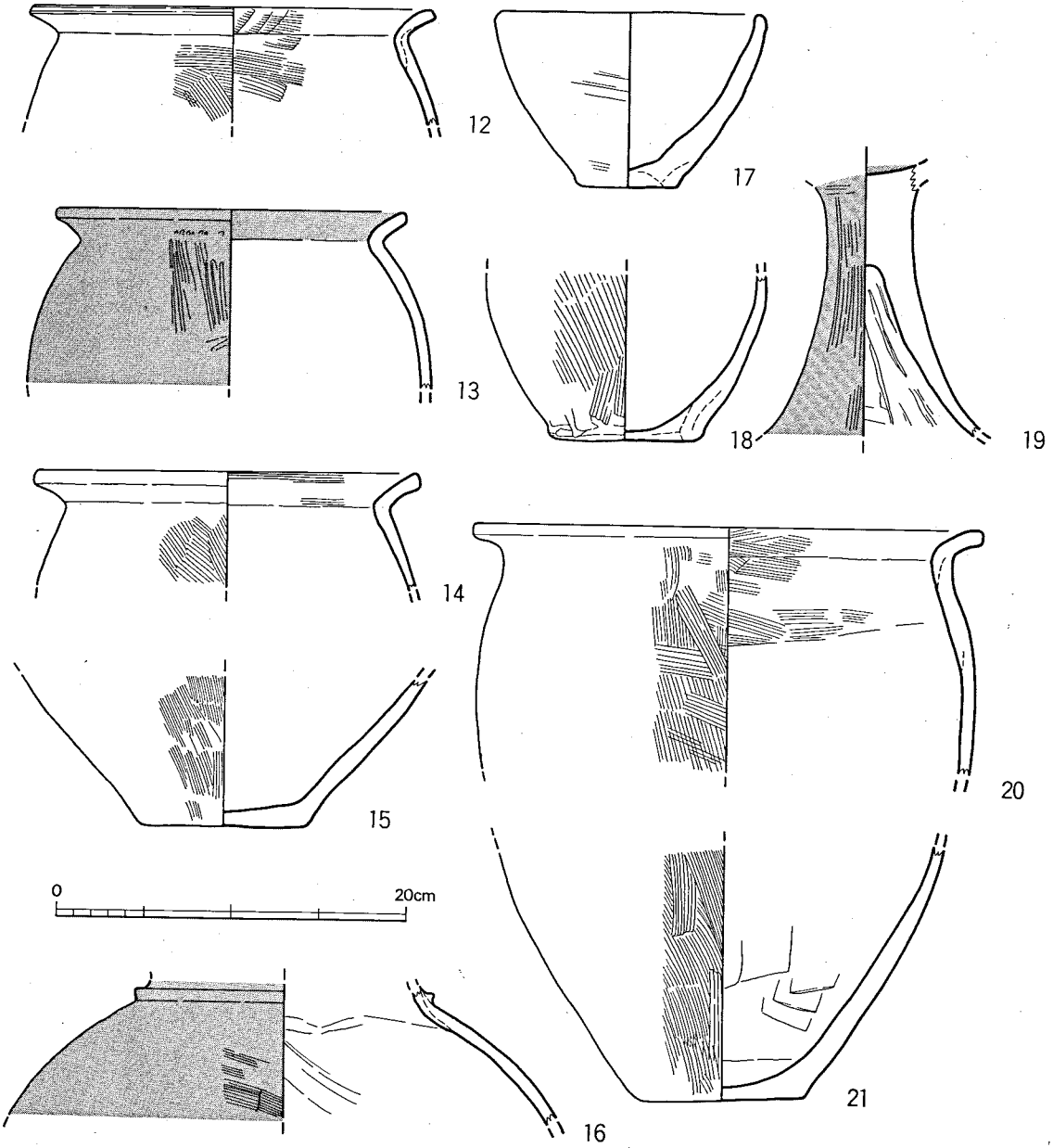


第 38 図 祭祀溝下層出土土器実測図◎ (1/6)

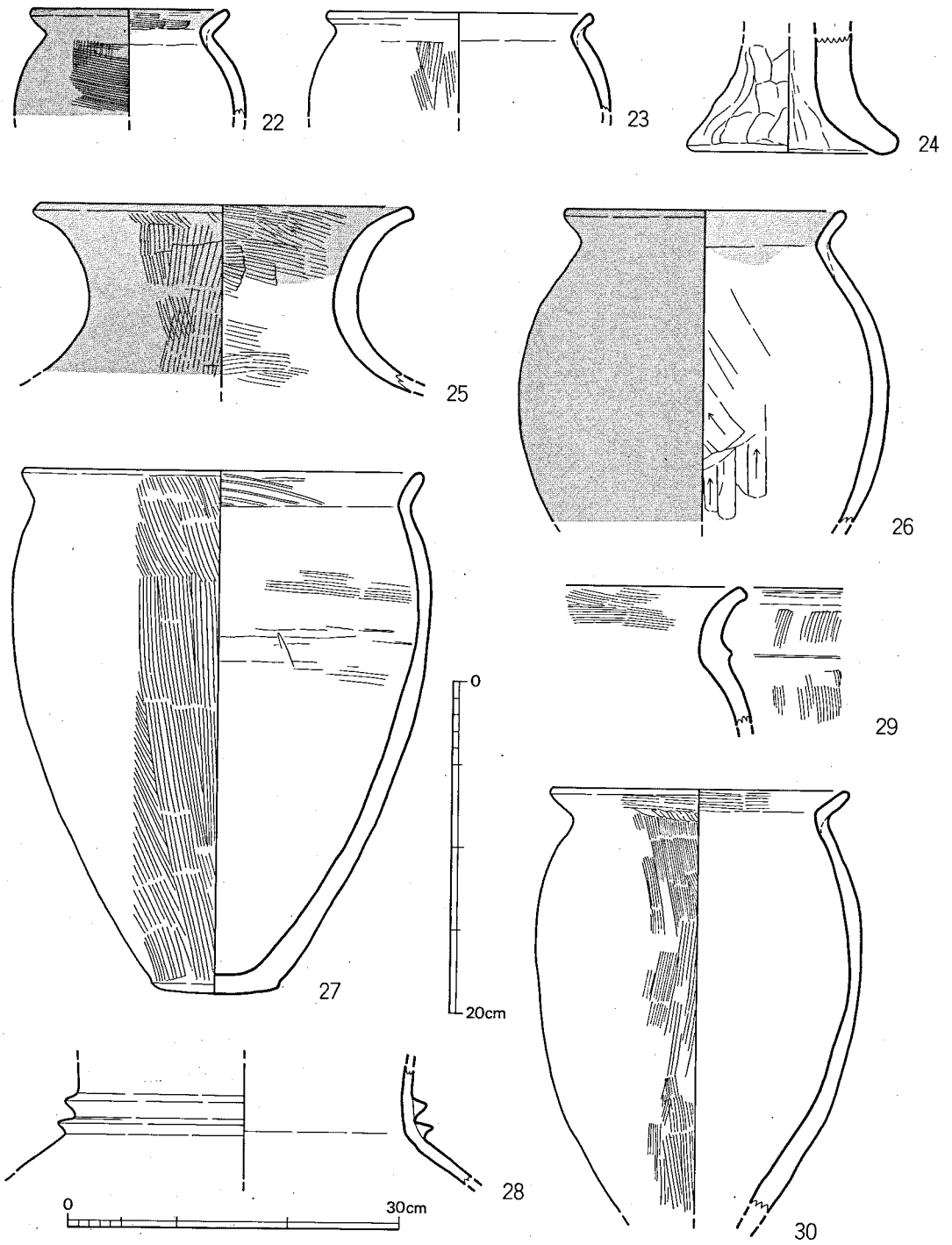
南小路 I-6・7

いは若干下位にくるが、12・14はハケ目のままで、13は器外胴上位は縦方向・下位は横方向の研摩を施し、丹塗りという技法の差位から、12・14は甕であるが、13は壺とすべきか。

15は中型の壺で、器内は丁寧にナデ、器外のハケ目は細く密に施し、器壁も薄手であること



第 39 図 祭祀溝出土土器実測図③ (1/4)



第 40 図 祭祀溝出土土器実測図④ (1/4・1/6)

南小路 I-6・7

から、甕ではないと思われる。16は、器内を丁寧にヘラナデし、器外に丹塗り痕を認める。頸肩部の凸帯はシャープで低く、当初から1条のみであったと考えられる。

20・21は別個体の甕であるが、20の口縁部の屈折はゆるいが、口唇部は平坦で凹みを呈さない。21の底部と胴部の屈折はシャープな稜をなさないが、平坦な底部である。

19は丹塗摩研の高杯脚部片で、器内は遺存部下位に至るまでシボリ痕を残したままで、杯底部～脚上位は厚手に仕上げている。

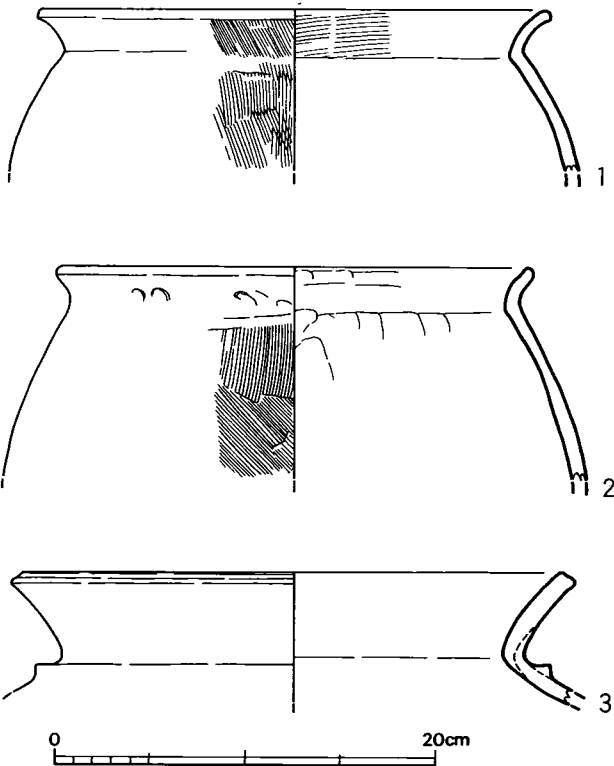
22・23・26は、いずれも口縁部の立ち上がりが12~14に比べて大きく、くの字状に胴部から屈折する。22の胴部外面はハケ目のままで丹塗りを施し、26の器外は縦方向研磨で丹塗り・器内は丁寧にヘラナデを施すなど、中期の丹塗研摩壺の特徴の残影も認める甕である。25は厚手の広口壺で荒いハケ目に丹塗りを施し、肩部から口縁部に至るまで緩やかなカーブを呈す。28は大形の開口壺で、凸帯にシャープさが無いが、断面形は三角形をなす。

27・30は共に同様の仕上げ・器形で、最大径は胴部中位にあるが、若干大きい程度である。

27の胴部と底部の屈折は若干丸味を呈するが、一応平底と言えるであろう。29は中型の甕の破片で緩慢に屈折する頸部に、低い断面三角状の凸帯を付し、口縁端部が若干肥厚し、口唇部は若干凹む。

以上の土器のなかで、7層出土の1~11の土器はいずれも中期後半の特徴を示す。また、5層出土の土器のなかで、12~21の土器は後期前半の、22~28の土器は後期中頃の特徴を示す。このことから、祭祀溝は中期後半に設けられ、7層出土の土器群は祭祀土器の好資料と言えよう。

5層出土の土器群は、明らかに2期に区別され、12~21の土器が引き続きこの祭祀溝に遺棄された祭祀に使用されたもので、22~30の土器はむしろ、この祭祀溝に継続して設けられた、小溝に伴う祭祀使用土器であると考えられる。また、これらの祭



第41図 I-6・7, 2・6層出土土器実測図(1/4)

祀使用土器は、その出土溝の位置から、いずれも東側で出土した1号・2号甕棺墓に伴うものと言える。

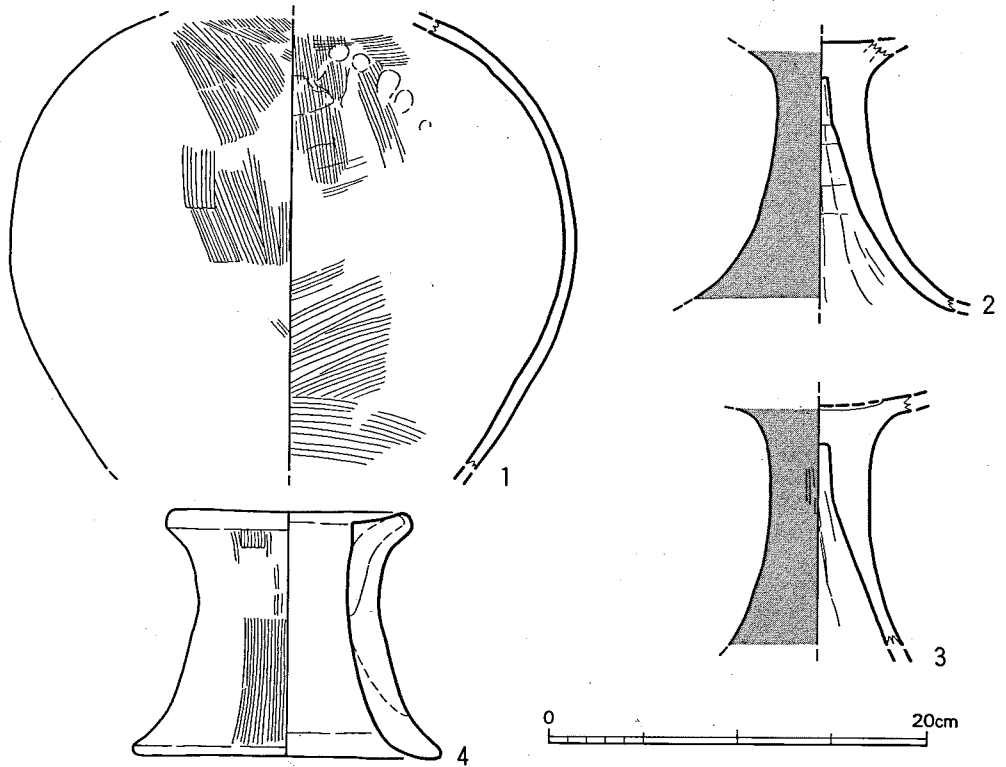
なお、第41図に示した甕で、1・2は2層、3は6層から出土したものである。

(2) 大 溝 (図版34, 第5・36図)

祭祀溝の東壁を切り、調査区外の北へのびる。埋土は第36図に示す8・9層で、土層壁面での大溝上面幅3.56m・床面幅2.62mを測る。東壁は6層による削平が著しいが、西壁は緩傾斜をなす。床面はほぼ平坦で、南・北側間にもレベル差がなく、水路的なものではない。むしろ祭祀溝に平行することから、これに後続する同様な性格の溝状遺構と考える方がよいかも知れない。

土 器 (図版35, 第42図1~4)

1は壺の胴部片で、口縁部と底部を欠失してその全様は不明であるが、底部は平底であろう。器外下位はナデ、上位と器内はハケ目のままで、肩部に指押え痕を認める。胴部最大径は29.8



第 42 図 大溝出土土器実測図 (1/4)

南小路 I-6・7

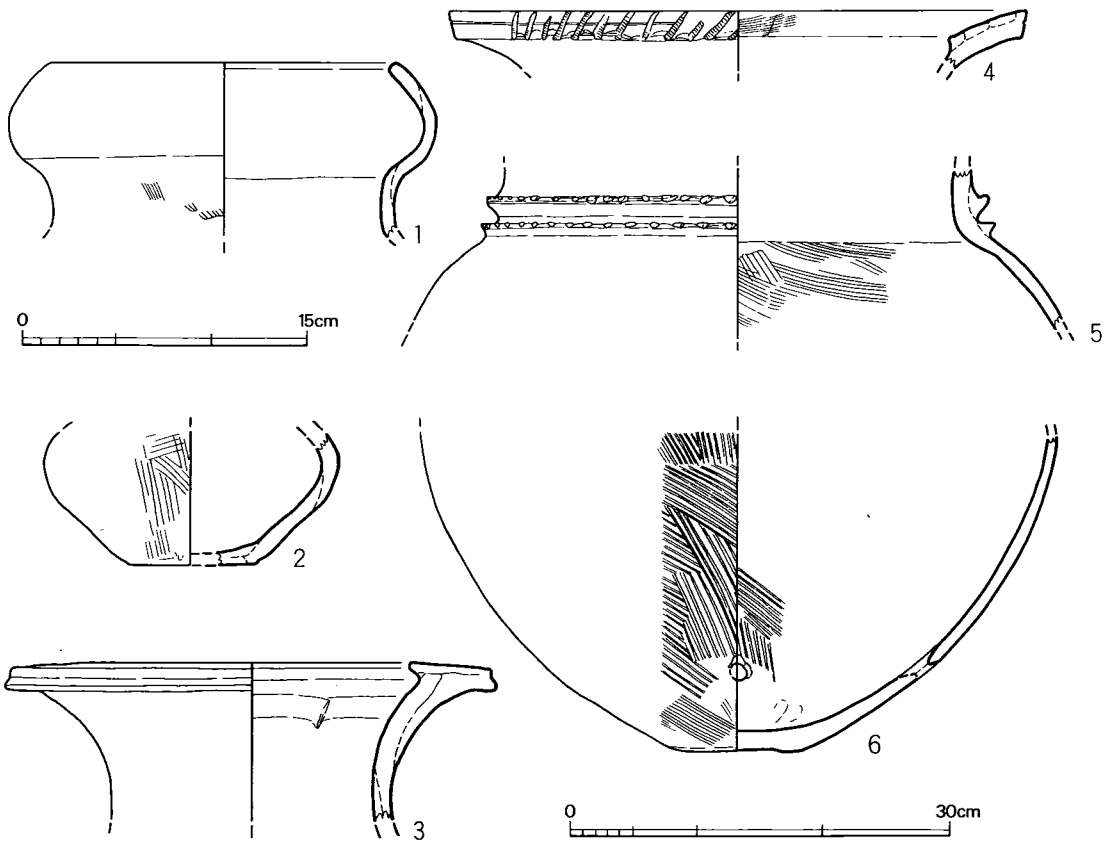
cm前後である。2・3は高杯脚部片で、共に丹塗研磨を施すが、3は摩滅が著しく丹は不明瞭である。

4は断面が厚手で短脚の器台で、器外はハケ・器内はシボリ後ナデを丁寧に施す。口径13.0cm、脚裾径16.3cm、器高13.1cmを測る。

以上の土器は、高杯は中期末～後期初頭、器台は後期初頭、壺はこれよりも後出することも考えられる。このことから、大溝の時期は一応後期前半と考えられる。

(3) 小 溝 (図版34, 第5・36図)

祭祀溝の西壁を切り、調査区外の北へのびる。埋土は第36図に示す5層で、祭祀溝埋土7層上層との区別はできなかった。このことは出土遺物からも言え、祭祀溝上層出土のものと時期的に一致するものも含まれている。



第 43 図 小溝出土土器実測図 (1/4・1/6)

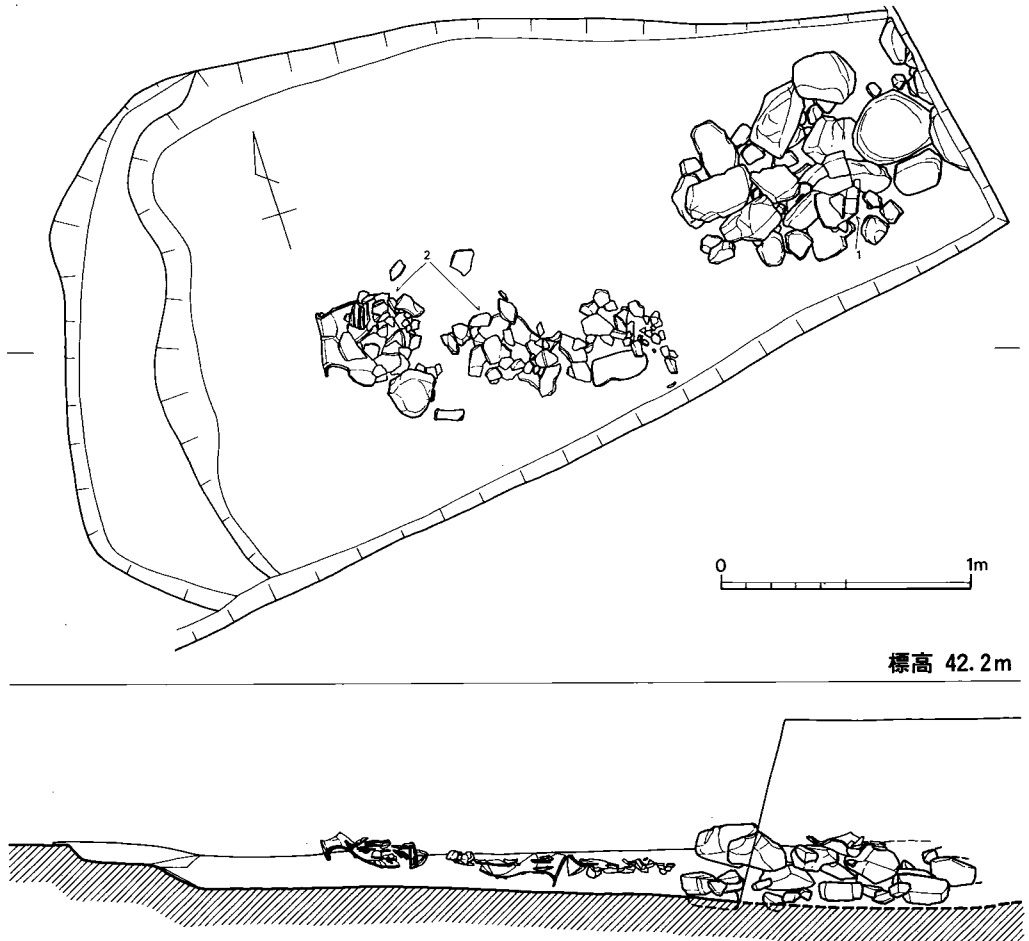
むしろ、祭祀溝 5 層は、祭祀溝に後続して掘られた、ここに報告する小溝の一部で、祭祀に関する溝状遺構と考えられる。

土器 (第43図)

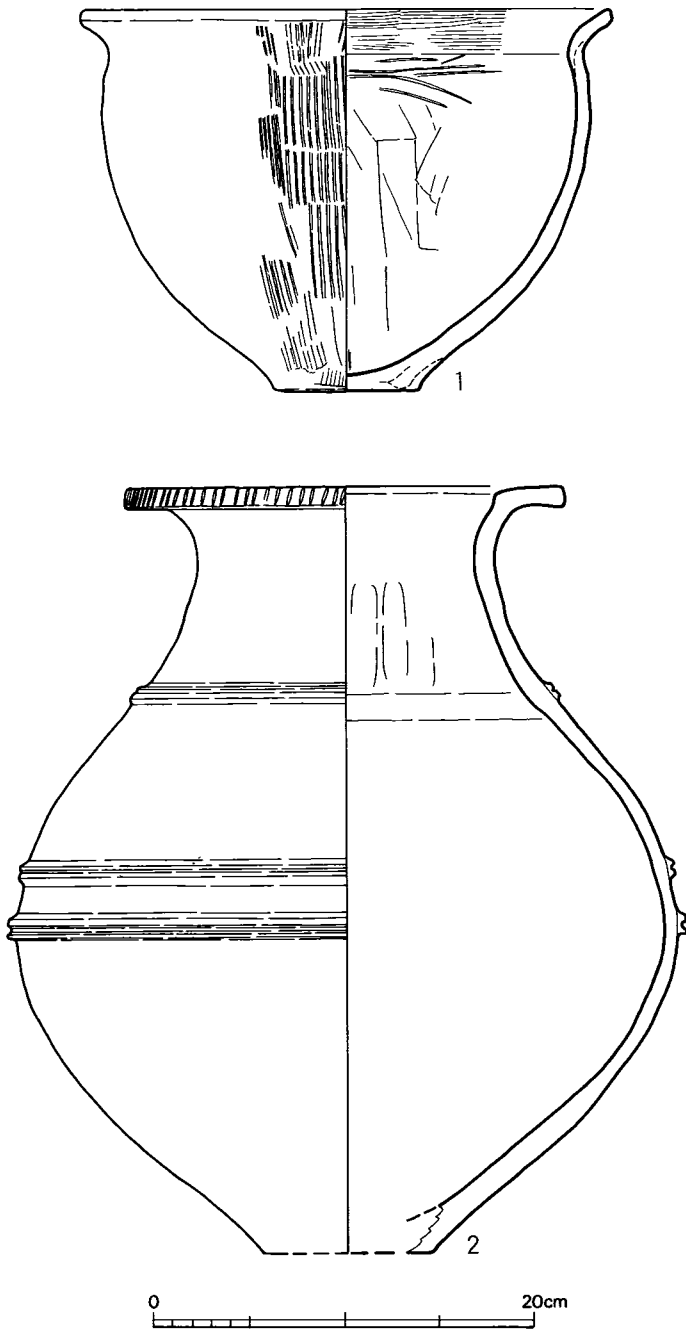
図示し得るものは、いずれも壺である。

1 は口頸部片で、器内外共にナデるが一部にハケ目を残す。袋状部は緩慢に内湾し、後期中頃の特徴を示す。2 は小形で、胴部は扁平で平底をなす。

3 は口頸部片で器内外共にヨコナデ・ナデを施し、器内頸部上位はヘラナデ痕を認める。口縁部は、内端部が内側にシャープに突出し、上面は平坦で、外端面は凹むなど、中期後半でも古い特徴を残す。



第 44 図 I-6 土坑実測図 (1/30)



第 45 図 土壙出土土器実測図 (1/4)

4～6は別個体の大形壺破片である。4の口縁部上面はハケ目のままで、外端面は板小口による押圧の刻み目を施す。5の頸肩部は、器内肩部は荒いハケ目を認めるが、他は器内外共に摩滅して不明である。屈折部の凸帯端部はシャープさがなく、断面は上位の方は厚手で跳ね上がり、下位は突出気味である。6の胴部下位片は内外共に荒いハケ目仕上げのままで、底部はナデを施し、径は小さい。焼成後の穿孔を胴下に認める。4～6は共に後期前半でも古い特徴を残す。

以上の出土土器から、小溝の時期は一応後期初頭と考えられる。

(4) 土壙(図版36, 第44図)

I-6の調査区の西側の南端部で出土した。調査区外の南側に続くためその全様は不明であるが、二段に掘られた西側の両コーナー部が検出されているので、溝状を呈するものであろう。削平が著しいが、西側での現存上面から段状床面

までの深さは18cm・同様に壙底までの深さは36cmを測る。また、北側壁と西側壁はほぼ直交することから、壙主軸を一応S67°Eと測ることができる。

壙内からは、第45図2の壺が体部を縦方向に半截した状態で、口縁部の方向を東・西逆位にして、壙底から西側部分で7cm・東側部分で2cm上位で出土した。また、東半部では28×35cm～20×25cm大の石をはじめ多くの集石が壙底に密着して、壙底から30cmの高さにかけて出土し、第45図1の鉢が同様に割られた状態で集石直上から出土した。

土器（図版37-1，第45図）

1は鉢で、器内は丁寧にヘラナデを施し、口縁部上面はヨコハケのまま、器外は口縁部にヨコナデを雑に施すが、大半のハケ目は消えていない。

2は、鋤先口縁の壺で、丹塗りを施さないが器内外共に丁寧にヨコナデ・ナデを行い、口縁外端面の刻み目も丁寧である。口径23.3cm・胴部最大径34.9cm・器高40.6cmを測る中型で、精製胎土に砂粒を若干含む。

1の鉢は祭祀溝出土の第40図30の甕口頸部の特徴に類似するが、底部の屈折はシャープで平底を呈す。2の壺は、肩部の口唇状凸帯は1条で、頸部には認められず、口縁部内端と頸部との段はわずかに認められるだけで、上面は平坦で若干内傾する。また、器外への丹塗り・摩研・頸部への暗文は施されていない。

以上の特徴に加えて、その出土状態から、土壙の時期も後期前半と考えられる。なお、土壙の性格は、遺物の出土状態から、北側で出土した1・2号甕棺墓に伴う、祭祀溝・小溝と共に祭祀遺構と考えられる。（馬田）

(5) その他の遺物

縄文土器（図版37-2，第46図，第47図6）

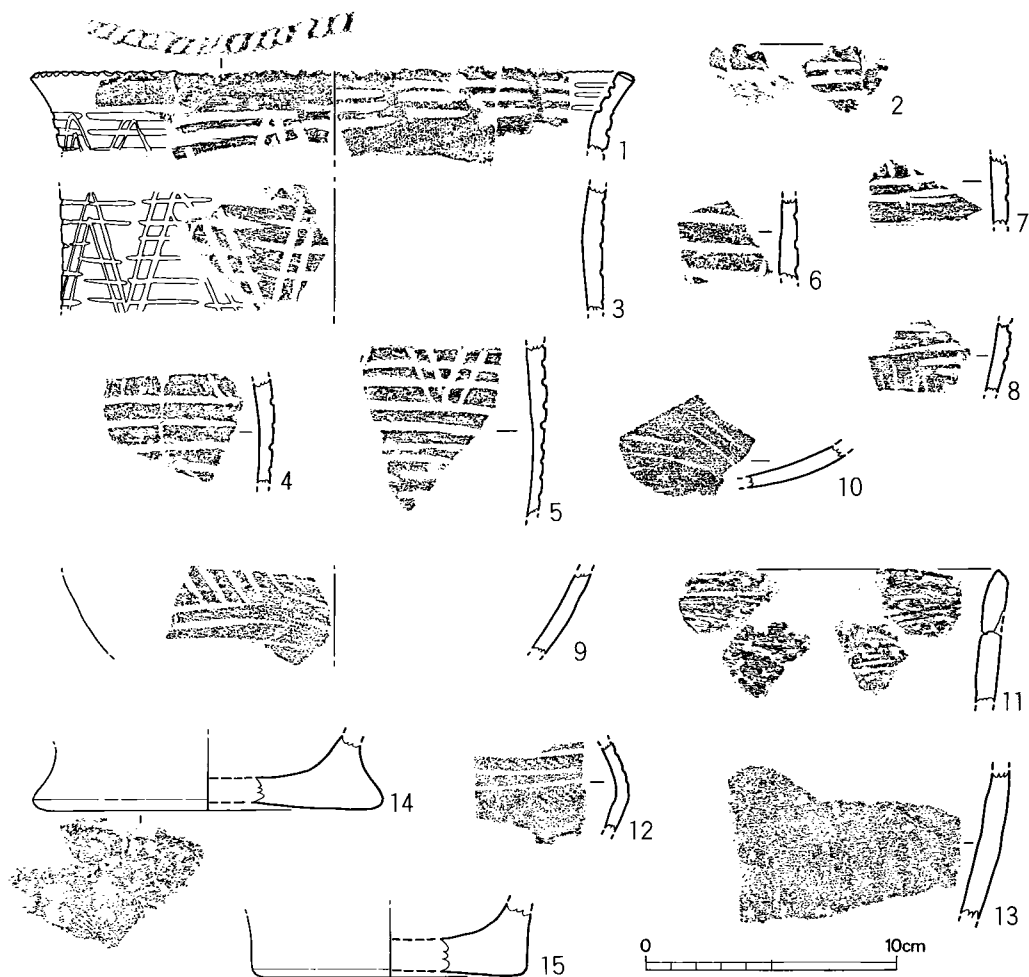
甕棺墓壙内やその周辺から出土したもので、遺構としてのまとまりはない。

1～10は胎土に滑石粉末を多く含む曽畑式土器。同一個体の破片であろう。破片には全て幾何学的な文様が描かれており、胴下半の一部を除いてほぼ口縁部から底部まで揃う。1・2は短く外反する口縁部で、口唇部に斜行するキザミが入れられ、5cm前後の長さに断続する平行沈線と斜行する沈線が外面に、2.5cm前後の長さに断続する3条単位の平行沈線が内面に描かれるが下半はナデ地のままである。3は1の下半と一部重複するが、外面の文様では平行沈線のあと交互に斜行する平行沈線文で山形の文様を描いている。4～7は3の下に重複する部分の胴部破片で、6の破片の一部には小さな刺突痕がみられる。5の破片の下端までで口縁から13条めの断続沈線があることになる。この下の部分は破片がなくはっきりしないが、8・9の破片からみて13条以上の沈線に縦方向の細い沈線が加わる。9の破片は底部に近い部分の破

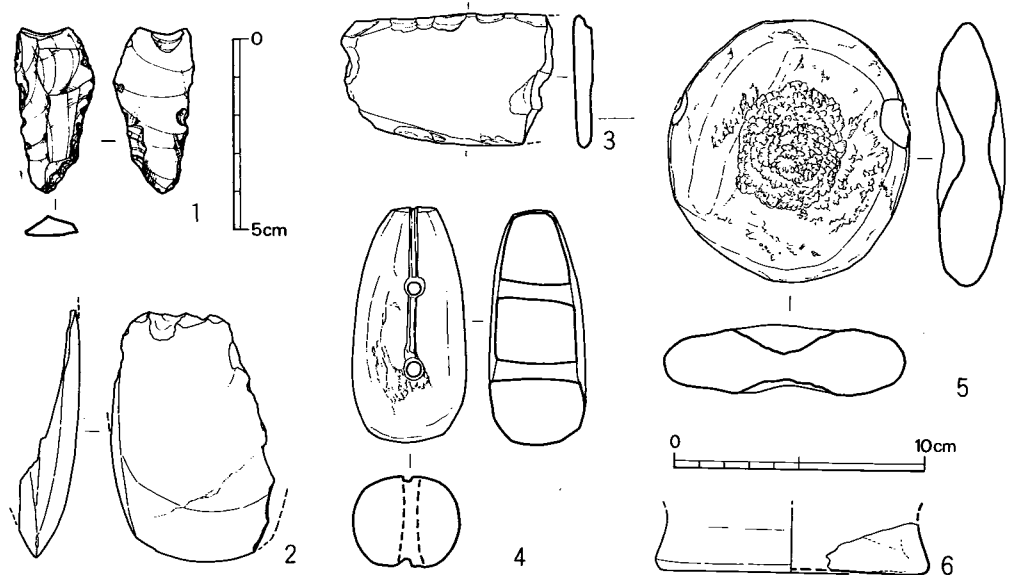
南小路 I-6・7

片で、右下りのやや乱れた平行沈線がみられ、下半は細く長めの平行沈線であるいは「くもの巣状文」の一部かも知れないが、10の底部破片では乱れた状態になっている。なお3以下の内面は全てヨコナデないしはナデ調整されており、9の内面には炭化物の付着した痕跡がある。これらの破片から口径24cm、器高18cm以上の、体部が少し脹らむ丸底を呈す器形が想定しうる。この曽畑式土器は良好な焼成で淡赤褐色～暗褐色を呈すが、上半部の文様やキザミ目からみて3～4mm幅の棒状原体によるものとみられる。また文様構成としてはやや単調ではあるが典型的な曽畑式土器に近い。

11は内外面共にアナダラ条痕の施される粗製条痕土器の口縁部破片で、胎土に金雲母と気泡が目だつ。12は摩消縄文を有す精製土器胴部破片、13は11に近い胎土だが内外面共にナデられ



第 46 図 I-6・7 出土縄文土器実測図 (1/3)



第 47 図 I-6・7 出土石器類実測図 (1/2・1/3)

る。14・15・第47図6は底部破片で、ナデ調整されるが、14の底面にはアナダラ属貝類の殻頂部圧痕がみられる。これらの土器は後晩期に属するが、11・12・14は後期後半の西平式期頃であろう。

石 器 (図版38-1, 第47図)

1は黒曜石剣長剣片を利用した削器, 2は白っぽい色調を呈する蛇紋岩製の磨製石斧刃部破片, 3は頁岩製の石庖丁未製品と思われる破片で風化が進んでいる。

4は底面の丸い砲弾形を呈する石錘。長さ9.4cm・幅4.5cm・最大厚3.9cmの丁寧に磨かれた体部を3分割する位置に両面から円孔を穿ち, 下方の孔から上方の孔を通して頭部で一周する溝を刻んでいる。細粒で硬質な白雲母片岩製で重量は263gを測る。

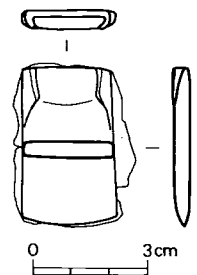
5は濃緑色の斑点の多い雲母片岩の敲石で, 両面の中央は敲打痕で凹む。その他の面はよくすり減っており, 390gの重量をもつ。

これらの石器の出土地点は, 1・4が祭祀溝上層, 2・3・5は攪乱部分から出土しており, 祭祀溝の上層では弥生後期後半の土器片も混っていたので, 石錘はこの時期に考えることも可能である。1・2は縄文後晩期の所産であろう。

なおI-7大溝から完形の石製紡錘車が1点出土したが, 紛失した。

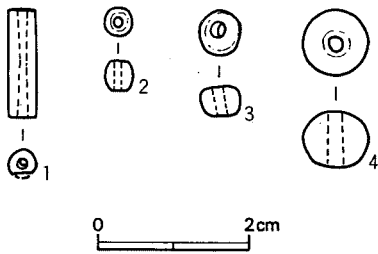
鉄 器 (第48図)

祭祀溝上部から出土した小形の鉄斧で, 長さ4.2cm, 幅2.5cm, 厚さ



第 48 図 I-7 出土鉄器実測図 (1/2)

南小路 I-6・7



第 49 図 I-6・7 出土玉類実測図 (実大)

4.5mmの大きさを持ち、上端部の両側を僅かに折り曲げた袋部が設けられている。

玉 類 (図版37-3, 第49図, 表4)

1の管玉以外は直接遺構に伴わないが、ガラス小玉・丸玉も出土している。1の管玉は灰色を呈す凝灰岩(グリーンタフ)を用いた細身の管玉で孔は両端から穿たれる。弥生時代後期と思われる。2~4は時期を限定しえないが古墳時代以降であろう。

(小池)

表 4 南小路 I-6・7 出土玉類一覧表

(単位 mm)

No.	出 土 地 点	外 径	孔 径	長 さ	分 類	材 質	色 調
1	I-7 大 溝	3.7 3.8	1.3 1.4	14.3	管 玉	灰色凝灰岩質	
2	I-7 第 6 層	3.85	0.8	4.0	小 玉 A	ガ ラ ス	コバルトブルー
3	I-6 第 2 層	5.5 5.9	1.55	4.2	小 玉 C	ガ ラ ス	スカイブルー
4	I-6 第 2 層	8.65	1.95 2.1	7.05	丸 玉	ガ ラ ス	コバルトブルー

5 小 結

南小路 I-6・7 地区の調査は、まさに三雲遺跡の重要性を再確認するための調査であったが、期せずして2号甕棺墓を発見することができた。残念なことは、文政5年発見の甕棺自体が小片しか残っていなかったことであるが、小片ながら時期の確定は容易である。甕棺は、1・2号甕棺共に逆L字形口縁といわれている型式で、北部九州の中期後半とされているものである。1号と2号を比較すると、1号甕棺口縁部は一廻り小型で、補強程度も貧弱であるが、水銀朱の塗布や口縁下の破片と底部破片とも胎土など一致する点が多いところからこれらは同一個体であり、多量の副葬品を持った1号甕棺であることに間違いない。

1・2号甕棺と周辺遺構との関係は、最も密接な関係にあると思われるのが、1号甕棺墓竈西端から10.5m西側で南北にのびる祭祀溝である。祭祀溝下層には、中期後半から後期初頭の丹塗摩研土器と若干の丹塗のない土器片が出土しており、時期的にも1・2号甕棺墓と一致する。祭祀溝の上層には、後期前半から後期中頃の丹塗土器を含む土器片があり、祭祀の継続が考えられる。とくに下層の大型壺(第38図)は、倒立した状態で埋没していたことが明らかで、祭祀であることも裏付けている。この大型壺の時期は、中期末から後期初頭のものである。

調査区の南端から出土した土壙状遺構は、供献状態にある土器が後期前半のもので、南小路

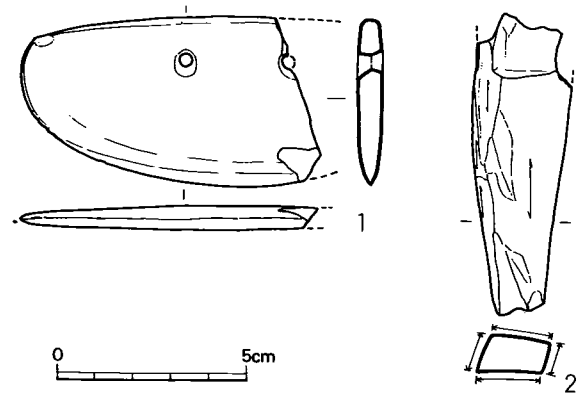
「王墓」の継続した祭祀あるいは「王墓」が継続して営まれている可能性を示唆しているといえる。
(柳田)

第2節 南小路 I-8 の調査

1 遺構 (図版38-2, 第51図)

南小路 I-8 地区には南北に3×10m, 東西3×9mのトレンチ2本を設定した。南北を a, 東西を b トレンチとする。

I-8 a トレンチでは, 方形竪穴住居1軒と15個のピットを検出した。住居跡は, その一部を確認したのみで, 全容は不明である。残存壁高も5cm前後と非常に悪く, かなりの削平をうけているものと思われる。北側壁に接して焼



第50図 I-8 a 出土石器実測図 (1/2)

土の分布がみられる浅い凹みがあり, 屋内炉跡とも考えられよう。上面から, 弥生中期の丹塗り甕口縁部破片などが出土しているが, 時期を決定づける資料はない。

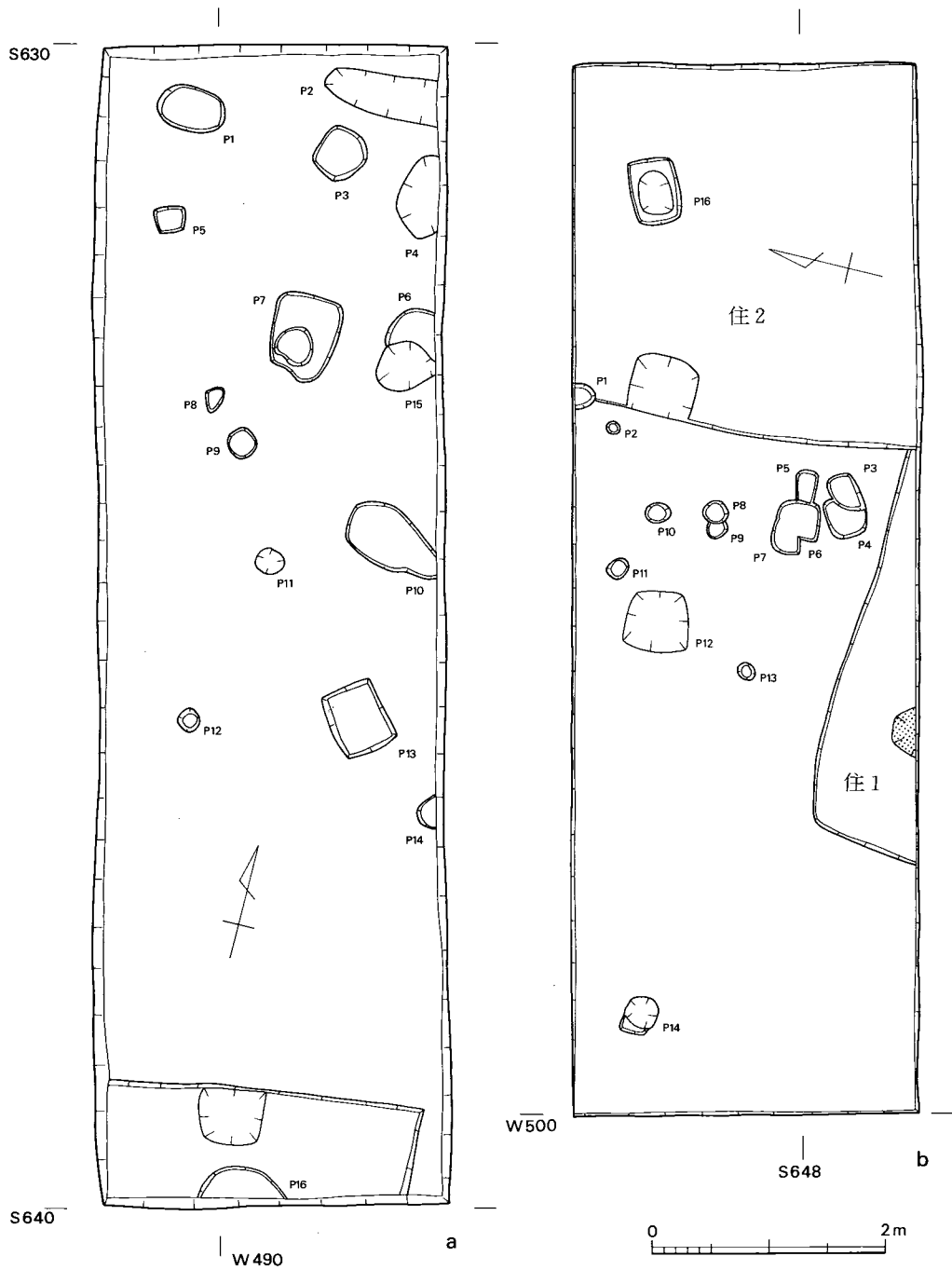
ピット群も非常に浅く, 又トレンチ調査のために柱穴となるようなものは確認できなかった。その他に, 出土遺物として石庖丁, 砥石などの石製品がある。

I-8 b トレンチでは, 方形竪穴住居2軒と14個のピットを検出した。I-8 a トレンチ同様, 遺構の残存状態は非常に悪い。2軒の竪穴住居跡は, トレンチ南端で僅かに切り合っており, 2号住居跡が後出する。いずれも一部を確認したのみである。

1号住居跡は, 西側寄りに若干焼土を含む浅い凹みがあるが, これは屋内炉跡と考えられよう。2号住居跡は, 一辺のコーナーを確認していない為に果して住居跡なのか疑問も残る。内部に検出された2個のピットは完掘していない。

1・2号共に出土遺物には, 弥生中期の丹塗り土器に混じって, 古墳時代初頭の甕形土器の破片などがある。

以上, I-8 地区に設定した2本のトレンチ調査から, すぐ東側の I-5・6・7 地区で検出された南小路1・2号甕棺墓や祭祀溝などの弥生時代遺構は, 西側には広がっていない事が確認された。
(立石)



第 51 図 I-8a・b トレンチ実測図 (1/60)

2 遺物

石器 (図版38-3, 第50図)

1は第3層から出土した暗灰色を呈す硬質細粒砂岩製の石庖丁。現存長7.9cm, 最大幅4.5cm, 厚さ6.5mm・重量の現存値32.9gの大きさで, 背も緩やかな弧を描く。2は第2層出土の粘板岩製砥石。現存長8.0cm, 最大幅2.7cm, 最大厚1.3cmを有すが, 折損面以下の各面とも砥面にされている。重量の現存値は28.2gを測る。 (小池)

第3節 南小路 I-9 の調査

1 はじめに

I-9は苗木育成に利用されていた部分で, 南端部に東西12m, 南北4mの小範囲なトレンチを設定した。南西部は攪乱が激しく溝状に落ち込んでいたが, 東側ではそれほどひどくはなく, トレンチの東半分に住居跡が重複して検出された。西半分は柱穴様ピットが散在し, P1~P10が東西方向に並んでいるものの掘立柱建物等を想定しうる例はない。

2 遺構と遺物

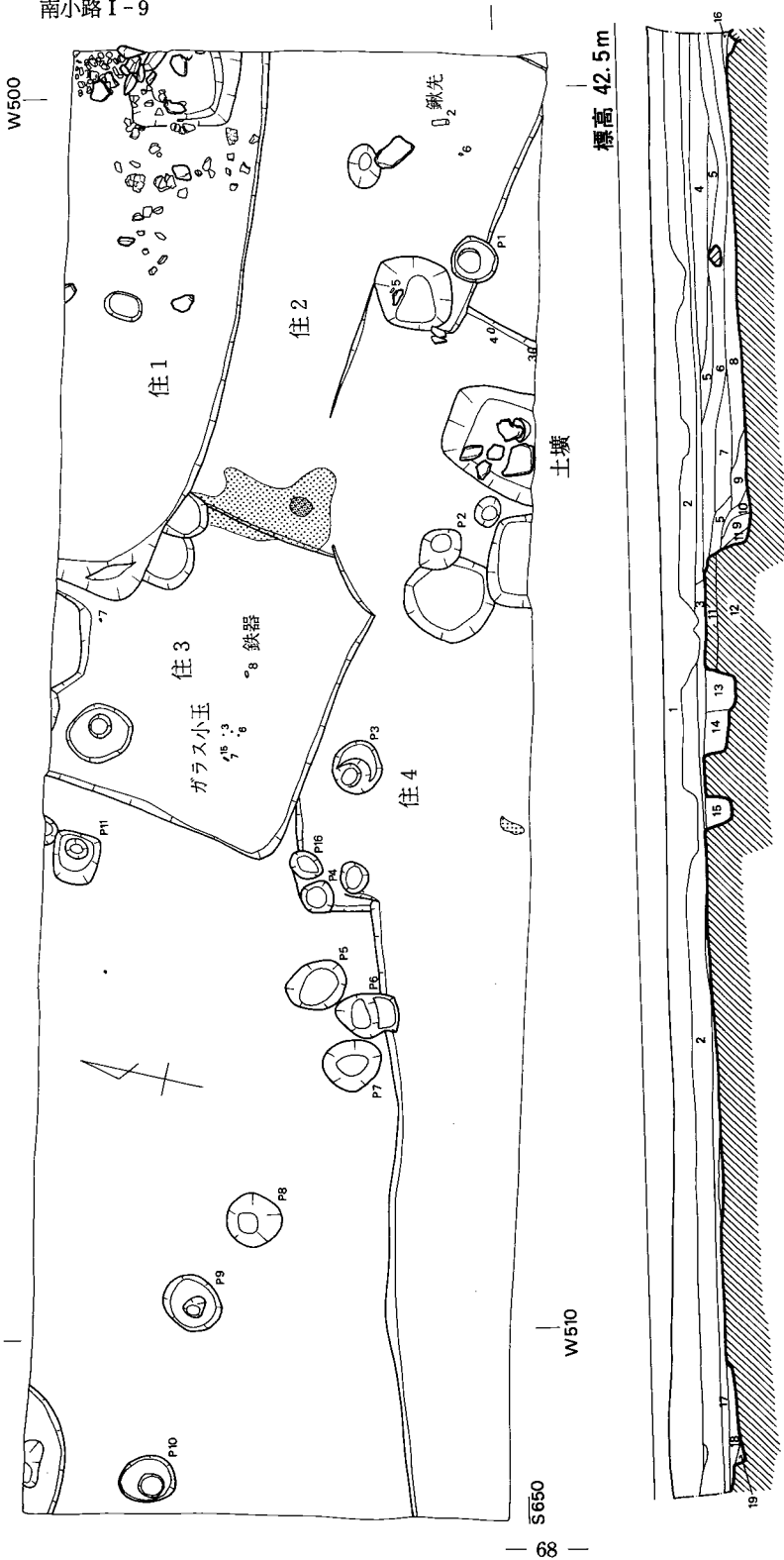
(1) 1号住居跡 (図版39)

北東部に検出された, 東西4.5m以上になる住居跡。南西隅のコーナーがあり不整形プランになると思われる。周壁は約40cmあり, 堅緻な床面に至るが, 周溝はない。床面を掘り込むピットは2つあり, 東側の例は土壙状になる。埋土は黒褐色土で, 途中に黄色粘土の薄い層を挟むので粘土の上を上層, 下を中層, 更に下位の黄色粘土ブロックを含む暗茶褐色土を下層と区別したが, 中層から下層にかけて, 拳大から人頭大程度の礫が集積していた。この礫の集積は特にまとまりをもたず, 投げ込まれただけのものと解せられるが調査区域外にも及ぶ。

住居跡内埋土には, 上層に弥生中期の土器片も多く含まれていたが, 土師器もあり, 鉄器・玉類も出土した。中層, 下層では土師器が殆んどで, 小形壺以外は小さな破片が多い。

① 土器 (図版40, 第53図)

1・2が上層, 3~8が中層, 9~15が下層から出土した。1は高杯杯上半部破片, 2は内



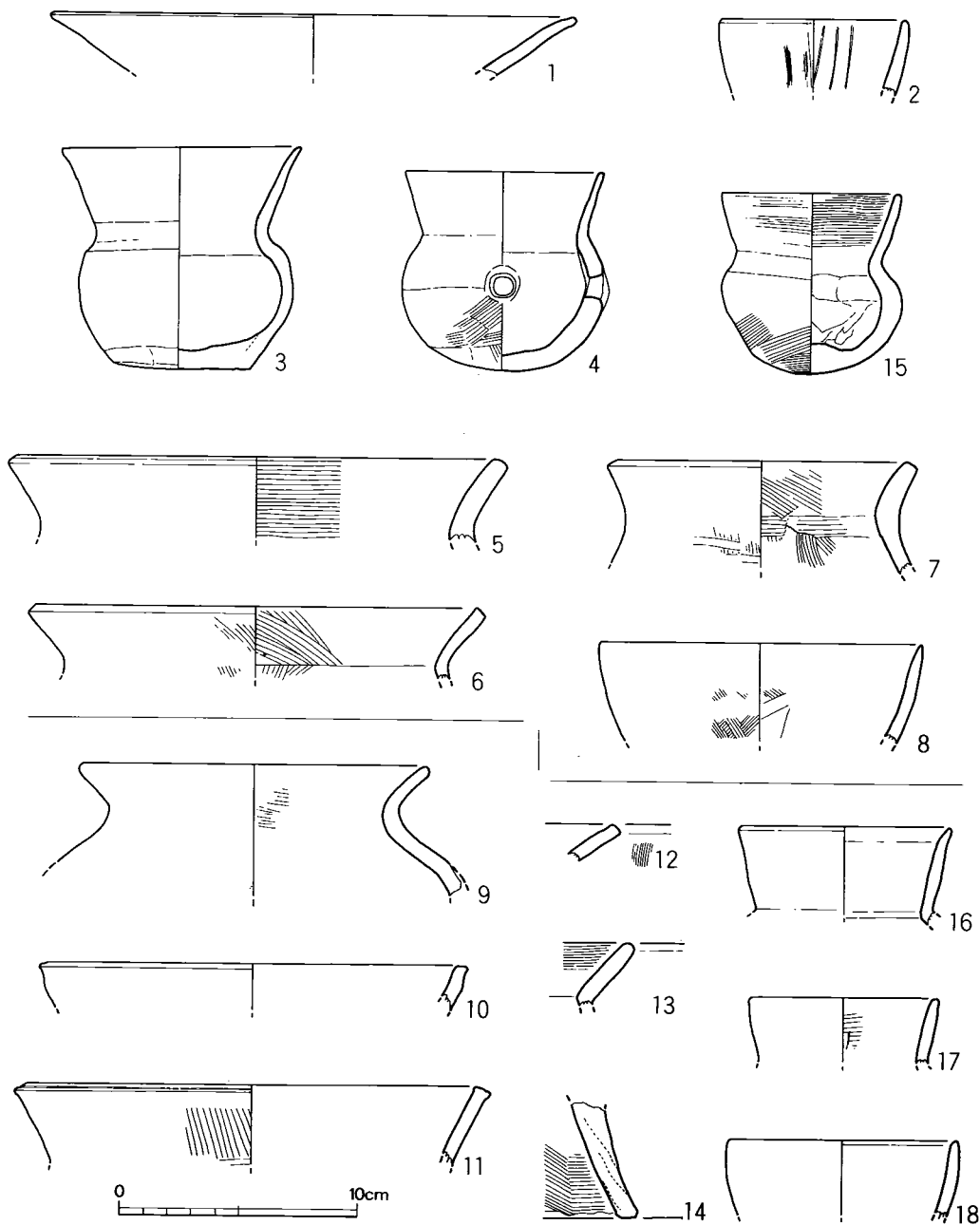
- 1. 再堆積砂土
- 2. 暗灰色土 (旧表土)
- 3. 灰黄褐色土
- 4. 黒褐色粘性土 (黄色土混り)
- 5. 黄色粘土 (暗褐色土混り)
- 6. 黒褐色土 (黄色粘土混り)
- 7. 暗褐色粘性土

- 8. 暗黄褐色土 (黄色粘土塊混り)
- 9. 暗黄褐色粘性土
- 10. 黄褐色粘性土
- 11. 黄色粘性土
- 12. 黄色砂質粘性土
- 13. 淡黒褐色粘性土
- 14. 暗褐色土

- 15. 暗灰黄褐色土
- 16. 黒色土
- 17. 茶褐色粘性土
- 18. 暗灰褐色土
- 19. 暗茶褐色土

第 52 図 I-9 遺構配置図, 北壁断面土層図 (1/60)

湾気味に立ち上る口縁部破片で碗か小形壺であろう。外面は縦方向のミガキ、内面はヨコナデのあと暗文風のヘラミガキを加えている。



第 53 図 I-9 出土土器実測図① (1/3)

南小路 I-9

3・4は小形壺で下層に近い位置から近接して出土した完形土器。3は平底扁球形体部を持ち、直線的に広がる口縁部は端部で薄く外反気味になる。口径10cm, 器高9.3cmの大きさ。胎土に褐色粒を含みヨコナデ・ナデ調整されるが、底部とその周辺にはヘラケズリと思える痕跡がある。4は、器壁の厚い球形体部に直線的な伸びをする口縁部をもつ。体部の中央に焼成前の円孔が1孔穿たれる窟である。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケ目のあとナデ、内面はケズリのあとナデられ、底部はヘラケズリされる。口径8.3cm, 器高8.4cmを測る。5・6は甕口縁部破片で、短く外反する口縁部をもつが、6の口縁部はハケ目調整のあと外面をヨコナデし、口縁部は内側に摘み上げ気味になる。僅かに残る頸部以下は内外面共にハケ目調整される。7は口径が小さく厚手の口縁部をもつ甕で、内外面共にハケ目調整されるが、外面にはヨコナデ・ナデが加わる。8は口径と器高の比が2:1に近い器形になる椀。外面は細かなハケ目、内面はヘラケズリされ、ヨコナデが加わる口縁部は薄く尖る。

9は壺の口部頸破片で窄んだ頸部から短く外反する口縁部に至るが、頸部内面に若干ハケ目が残る以外器面は風化している。10~13は甕と思われる口縁部破片。端部の外面が凹む10と内面が凹み気味になる12, 丸くおさまる13と、面取りされる11とバラエティがある。14は支脚ないしは器台の裾部破片で、内面の下端にくもの巣状になるハケ目がある他はナデ調整されている。15~17は小形丸底壺で15は口径7.5cm・器高7.6cmの完形器。15の口縁部は内湾気味に伸び内外面共にヨコ方向のハケ目が施され、体部の外面ハケ目、内面はヘラケズリされる。18は内外面共ナデ調整の深い体部になる椀形土器である。

② 鉄器 (図版40-3, 第56図1)

長さ9.6cm, 幅2.2~2.4cm, 厚さ2~3mmの大きさをもつ手鎌の完成品。緩やかな弧状を呈し、両端が折り曲げられて袋になるが、背側の内面に幅7mm程度の木質が残る。

③ 玉類 (図版40-4, 第57図1・2, 表5)

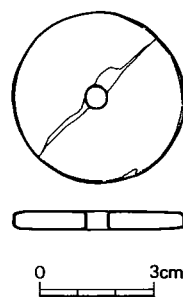
1は上層と中層の境目から出土した結晶片岩製の扁平な白玉で、周縁の中程に丸味のある僅かな稜がある。2はガラス製の微小小玉で、赤褐色を呈し、透明度はあまりない。

(2) 2号住居跡 (図版39)

トレンチの南東隅に、住居跡の南東コーナーがあり、東壁の一部と南壁を1.7m分検出したが、高さ2.5~6cmと浅く西側では攪乱による落ち込みで削平されていた。東壁に対応する西壁については西側4.3mの位置にある僅かな高低差を考えているが、北側を1号住居跡によって切られ、南側は削平されている。床面は堅緻で南西部では貼り床が薄いながらもみとめられ

た。床面を掘り込むピットは2つあり20~25cmの深さを有しているが、南壁と重複するP1は中世のピットでこの住居跡には伴わない。なお東側のピットの脇には作業台に使用した可能性のある花崗岩の扁平な石が床面に据えられていた。西端部の床面に赤色顔料の散布が小範囲にみられた。

住居跡内からは、若干の土器片と、石製紡錘車・鉄器が出土したが、鉄器のうちの1点(5)はピット内から出土している。



第54図 I-9 出土石器実測図(1/2)

① 土器(第55図19~28)

いずれも小破片で全体の形状のわかる例はない。19は壺と甕の区別のつけ難いものだが直口気味で外面はタタキ痕のあとをナデており内面をハケ調整している。20は外方に開くヨコナデ調整の薄手な口縁で中形壺だろう。21~23は甕の口縁部破片で、いずれも口唇部内面が摘み上げられている。24は器高と口径の比が1:3以上になる椀で、内湾する口縁部を有し外面をハケ目、内面をヘラミガキ調整している。25・26は高杯・器台と思われる裾部破片。26は外面ハケ目、内面を板状工具でナデており板木口圧痕が残る。

② 石器(図版40-2, 第54図)

北東部の上部から出土した白雲母片岩製紡錘車。一部を欠損するが、外径45mm、厚さ5mm、孔径5.4~5.8mm、重量の現存値19.6gを測る。

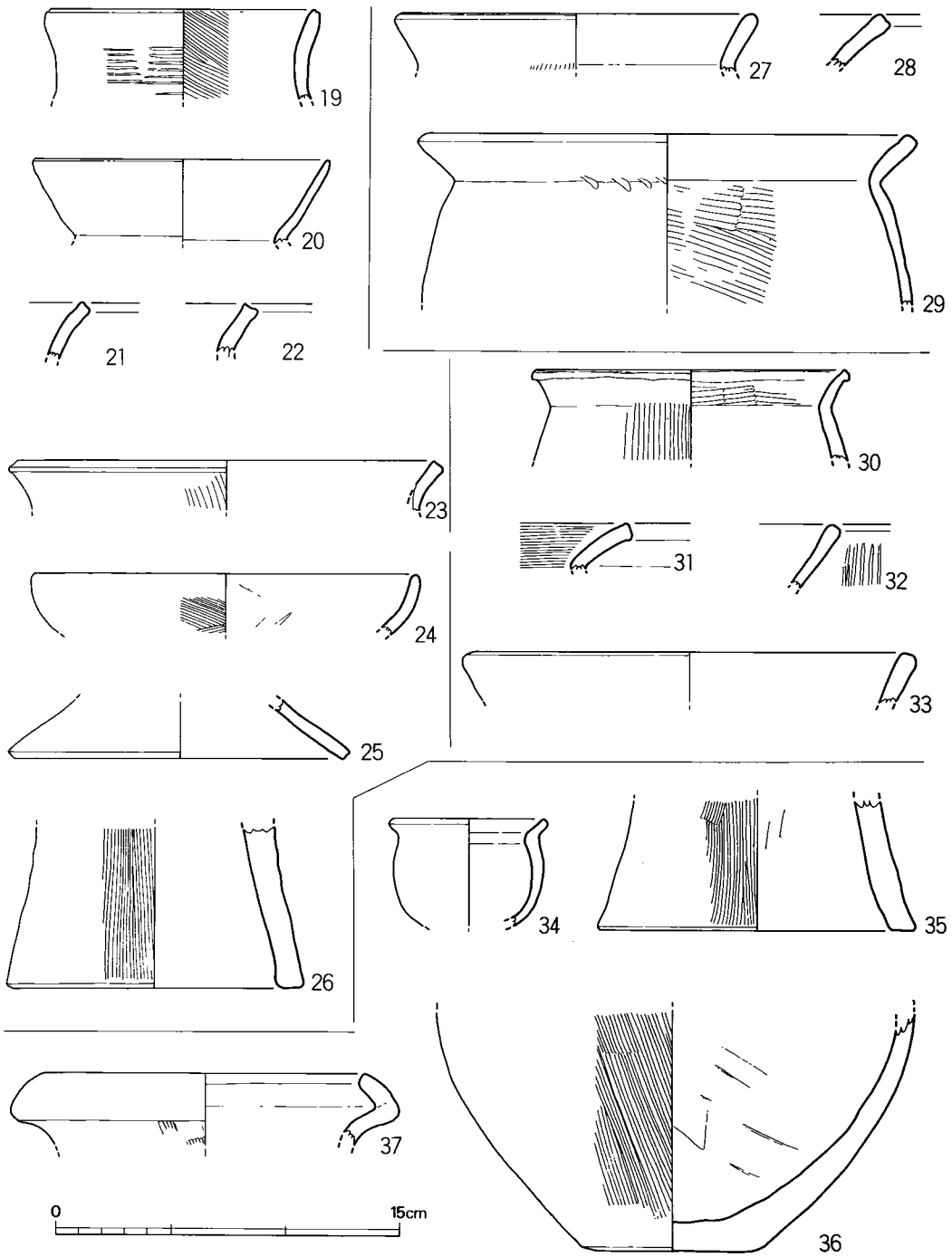
③ 鉄器(図版40-3, 第56図2・5・6)

2は長さ6.7~6.8cm、幅11.2~11.6cmの大きさの鋤先。刃部で2.5mm、背で3.5mmの厚さになる板状素材の両端を折り曲げて雇柄を入れる袋部にしているが、袋部の厚さは1.4cmを測る。木質の遺存はみられず、背の上面の一部には敲いた為に生じたはみ出しがみられる。刃部の一部に抉れたような欠損がある。5の破片は1.2~1.5cmの幅で弧状を呈し、断面は浅いU字形なので鉤かも知れないが刃部はない。6は、不整円錘状を呈すもので、先端部を欠き、基部は中空になっているが本来の用途は不明。

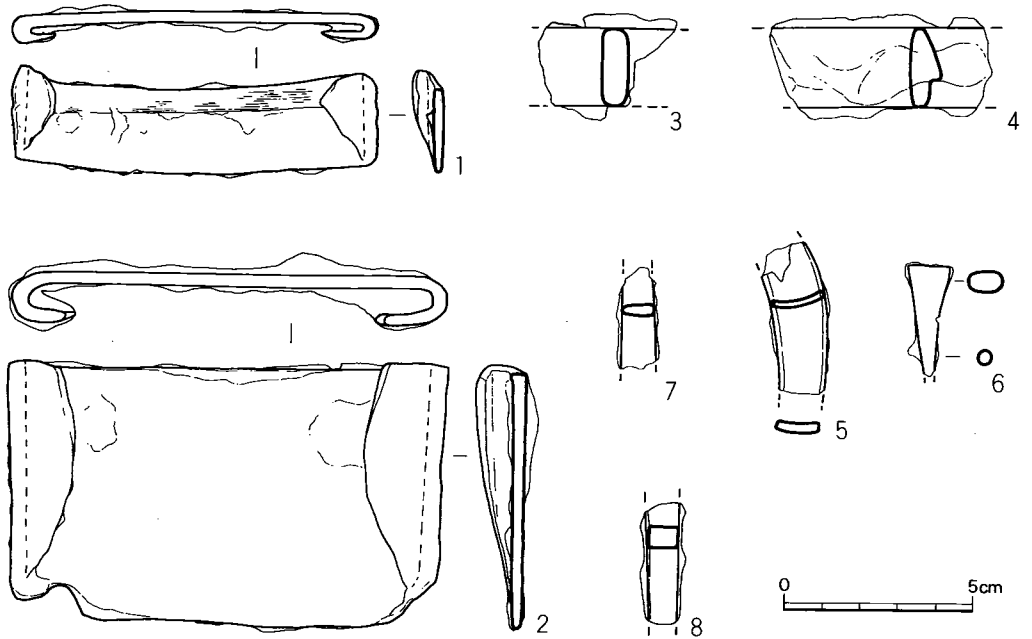
(3) 3号住居跡(図版39)

中央部の北半にあり、1・2号住居跡によって東部を切られるが、西壁1.8m、南壁2.2mを検出した。壁高は西壁が20cm、南壁が6~7cmを残すのみである。2号住居跡西壁の下に焼土が広がり、2号住居跡の貼り床部分の位置からして3号住居跡の規模は東西4.6m程度であ

南小路 I-9



第 55 图 I-9 出土土器実測図② (1/3)



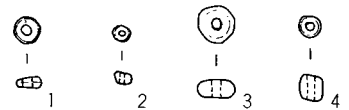
第 56 図 I-9 出土鉄器実測図 (1/2)

ったと推定されるので、炉跡はこの住居跡に伴うことになる。しかし南壁から 60cm 程度しか離れないことと、調査区北壁に沿ってみられる黄色粘土の張り出しのある点に南北の規模での疑問は残る。床面は黄色粘土でやや堅緻な状態だが、床面を掘り込むピットのうち西壁に近いピットはこの住居跡に伴ない調査区北壁にかかるピットは後出する。

住居跡内からは、若干の土器片と、床面に接して鉄器が 2 点と、ガラス小玉が 22 個出土した。ガラス小玉は 9 個が連なっており、他はその周辺から散乱して出土した。

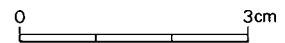
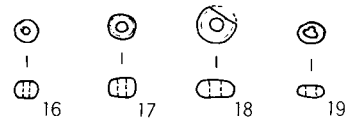
① 土 器 (第55図27~29)

いずれも甕の口縁部破片で、口縁部はヨコナデされるが、28では口唇部が凹み気味に面取りされる。29の例では胴部内面にハケ目調整がみられる。



② 鉄 器 (図版40-3, 第56図7・8)

2 点共に部分的な小破片で本来の形状は不明。7 は扁平で一方の側縁がやや薄くなるので刃部をもつ利器の茎部かも知れない。



第 57 図 I- 出土玉類実測図 (実大)

③ 玉 類

表5 南小路 I-9 出土玉類一覧表

(単位 mm)

(図版40-4, 第57図, 表5)

22点のガラス小玉が出土している。全てコバルトブルーの色調を呈すが若干色調に濃淡はある。このうち7~15は一直線に連結された状態で出土し、(図版に示す連結は出土時と同様で7は南側)4~6もその東側にやや間隔をおいて並んでいた。このうち、19の扁平な小玉は、孔の内面に棘状の突起があり、孔が重複した状態にもみえる。他の例に比して色調は濃く、環の一部が乱れて膨らむことから、製作手法は巻きつけの疑いがある。

(4) 4号住居跡

(図版39)

3号住居跡の南側に重複し、3号住居跡によって切られるが、僅かに北西コーナーが残る。ただしこのコ

ナーの部分も、糸切り底の土師器小皿片を含むP4・P16と重複しており、すぐ南側まで攪乱が及んでいるために余り明瞭ではない。東半部についても2号住居跡と重複しており不明瞭だが、東部にある7cm程度の段を東壁とすれば、東西4.6mの規模になるものの、不整形なプランになる。いずれにしても大半に攪乱が及ぶので床面といえる部分は少ない。従って住居跡に伴うピットの判定も困難だが、土壌についてはこの住居跡に伴う。攪乱を受ける部分にも若

No.	出土地	外径	孔径	厚さ	分類	質・色
1	1号住	3.6	1.7	1.4	白玉	結晶片岩 うす緑色
2	〃	2.1	0.6	1.7	微小	ガラス 赤褐色
3	3号住	5.0	1.5 1.2	2.6	C	〃 コバルトブルー
4	〃	3.3 3.0	0.9	3.6	A	〃 〃
5	〃	5.4	1.9	2.2	C	〃 〃
6	〃	5.0	1.4	2.8	C	〃 〃
7	〃	3.6	1.4	2.2	C	〃 〃
8	〃	3.15	1.9 1.2	2.4	C	〃 〃
9	〃	2.9	1.2	1.9	C	〃 〃
10	〃	3.4	0.8	2.4	C	〃 〃
11	〃	3.2	1.0	2.0	C	〃 〃
12	〃	3.1	1.0	2.7	C	〃 〃
13	〃	3.1	1.0	2.2	C	〃 〃
14	〃	3.5	1.25	2.2	C	〃 〃
15	〃	3.3 2.9	0.9	2.5	C	〃 〃
16	〃	3.3	0.9	2.3	C	〃 〃
17	〃	3.6	1.2	2.6	C	〃 〃
18	〃	5.2	1.2	2.3	C	〃 〃
19	〃	3.7 3.2	1.7 1.4	1.6	D	〃 〃
20	〃	3.0	0.9	3.4	A	〃 〃
21	〃	3.2	1.0	2.5	C	〃 〃
22	〃	3.6	1.2	2.7	C	〃 〃
23	〃	3.7	1.0	3.5	C	〃 〃
24	〃	5.0	1.8	2.3	C	〃 〃

干床面と思える部分があり、焼土もみられたが広がり解らない。

住居跡内からは若干の土器片と、東壁直下に鉄器2点が出土した。また土壌には、人頭大程度の花崗岩・角閃片岩・雲母片岩があり、若干の土器片も出土した。

① 土器 (第55図30~37)

30~33は甕の口縁部破片で、住居跡埋土から出土した。30・31の外反する口縁部は口唇部内外面が凹み気味になり、内面にハケ目調整がみられる。また30と32の外面には縦方向の粗いハケ目がみられ、30の胴部内面はナデられる。

34~37は土壌内から出土した。34は手握風の小型品で短く外反する口縁部をもつ。35は器台の裾部破片で内面に板状工具の木口圧痕が残る。36は平底の壺形土器底部。外面はハケ目調整、内面はヘラナデ調整されている。37は複合口縁の壺形土器口縁でやや稜をもって屈折する。

② 鉄器 (図版40-3, 第56図3・4)

2点共に破片資料で全体の形状は不明だが、幅2.1cmの扁平な棒状を呈す点が共通し、出土地点も近接しているので同一個体の可能性がある。厚さは3が7mm、4が6mmを有し、4の一面は段をなして膨らむ。この膨らみは平面形では蛇行しているが本来からの膨らみなのか銹化に伴うものか判らない。

3 小 結

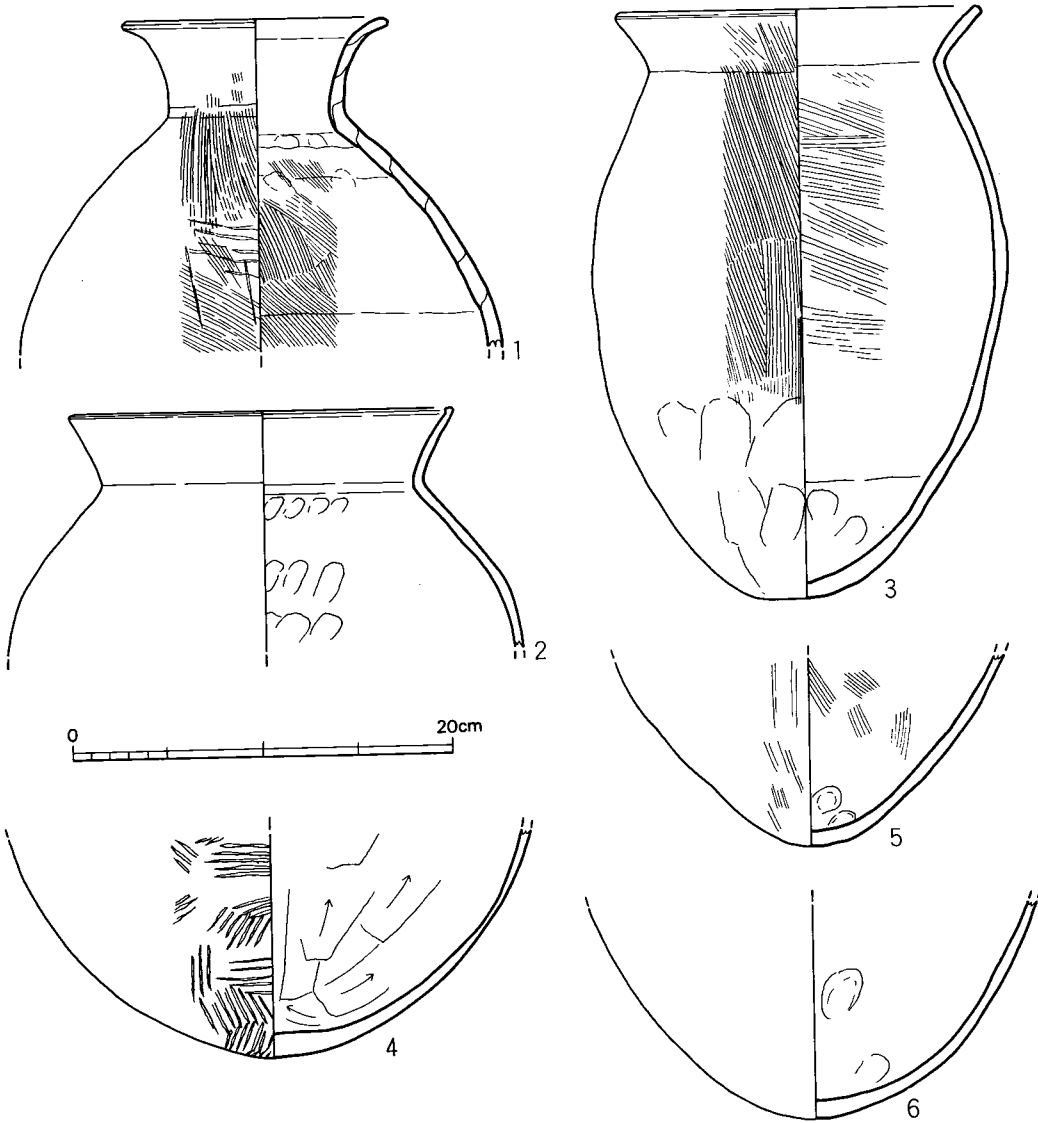
これらの住居跡の重複関係では4→3→2→1の先後関係がある。1号住居跡の土器では下層に若干古い可能性を残すものの小形丸底壺から5世紀前半頃、2号住居跡は甕からは庄内式新段階併行が考えられるが中形壺は典型布留式期の可能性もある。4号住居跡の土器では土壌内出土土器に弥生後期に溯る例をみるものの終末頃の可能性があるが、埋土出土土器では2号住居跡出土の古いものや3号住居跡の例とに顕著な差がみられない。3号住居跡については布留式古段階あたりに併行すると考えたい。(小池)

第4節 南小路Ⅱ地区

1 概 要

水道管理設工事が、Ⅰ地区周辺の道路で行われたので、工事に立会をしたが、Ⅰ-1・3北側とⅠ-1・2の道路下では、前者で弥生時代の遺物包含層が観察されただけで、後者からの遺

南小路Ⅰ地区



第 58 図 Ⅰ-1・2 出土土器実測図 (1/4)

物の出土は皆無に近かった。

しかし、Ⅰ-1・2 東側の道路下では黒褐色土の落ち込みが観察され、一部を発掘して一括土器群を得たので以下に報告する。

なお、Ⅰ-8 北側の道路下でⅠ-7 に近い地点でも、同様の落ち込みが観察されたが、この落ち込みは、西側から東側へ落ちる谷部に相当するものかも知れない。弥生時代後期前半の丹塗り袋状口縁壺など若干が出土した。

2 遺物

土器 (第58図)

壺 1 は口径13.9cm・頸部径9.1cm・胴部最大径約26cmを測る。器内は、胴部を浅くて細めの斜方向ハケ目で仕上げるが、胎土接合時の押えによる凹凸を残す。肩部は接合時の指押えのままで、接合面の調整はせず、口縁部のみヨコナデを施す。器外は頸肩部に縦方向・胴部に斜方向ハケ目を施すが、胴上位に一部荒いタタキ痕が消されていない。精製胎土に0.5~1.5mm大の砂・赤褐色粒・金雲母片を含み、焼成は普通で、器内外共に橙褐色・器肉灰褐色を呈す。

4は器外は太いタタキ・器内はヘラケズリで仕上げ、胎土に1.5~4.0mm大の砂・赤褐色粒・金雲母粒を含み、焼成は良い。大形の壺の底部片で、体部は4.0mmと薄いが、底部は1.0cmと厚手のままである。

甕 (2~6) 2は口径20.2cm・胴部最大径約27cmを測る。胴部は器内外共に摩滅が著しいが、器内では一周して指押え状の凹凸が残り、ヘラケズリは現状では確認されない。口縁部は直線的に外反し、内端部はシャープな稜を有す。胎土に0.5~4.0mm大の砂粒を含み、焼成は普通で淡黄褐色を呈す。

3の器内は下位が摩滅するが指押え痕を残し、上~中位はハケ目仕上げのままである。器外は下位をヘラケズリ、上~中位はハケ目仕上げのままで、口縁部のヨコナデは雑でハケ目が残る。口縁上面は平坦で、外端部は若干凹む。胎土に0.5~1.5mm大の砂粒を多く含み、焼成は良く、器内茶褐色・器外暗褐色を呈し、器外は口縁部まで煤の付着をみる。

5は器内底部は指押え・胴下位はハケ目仕上げで、器外はヘラケズリを施す。6は摩滅が著しいが、器内指押えナデ・器外ヘラケズリを施す。

以上の土器で、1の壺は、器内外の細いハケ目や接合の状態と共に、口頸部の特徴は畿内第5様式の特徴を呈す。しかし、搬入土器とするには、太目のタタキ痕や胴部の張りが小さい撫で肩を呈すなどに加えて研磨されていない点を考慮すれば、外来の影響化に造作されたことも一部に考えられよう。2の甕は布留式でも古い特徴を認める。この両者に、3以下の甕が共伴するかどうかは遺構の性格が不明であるため判然としないが、3の下位は強いヘラナデ様ではなく明らかなヘラケズリで、頸部の屈折にやや丸味があり、口縁部上端面は凹まないなど、弥生時代終末期より新出のものであるとは言えよう。(馬田)

註1 後藤直「青柳種信の考古資料(一)——三雲南小路と井原縫溝に関する資料」(『福岡市立歴史資料館研究報告』5, 1981)

2 陝西省文物管理委員会「陝西長安洪慶村秦漢墓第二次発掘簡記」(『考古』1959—12)

第3章 科学的分析

三雲遺跡出土青銅器・ガラス遺物の鉛同位体比

東京国立文化財研究所 馬淵久夫

青山学院大学理工学部 平尾良光

1. はじめに

鉛は質量の異なる四種の同位体 ^{204}Pb 、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb の混合物であり、その混合比（同位体比）は鉛鉱床ごとに異なるので、その精密な測定によって原料の産地推定を行なうことができる（註1）。

筆者らは弥生から古墳時代にかけての舶載及び国産の青銅遺物の原料をこの方法で研究しており（註2）、特に弥生時代については朝鮮半島産と中国産の原料が併存していることを確かめた（註3）。今回、福岡県教育委員会の依頼により、三雲遺跡出土の前漢鏡・後漢鏡などの鉛同位体比を測定した。

2. 実験法

本法はほとんど非破壊法と言って差支えない。遺跡出土の青銅器に必ず生じている銹を微量（約1 mg）採取すればよく、外観を損なうことは全くない。古墳時代以前の青銅器は少なくとも数パーセントの鉛を含んでおり、銹もそれに近い鉛を含んでいるので、1 mg中には数十マイクログラムの鉛がある。試料の化学分離によって得られた鉛のうち約1 μg を取って、東京国立文化財研究所に設置されている日本電子社製表面電離型質量分析計で測定した。

3. 結果と考察

測定値は表6のようになった。

第59図には既に確立した舶載青銅器の分布範囲を示してある。即ち、右上方の2本の線の間には前漢鏡が入り、左下方の2本の線の間には後漢、三国、晋の鏡が入る（註3）朝鮮半島製とされている多鈕細文鏡、細形銅利器は、横軸は後漢以後の鏡と同じ範囲乃至それ以下（0.86以下）

表6 三雲遺跡鉛同位体比測定結果

No.	資 料 名	出 土 地	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	Pb/Cu (%)
1	重 圈 彩 画 鏡 (1号鏡)	南小路1号甕棺	18.240	0.8554	2.1326	7
2	雷 文 鏡 (2号鏡)	〃	17.843	0.8731	2.1603	4
3	連弧文清白鏡 (3号鏡)	〃	18.554	0.8442	2.1153	7
4	〃 (5号鏡)	〃	17.832	0.8735	2.1617	9
5	〃 (7号鏡)	〃	17.921	0.8692	2.1561	10
6	〃 (4号鏡)	〃	18.118	0.8614	2.1438	9
7	〃 (8号鏡)	〃	17.800	0.8746	2.1659	9
8	重圈(清白)鏡 (21号鏡)	〃	17.839	0.8724	2.1627	4
9	重圈(精白)鏡 (19号鏡)	〃	17.755	0.8756	2.1642	5
10	金銅四葉座飾金具	〃	18.200	0.8581	2.1416	7
11	金銅四葉座飾金具	〃	18.563	0.8438	2.1171	6
12	鈴状不明金具	〃(攪乱)	18.379	0.8529	2.1110	3
13	星雲文鏡 (1号鏡)	南小路2号甕棺	17.693	0.8788	2.1717	6
14	連弧文昭明鏡 (2号鏡)	〃	18.091	0.8629	2.1453	5
15	連弧文日光鏡 (9号鏡)	〃	17.684	0.8792	2.1731	7
16	内行花文鏡片	イフ I-3	18.493	0.8488	2.1021	5
17	〃	寺口2号石棺	18.480	0.8515	2.1088	10
18	小形仿製鏡	塚廻り	17.753	0.8766	2.1668	11
誤 差			±0.010	±0.0003	±0.0007	

※ 右端の欄には銹試料中の鉛と銅の比を記した。銹の化学組成は本体とは異なっているのが普通なので、飽くまで参考値である。

に分布するが、縦軸が大きい値をとり明瞭に区別される(註4)。そのおよその場所を点線(朝鮮系遺物ライン)で示した。以下、これらの分布パターンを基準にして今回測定した資料の原料産地を推定してみる。

(1) 前漢鏡

測定した12資料のうち「前漢鏡の範囲」に入るのは、No.2・4・7・8・9・13・15の7面であり、これらは過去に測定した十数面と全く一致する中国北部産の鉛である。

問題は残りの5面である。No.1・3の2面は点線より若干上方に位置するが、朝鮮系遺物、即ち多鈕細文鏡や細形銅利器と同類の鉛であると考えて間違いないであろう。No.6, 14の2

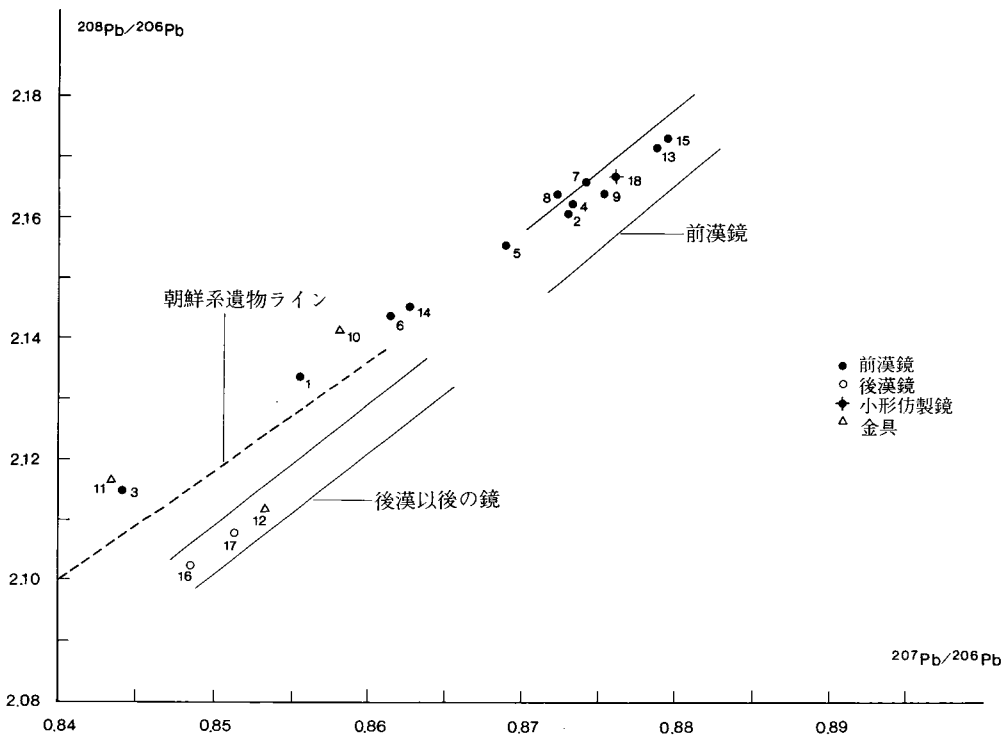
鉛同位体比

面はラインより右にはみ出るので、朝鮮系の材料にわずかの中国系の材料が混入されたものかもしれないが、朝鮮系原料が主なものであるとしてよいであろう。No.5は「前漢鏡の範囲」からわずかに下にはずれるが、これは逆に中国系の材料に朝鮮系の材料が少し加わったものとも考えられる。

いずれにしても、今回測定した資料の中に朝鮮系原料で作られた前漢鏡があることは確実である。既に発表した前漢鏡は、須玖岡本、立岩、宝満尾、丸尾台、二塚山、椋島山などの遺跡から出土した12面であるが（註2・3）、朝鮮系と判断されるものは一面もなかった。従って、今回見出された事実ははじめてのものである。前漢時代の鏡作りの状況から考えて、朝鮮半島産の原料を使って中国国内で鏡を作ることは考え難いので、恐らくNo.1・3・6・14（No.5もか？）が作られたのは朝鮮半島内であったろう。

(2) 後漢鏡

No.16・17は共に「後漢以後の鏡の範囲」に入り従来の測定結果と一致している。華中・華



第 59 図 鉛同位対比プロット図

南の原料と思われる。

(3) 小形仿製鏡

筆者らは既に弥生式小形仿製鏡を16面測定したが、朝鮮系原料と推定される熊本県合志町木瀬住居跡出土の1面を除いて、他は全て「前漢鏡の範囲」の中のさらに狭い範囲に集中することを見出した(註3)。No.18はこれら15面と全く一致した同位体比をとることがわかった。原料は華北の産である。尚、銅鐸の内近畿式・三遠式は全てこれらの小形仿製鏡と同じ鉛を使っていることが既に報告されている(註4)。

(4) 金銅四葉座飾金具

図に見られるようにNo.10・11はいずれも朝鮮系原料で作られていると考えられる。

(5) 鈴状不明金具

No.12の鉛同位体比は「後漢以後の鏡の範囲」に入り、後漢以後の中国産の原料と思われる。尚、この資料の同位体比は筆者らが測定した福岡市野方塚原遺跡の浮彫式獣帯鏡(「福岡市立歴史資料館研究報告」第6集中のNo.9)(註5)と全く一致していることをつけ加えておく。

付 記

下記の表の5点の資料の鉛同位体比を追加測定した。

No.19の連弧文清白鏡は、華北産の鉛である。

No.20~23のガラス中の鉛は、すべて中国北部の鉛を含むが、前漢鏡の鉛とは系統の異なる鉱山から採ったものと思われる。No.21の璧とNo.22の管玉は、誤差の範囲で一致した値を示している。これらガラスの値は、Brillらによって米国で測定された須玖・立岩・宇木汲田など

No.	資 料 名	出 土 地	$\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	備 考
19	連弧文清白鏡(6号鏡)	南小路1号壙棺	17.893	0.8702	2.1593	(立岩と) (同 型)
20	璧 (ガラス No.1)	〃 〃	17.628	0.8847	2.1961	
21	璧 (ガラス No.2)	〃 〃	17.590	0.8854	2.1938	
22	管 玉 (ガラス No.3)	〃 〃	17.591	0.8854	2.1950	
23	勾 玉 (ガラス No.4)	〃 2号壙棺	17.751	0.8796	2.1875	

結 語

の遺跡から出土したガラス類の多くと同系統の値を示している。

(R. H. Brill et al., "Lead Isotopes in Some Japanese and Chinese Glasses, *Ars Orientalis*, 11, 1979)

- 註1 馬淵久夫・富永健編『考古学のための化学10章』（東京大学出版会，1981）
- 2 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」（『MUSEUM』370，1982）
- 3 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)」（『MUSEUM』382，1983）
- 4 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」（『考古学雑誌』68-1，1982）
- 5 馬淵久夫「福岡市立歴史資料館が保管する鏡の鉛同位体比」（『福岡市立歴史資料館研究報告』6，1982）

第4章 結 語

1. 南小路甕棺墓と墓域

南小路の2基の甕棺墓の周辺には、前述したように直接関係あるものとして西側に祭祀溝があり、後続するものとして南側の土壇状遺構がある。祭祀溝上層には、丹塗土器を含む後期中頃までの土器が含まれ、その後掘込まれた大溝・小溝と仮称している遺構にも中期から後期後半の土器が含まれている。これら3条の溝状遺構は、東側に2基の特別な甕棺墓があることを考えると、基本的に2基の甕棺墓に関連する遺構とすることができる。3条の溝は、祭祀に関連する遺構であると同時に、2基の甕棺の墓域の西側を区画する「溝」であろうと考える。祭祀溝下層には、図示した土器以外に細片ながら透窓付丹塗大形器台片が存在することから、2基の甕棺墓より若干古い時期の土器が含まれる可能性があるが、基本的には2基の甕棺墓埋葬以後に3条の溝と土壇が掘られている。さらに、南小路I-5地区の北側の東西の小道に水道管を埋設する際に、祭祀溝北側の延長線上で細片ながら同時期の丹塗土器片が採集されていることから、これらの遺構が北側に伸びる可能性も含んでいる。

2基の甕棺墓の北側はI-5地区に当るが、この地区では弥生から古墳時代の遺構・遺物がまったく出土していないことから、この地域は完全に墓域内であり、祭祀溝が小道まで伸びていることを考えると当然ともいえる。

南小路地区の東側には、道路と水路があるところから、墓域の東境を確認するために水路西端までトレンチを伸ばしたが、さらに近世の溝が埋没していたのが確認されただけで、南小路地区内では東限を検出できなかった。したがって、道路の東側のヤリミゾ地区に2本のトレンチを設定したのであるが、北側のトレンチには何らの遺構もなく、南側トレンチでは東側に落ち

る段を検出した。この落込みでは、トレンチが狭いためと遺物がないために、遺構の性格は不明な点が残念である。土地所有者に無理にお願いして調査しただけに拡張は断念せざるを得なかった。しかし、時期の違う遺構であるにせよ、1号甕棺墓墳からこの落込みまでの17mの間に他の遺構がないであろうことは推測され、墓域の東限とすることもできる。仮にこれを東限とした場合は、墓域の東西の長さが約32mということになる。墓域の南北の長さを考えた場合は、現状では約22mの間に他の墳墓などは検出されておらず、22mから32mの方形の墓域が存在した可能性が大きいといえるだろう。

この墓域設定が成立する理由は、西側のI-8・9には時期が新しいが多数の住居跡などの遺構が重複するし、南側の上覚・ヤリミヅ地区は弥生後期の墓地を含む多数の遺構が重複することから明らかなように、南小路1・2号甕棺墓付近は中世になって初めて、1・2号甕棺墓に無縁の遺構が営まれるのである。少なくとも弥生中期以後、古墳時代頃までは兆域としての意識が存在したと考えられる。

この墓域内には、この2基の甕棺墓のみであった可能性は強いが、「略考」に「村民云、此地は古昔より圃^{ハタ}なりしを、近古溝を掘て水を曳き田となせり、其間数十年也、近き比又圃となせり、初メ溝を掘たりし時も古鏡^{カタリ}を得たり、崇^{ウツ}あらんことを恐れて、其傍に瘞^{ウツ}めり」とあることから、鏡を持った墳墓がほかにも存在することも考えられる。この問題は、最終的には未調査地区の調査が完了した時点で考えるべきであろうが、立岩堀田遺跡のような群集墓でないことは確実である。

2. 甕棺の型式と時期

北部九州の甕棺型式については、1966年に森貞次郎氏が示された編年(註1)が基礎となっている。さらに森氏は、1968年に次のような編年を発表された(註2)。

伯玄式 — 前期後半
 金海式 — 前期末
 城の越式 — 中期初頭
 汲田式 — 中期前半
 須玖式 — 中期中頃
 立岩式 — 中期後半
 桜馬場式 — 後期初頭
 三津式 — 後期中頃
 日佐原式 — 後期末

この甕棺の編年は、一見してわかるように甕棺墓として著名な遺跡名を掲げたものであるが、この時点では伯玄式・汲田式・立岩式の各遺跡は未報告であり、桜馬場式は未確認の甕棺である。この中で、伯玄式については1983年に指摘したように(註3)、実際は前期末のものに対して付けられたものであり、伯玄式は金海式より古い型式であることに違いはないので、金海式が中期初頭となることも指摘した。

さらに、何よりも本報告書と関連する須玖式については、当時としては三雲・須玖岡本の二

結 語

大甕棺墓を想定した設定であったことである。すなわち、立岩堀田遺跡の発見以後、立岩より古式の鏡を持ち、鉄器を持たない両遺跡を中期中頃としたのである。この点、橋口氏は立岩式をKⅢb・KⅢc式に2分して、三雲1号と須玖岡本をKⅢb式、三雲2号をKⅢc式とされた。これでは、立岩10号甕棺もKⅢc式とされているのであるが、橋口氏が図示されているもので比較すれば、三雲1・2号と立岩10号はKⅢb式である。強いてKⅢc式の中で型的的に近いものを上げると道場山K26下の甕棺であろうが、他の甕棺はKⅣa式に含まれている甕棺より新しいものが含まれている(註4)。

三雲南小路の1・2号甕棺は、結論的に述べると型的に立岩10号と同型式であり、とくに1号は中期後半のうちでも新しい段階のものである。これは同時に、須玖岡本D地点甕棺も同時期であり、東京国立博物館所蔵の甕棺片もこれを証明している。

3. 鉛同位体比法の結果について

ここに馬淵久夫・平尾良光両氏によって報告され結果は、意外な結果であるといつてよい。それは、前漢鏡の5点と金銅四葉座飾金具に朝鮮系遺物と同類の鉛が使用されているというのである。両氏が述べられているように、朝鮮半島内で製作されたとすると、楽浪郡設置後に漢の工人が朝鮮系原料を使用して前漢鏡を製作したことになる。北部九州に多量の前漢鏡が「輸入」されていることを考えると、楽浪郡で倭人向けに前漢鏡を製作した可能性が充分考えられる。とくにNo.3(3号鏡)のように、泉屋博古館蔵鏡(鏡1)と同型鏡(註3)があるような鏡は、この考えを裏付ける物証となる。しかし、追加測定したNo.19(6号鏡)は立岩堀田35号甕棺墓出土鏡と同型鏡であるが、残念ながら中国北部産の鉛であることから、上記の裏付けは充分ではない。

何よりも問題を困難にしているのは、No.1の重圈彩画鏡に朝鮮系の鉛が使用されていることである。重圈彩画鏡は、鏡式からすると戦国式鏡であり、前漢時代に製作されたとしても、その製作年代は楽浪郡設置以前と考えられるからである。3号鏡以下の前漢鏡と四葉座飾金具は楽浪郡で製作されたとしても、重圈彩画鏡が朝鮮半島で製作された可能性は考えられず困惑する。現在のところは、解決を急がずに可能なかぎり測定例を増すことである。ただ、両者が採集可能な鉛の産地はないものであろうか。(柳田)

註1 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性、1九州」(『日本の考古学』Ⅲ、河出書房新社、1966)

2 森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」(『日本民族と南方文化』平凡社1966)

3 柳田康雄「伊都国の考古学——対外交渉のはじまり」(『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』上巻、吉川弘文館、1983)

4 橋口達也「甕棺の編年の研究」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI、中巻、福岡県教育委員会、1979)

圖 版



三雲遺跡中心部付近航空写真(南上空から)

○印は南小路竊棺墓の位置



南小路1·2号甕棺墓

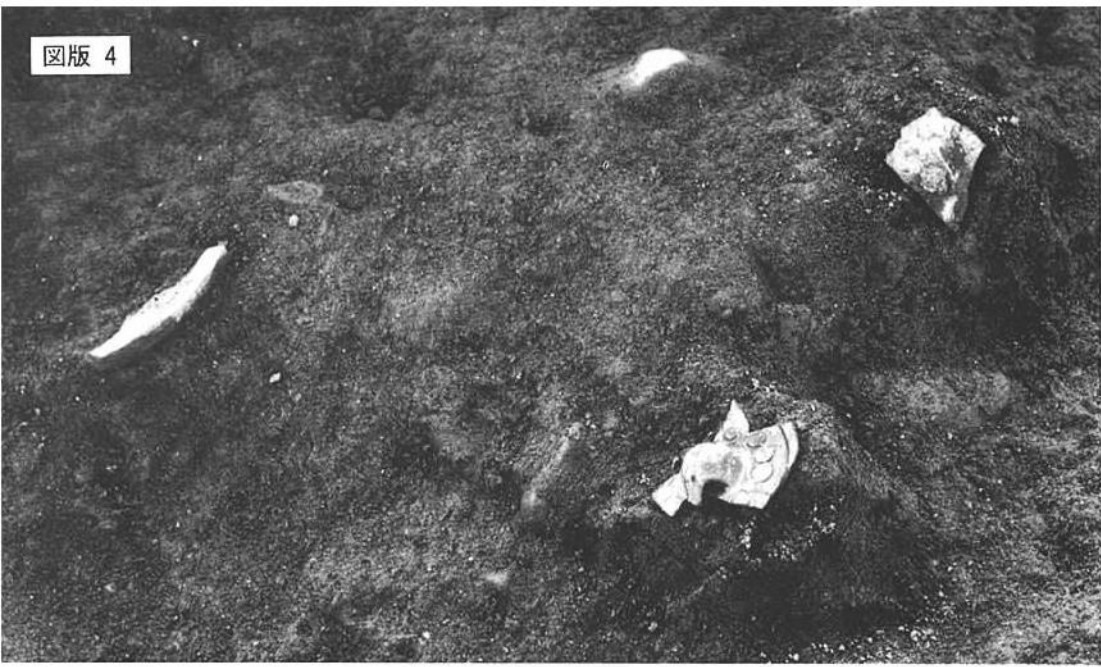


1

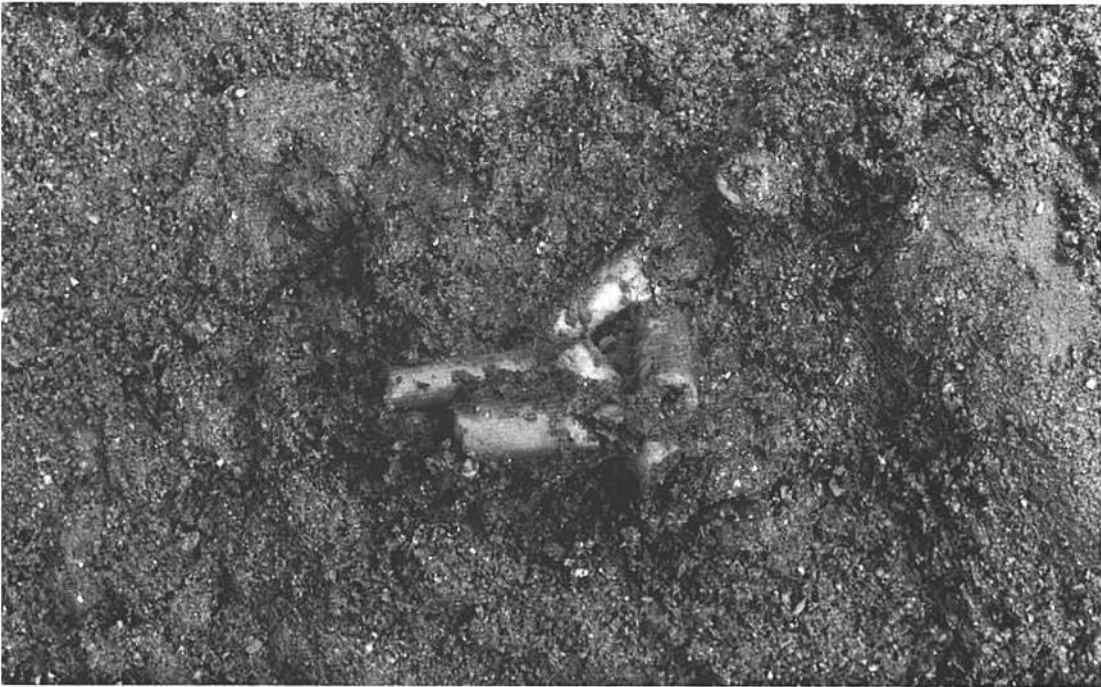


2

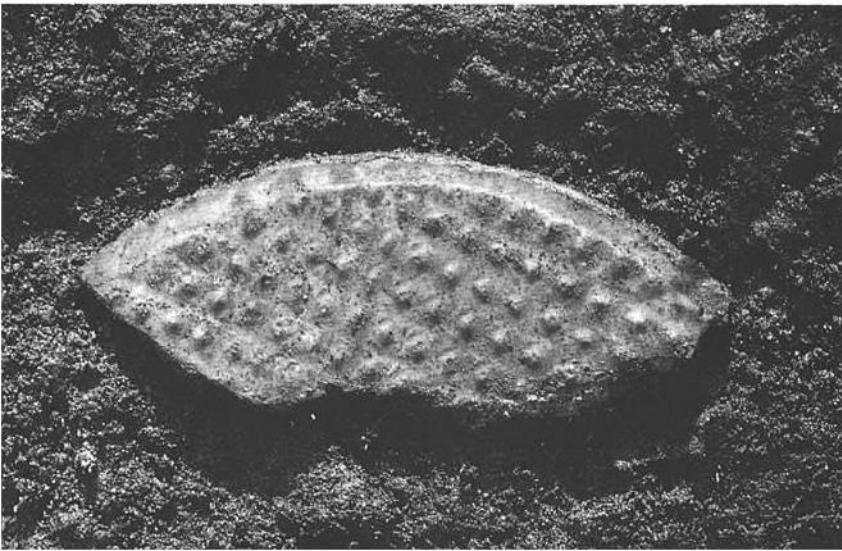
1 南小路1·2号甕棺墓 2 1号甕棺墓城



1



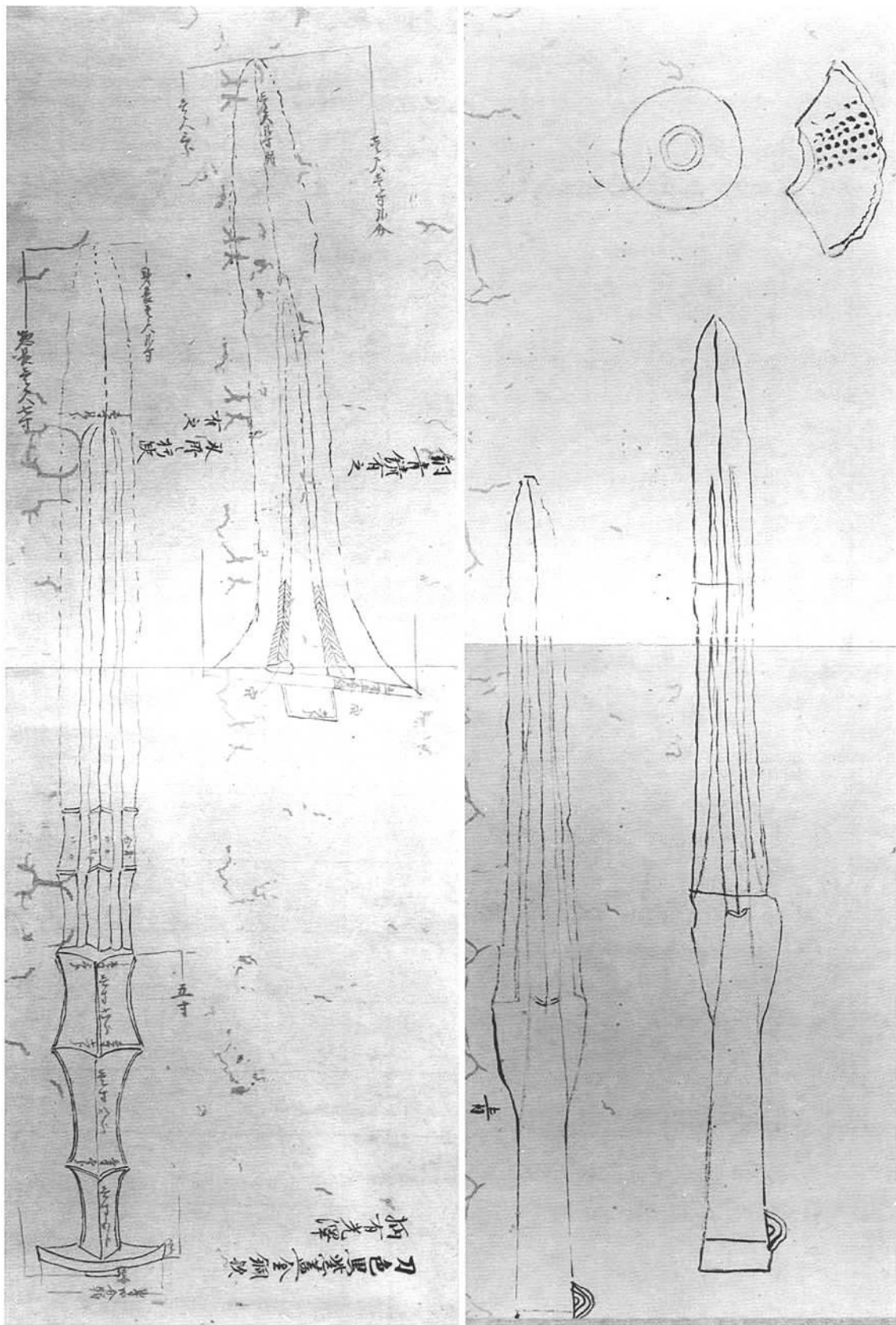
2



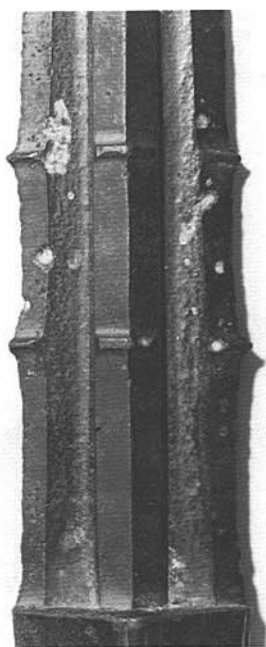
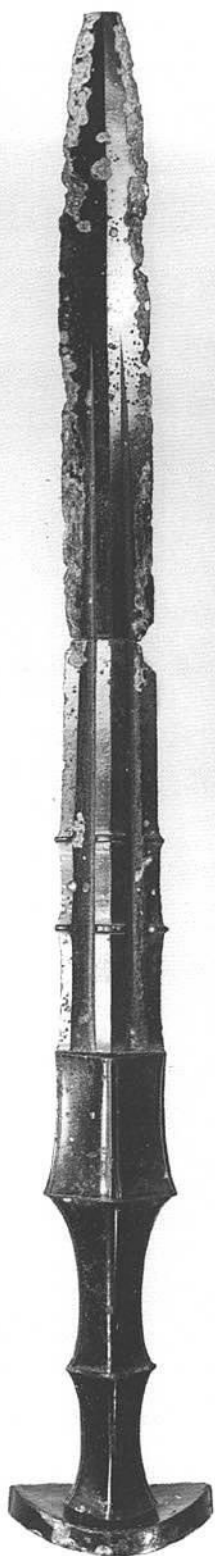
遺物出土状態

- 1 鏡片
- 2 ガラス管玉
- 3 ガラス璧

3



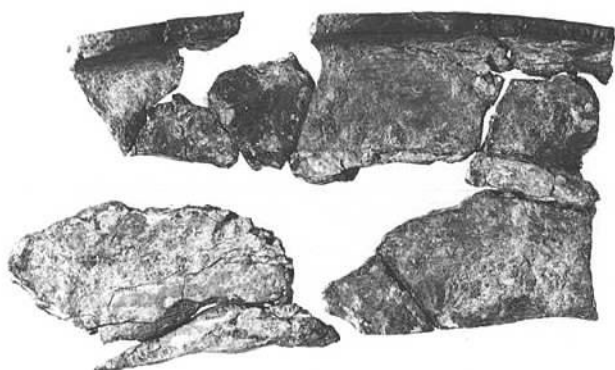
『青柳種信資料』の銅劍・銅戈・銅矛・ガラス璧の図



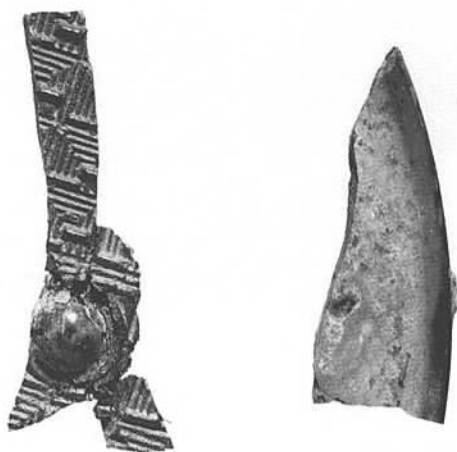
有柄中細銅劍(文政5年出土)



1



1



1 重圈彩画鏡(徑 27.3 cm)

2 四乳雷文鏡(徑 19.3 cm)

2



3 連弧文「清白」銘鏡(径 16.4 cm)
出土鏡縁と聖福寺蔵鏡



1 泉屋博古館藏鏡(鏡1)



2 三雲南小路出土聖福寺藏鏡



4 連弧文「清白」銘鏡②(径18.2 cm)



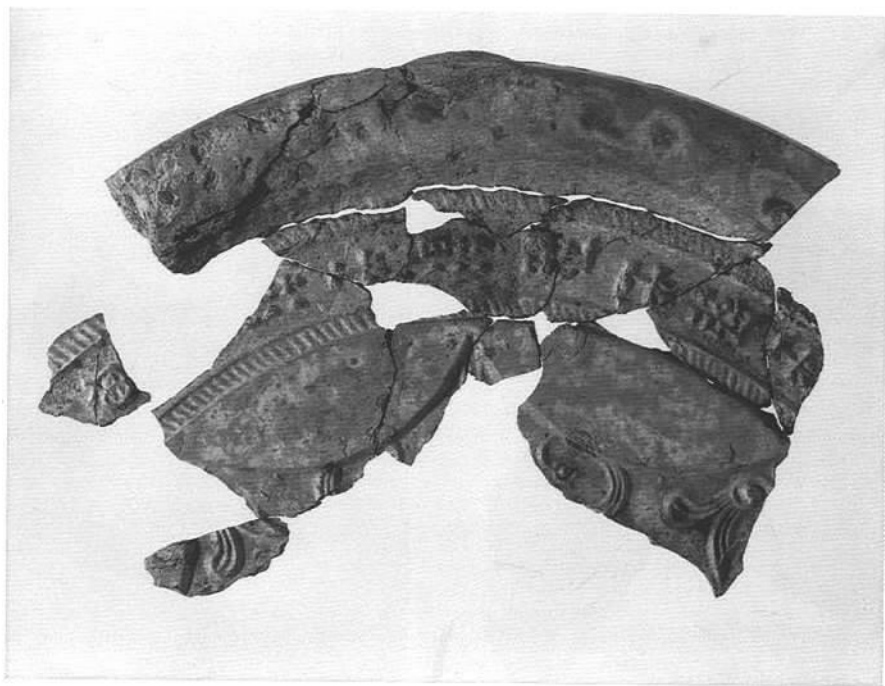
5 連弧文「清白」銘鏡③(径 16.4 cm)



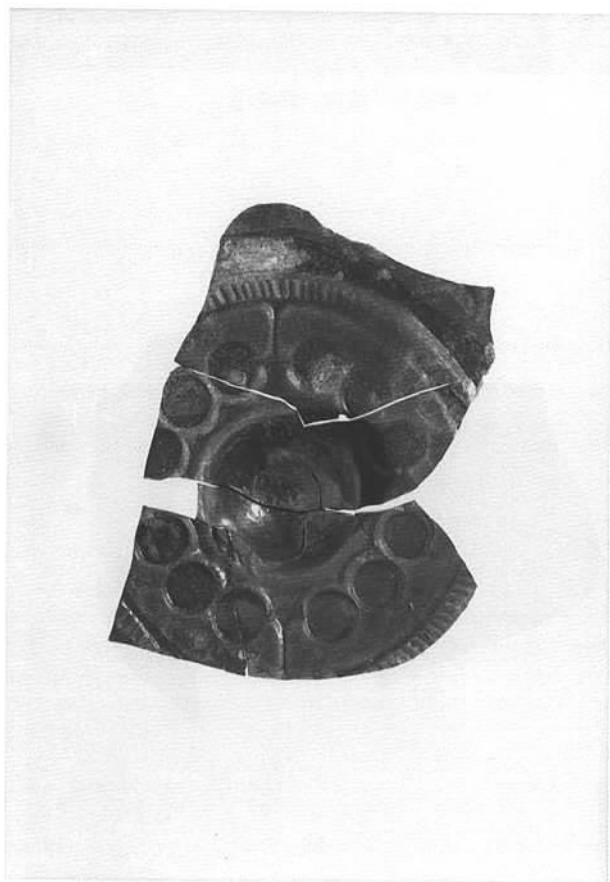
立岩堀田 35 号甕棺出土鏡(径 18.0 cm)



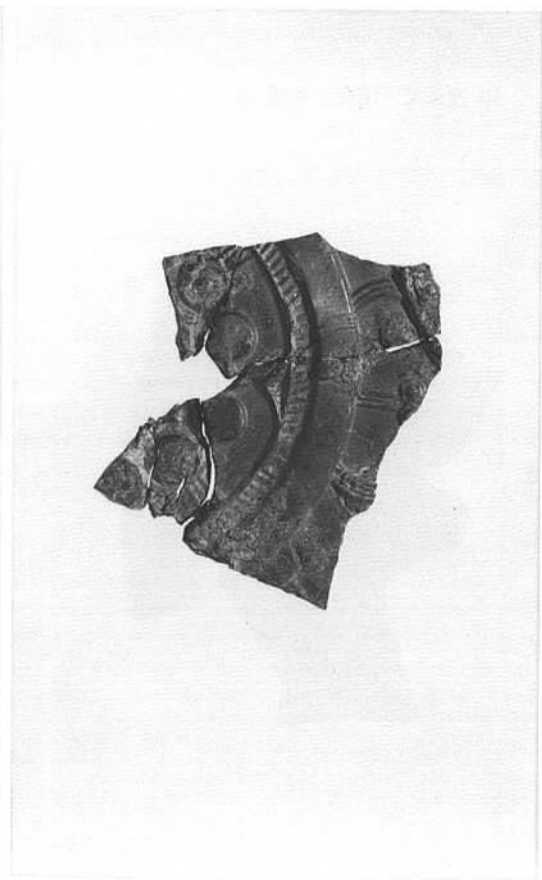
6 連弧文「清白」銘鏡④(径 18.0 cm)



7 連弧文「清白」銘鏡⑤(徑18.8cm)



8 連弧文鏡⑥

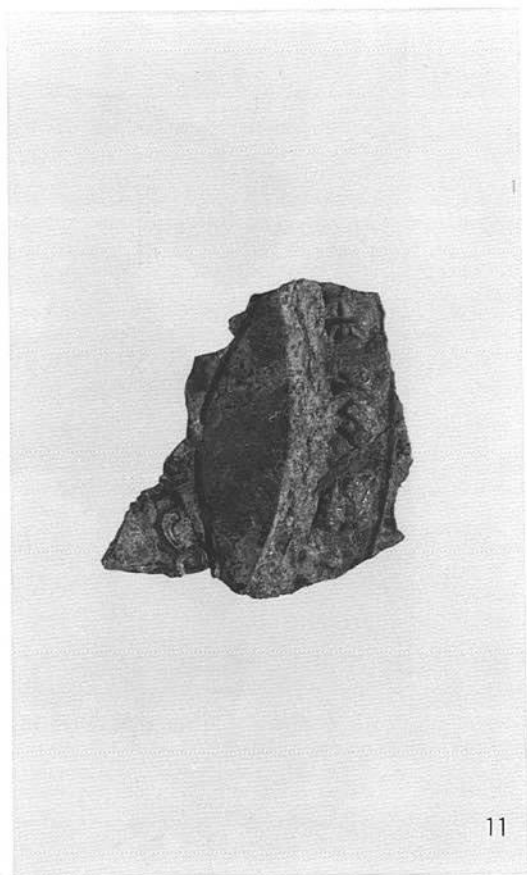


9 連弧文鏡⑦



10

10 連弧文「清白」銘鏡⑧



11

11 連弧文「清白」銘鏡⑨



12

12 連弧文「清白」銘鏡⑩



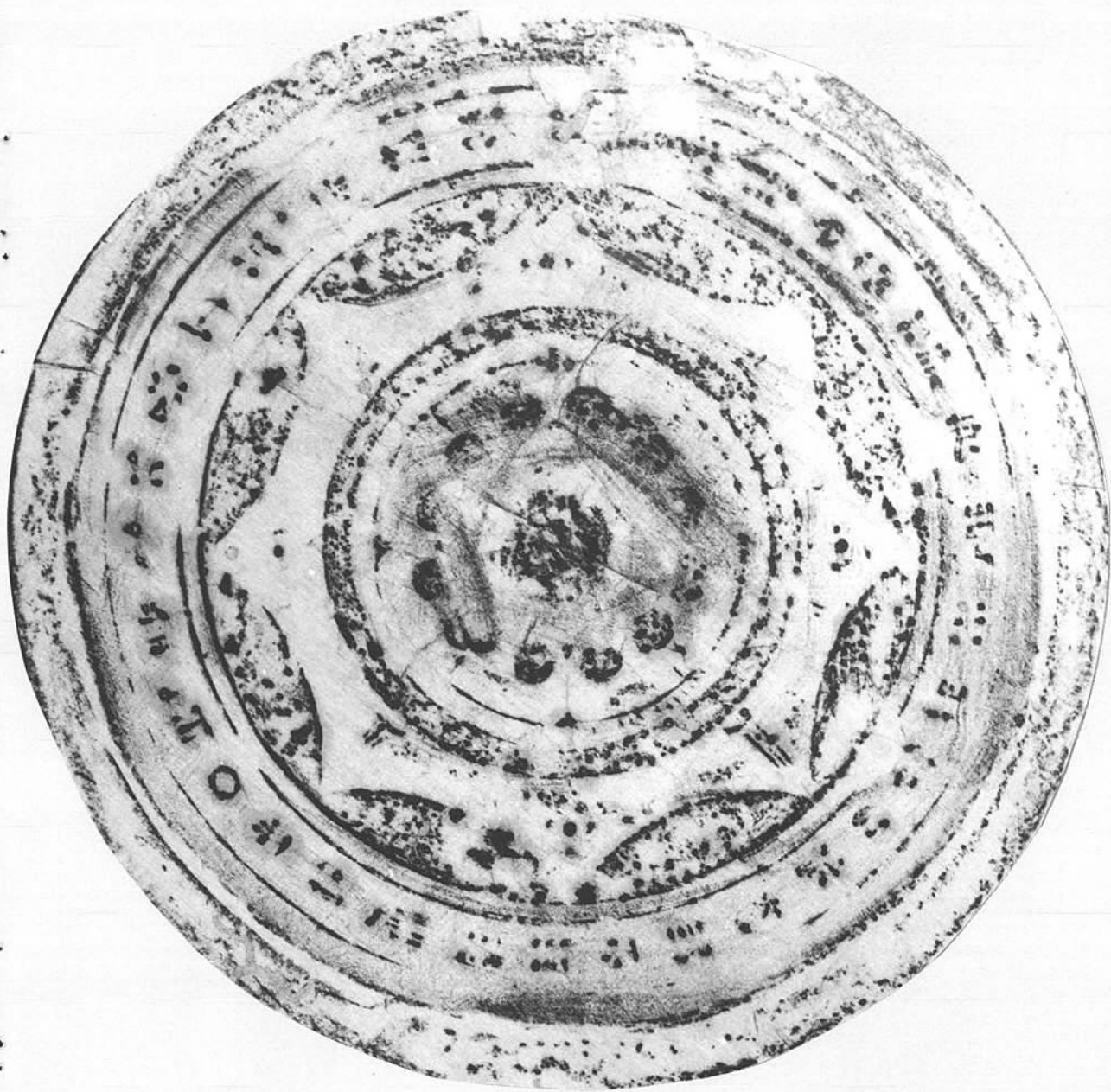
13

13 連弧文「清白」銘鏡⑪

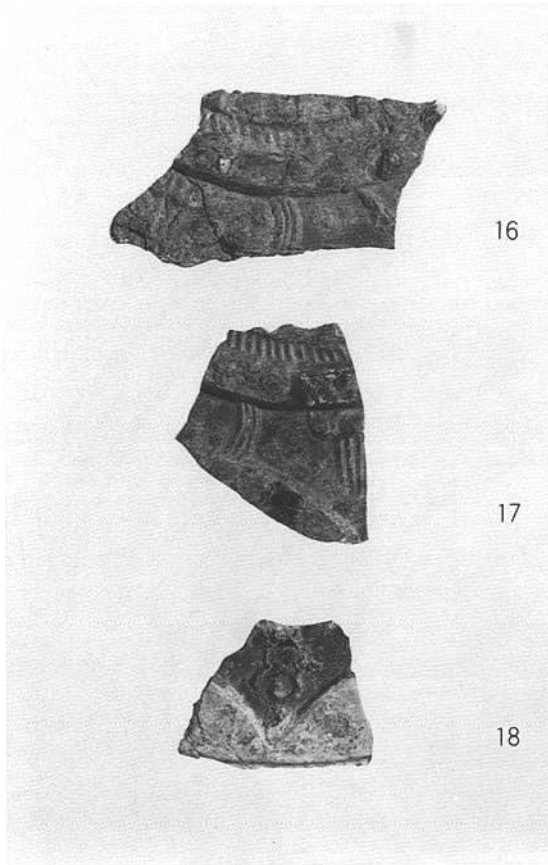


14

14 連弧文鏡⑫



15 連弧文「清白」銘鏡⑬(『青柳種信資料』)



16~18 連弧文鏡⑭~⑯



19

19 重圈斜角雷文帶「精白」銘鏡



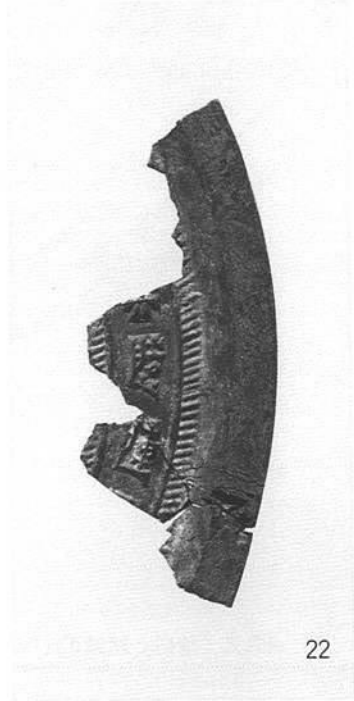
20

20 重圈「清白」銘鏡①



21

21 重圈「清白」銘鏡②



22

22 「清白」銘鏡①



23



24



25

23・24 「清白」銘鏡②・③

25 鏡縁①



26



27



28



29



33



30



31



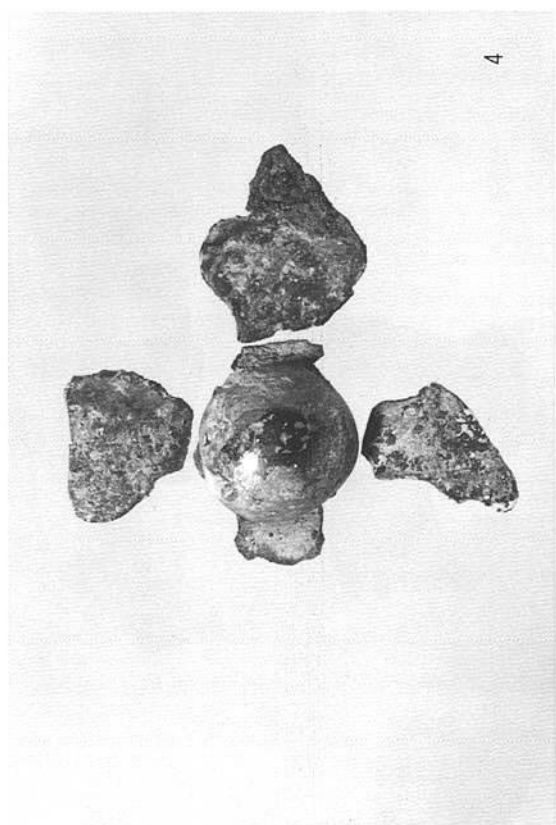
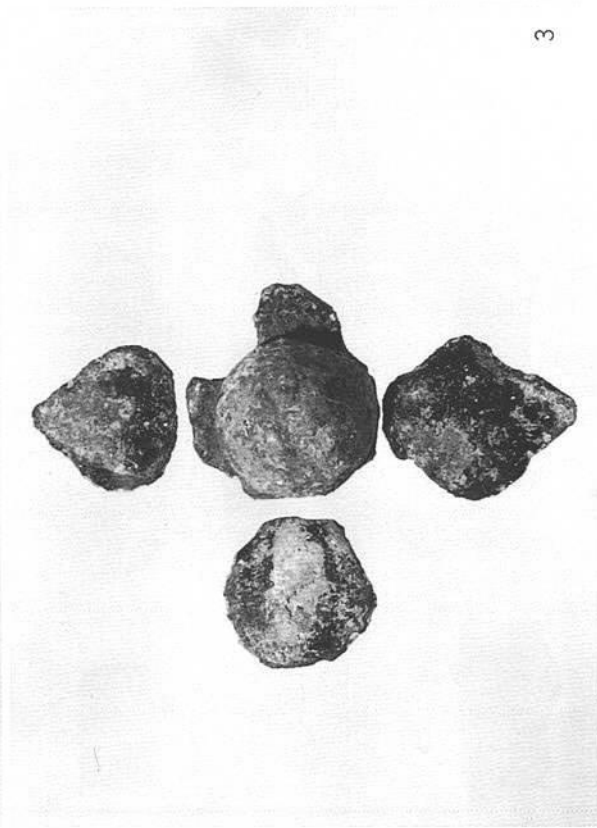
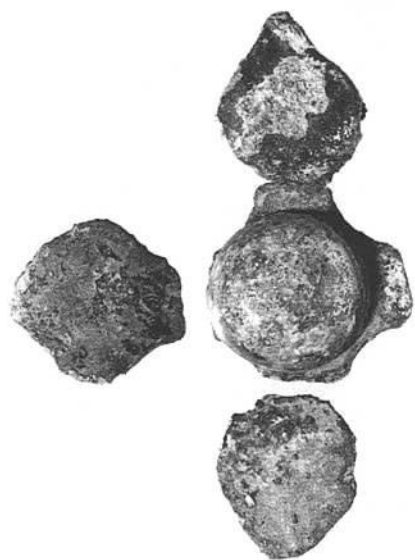
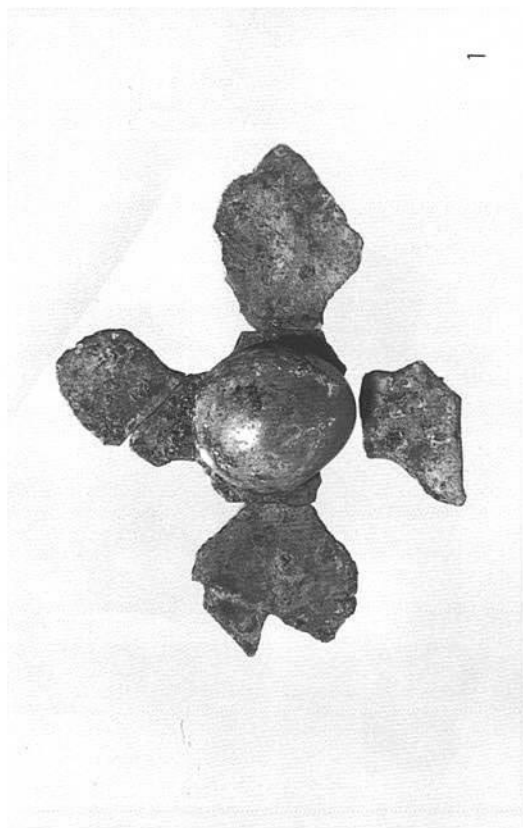
32



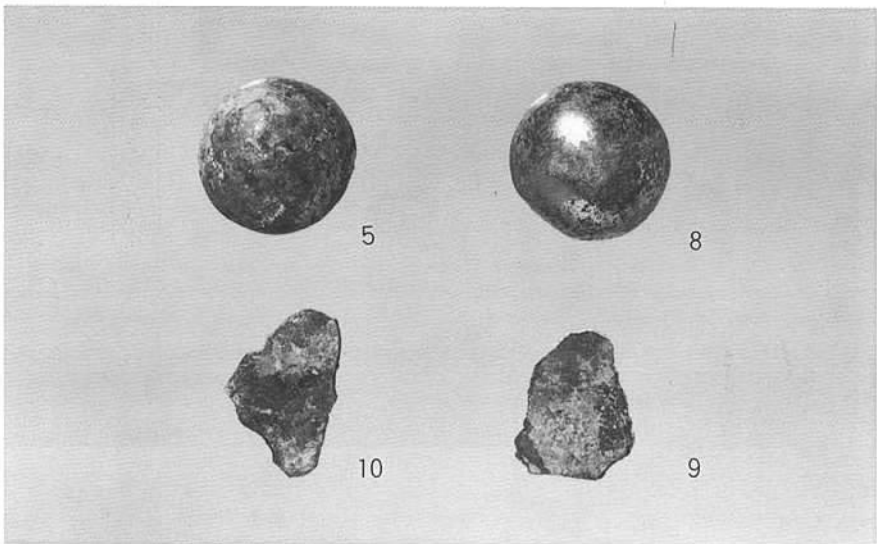
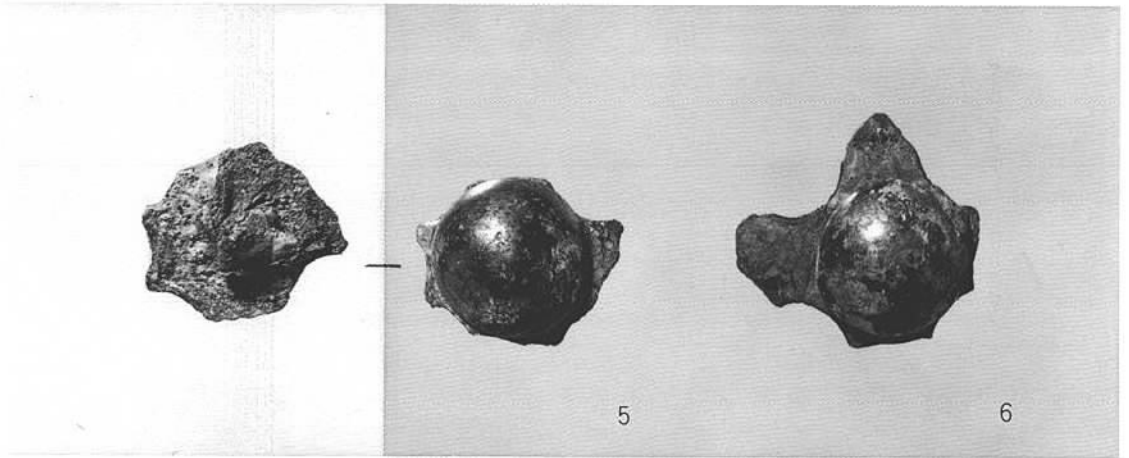
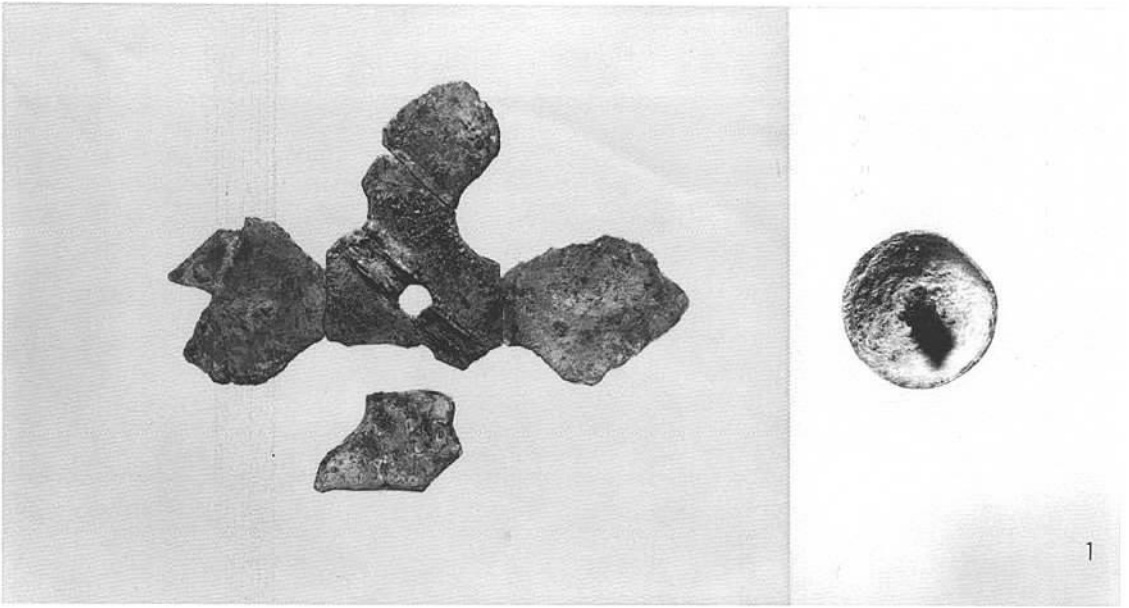
34

26~32 鏡縁②~⑧

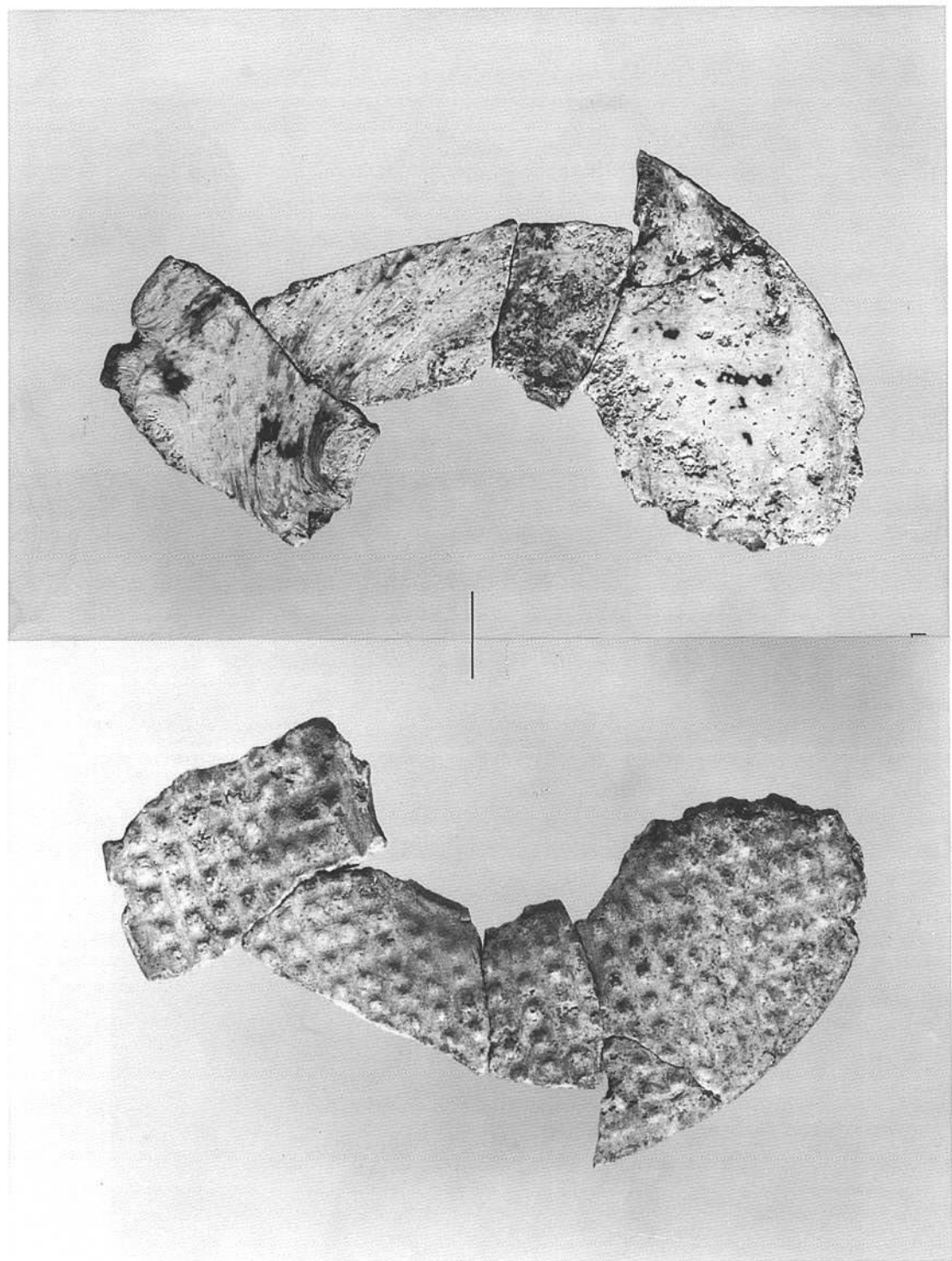
33・34 鏡鈕①・②



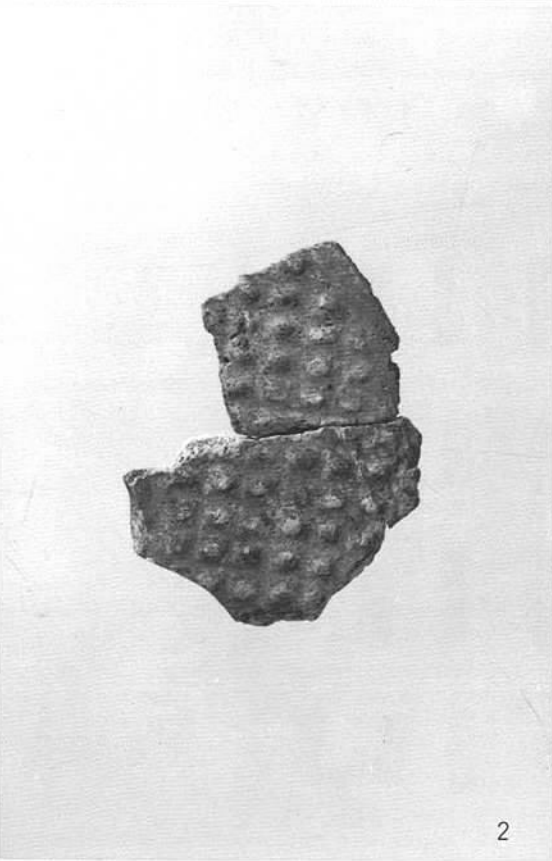
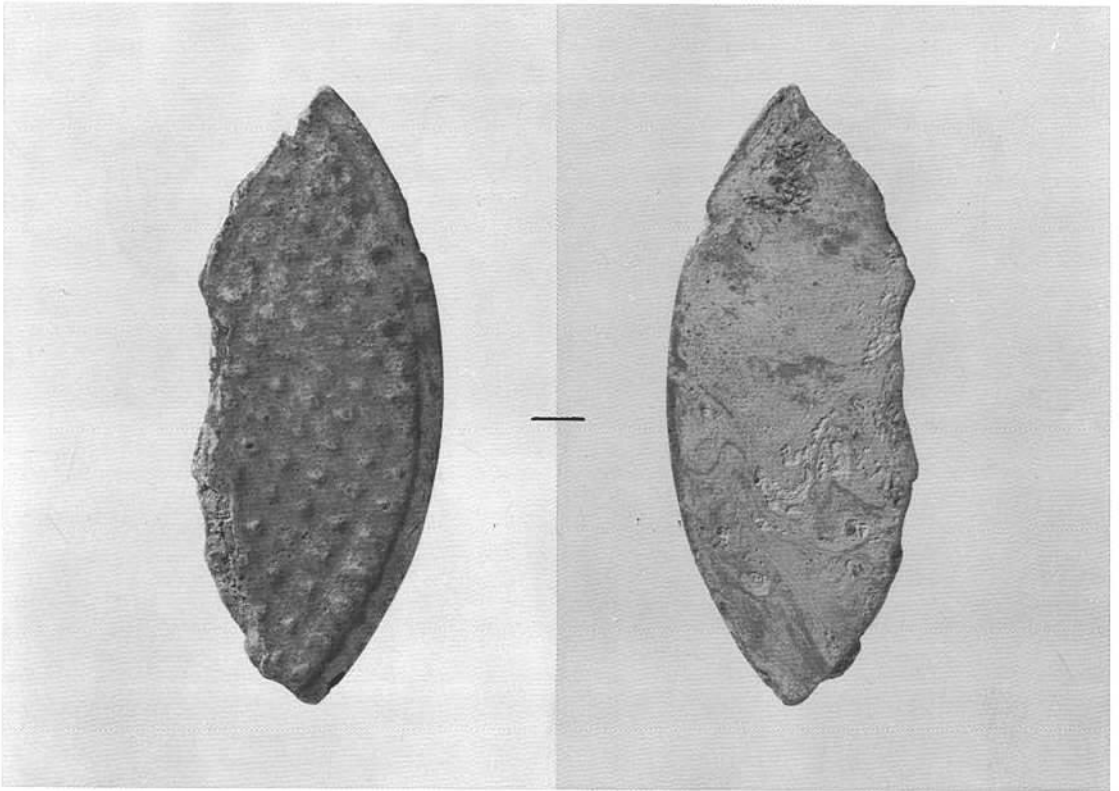
1号甕棺出土金銅四葉座飾金具(実大)



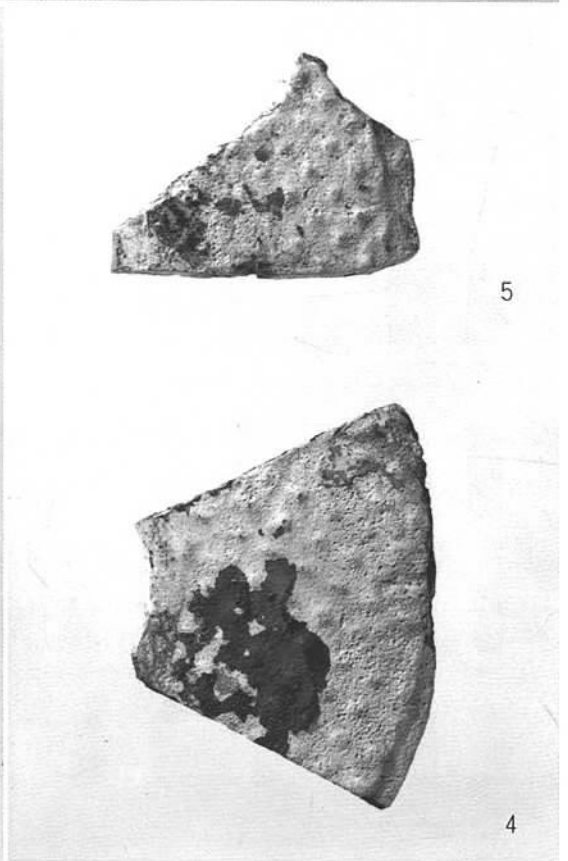
金銅四葉座飾金具 (実大)



1号羨棺出土ガラス壺(径12.3cm)



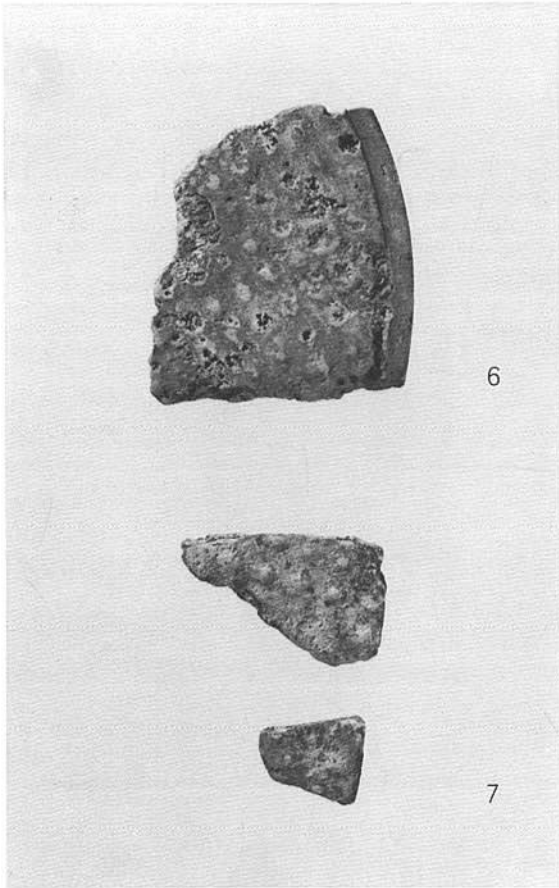
2



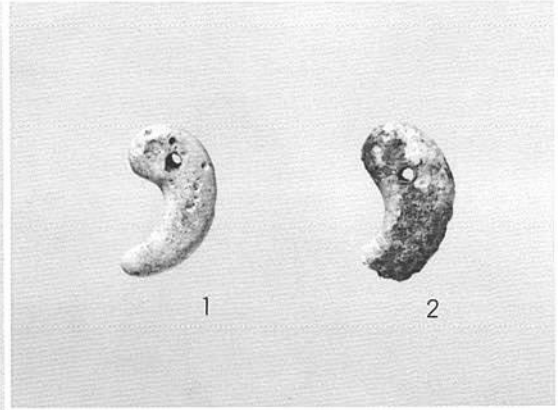
5

4

ガラス璧(実大)



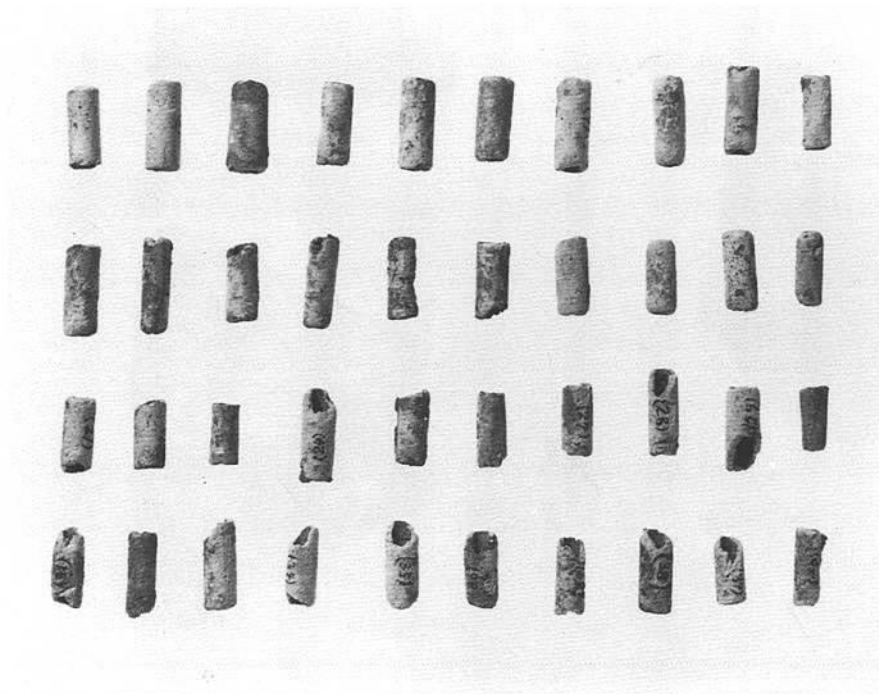
1 ガラス璧(実大)



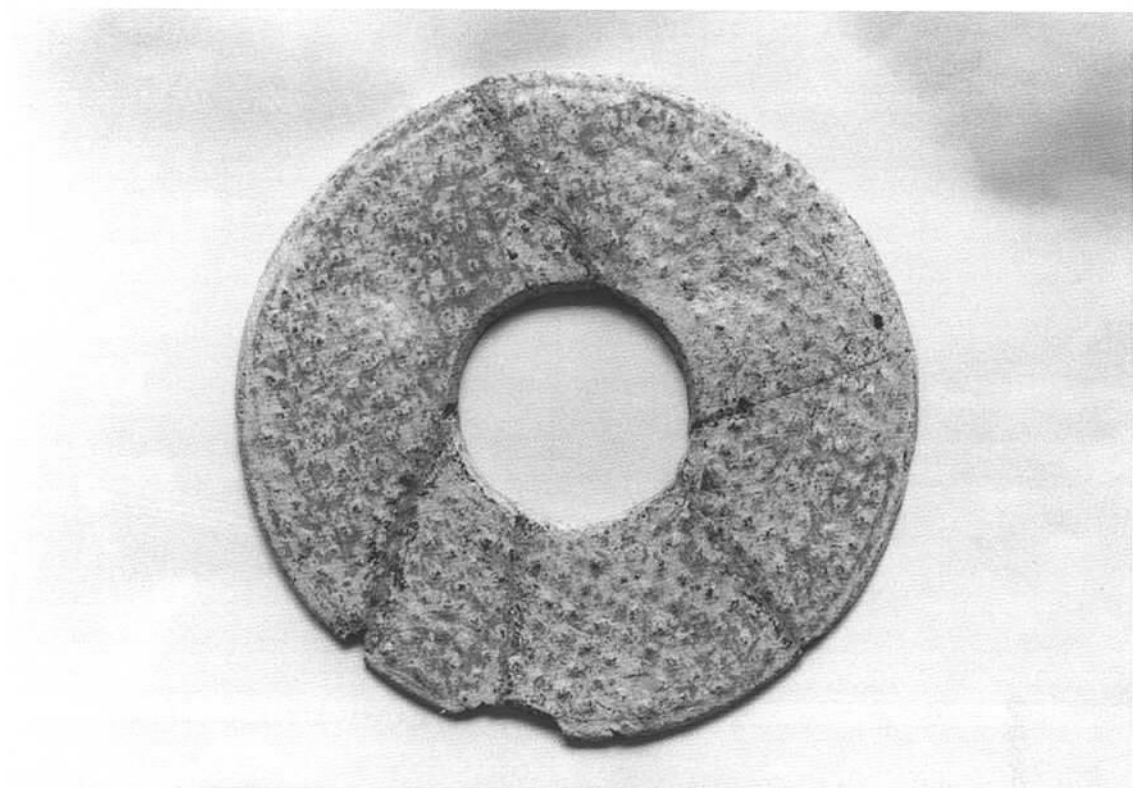
2 ガラス勾玉(実大)



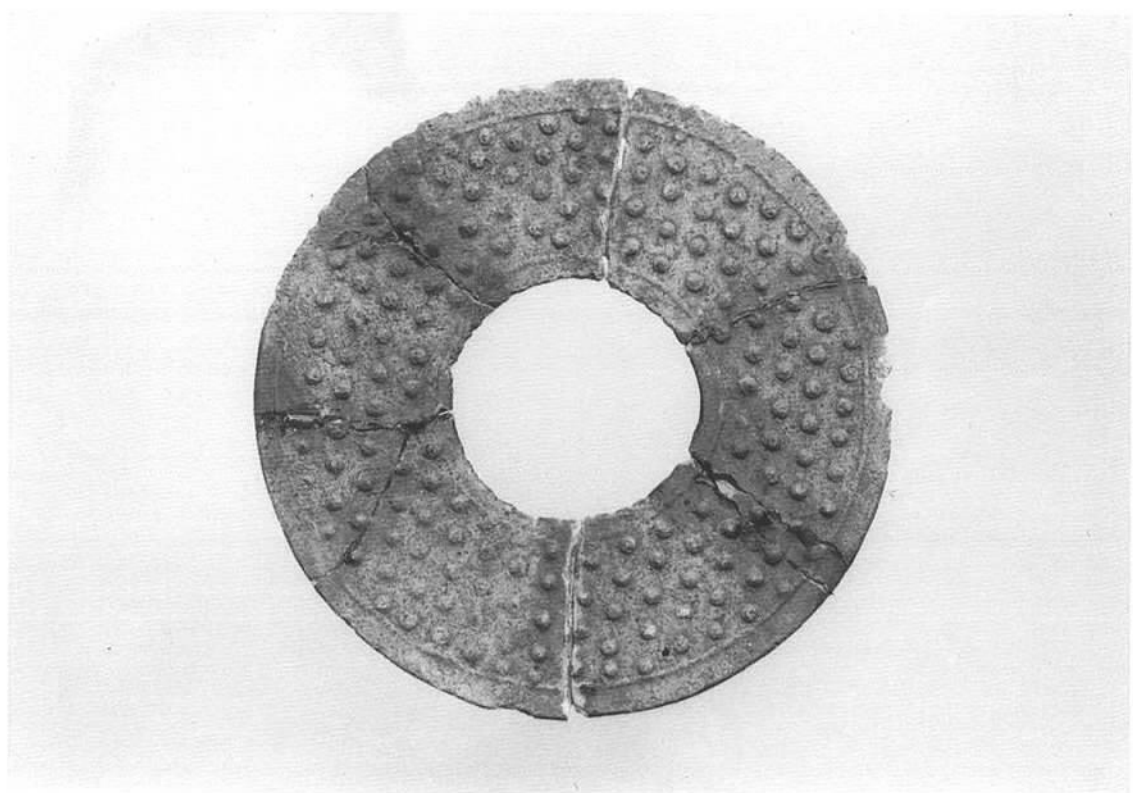
4 ガラス小玉・鉄片(実大)



3 ガラス管玉(実大)



1 ガラス璧(東京国立博物館蔵)



2 ガラス璧(京都大学考古学陳列館蔵)



1 南小路2号甕棺墓(南から)

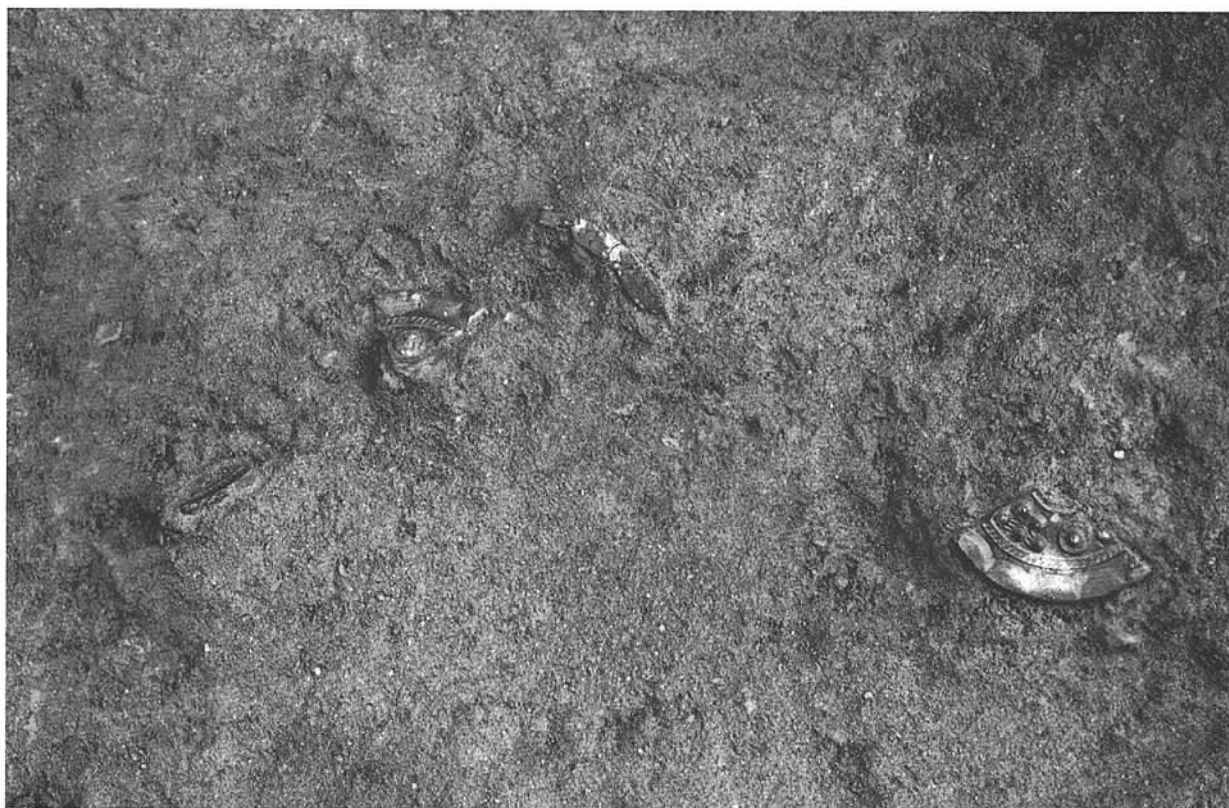
2 2号甕棺墓(西から)



2号葬箱墓上墓版



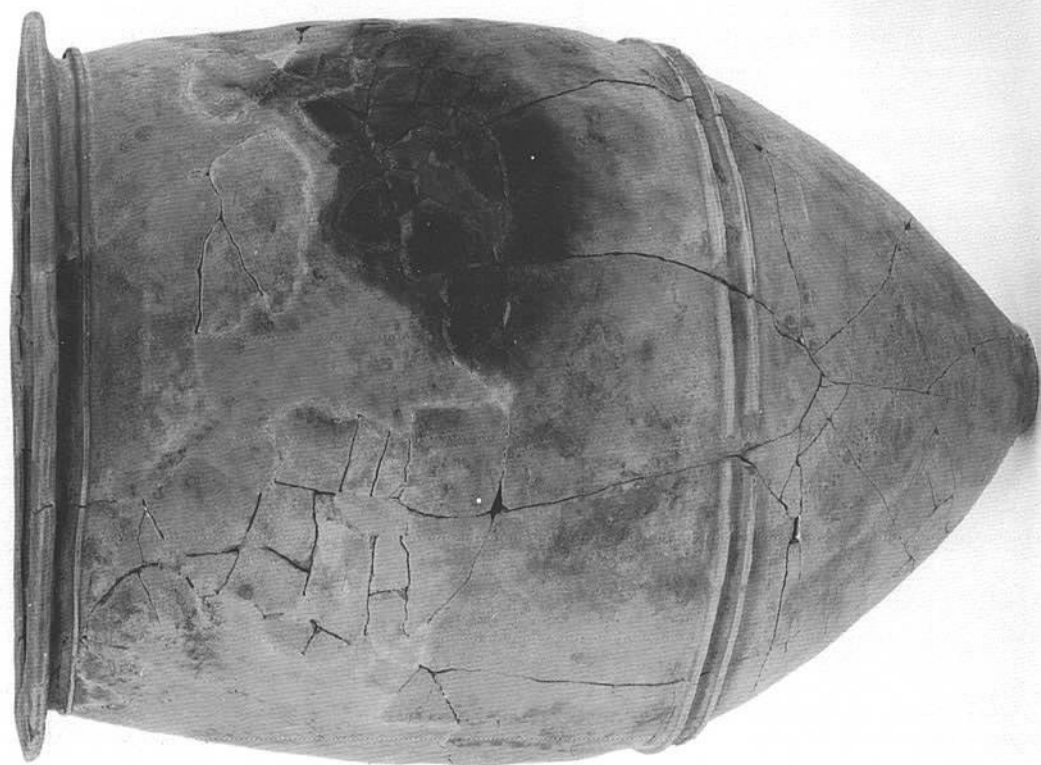
2号甕棺墓の鏡と勾玉出土状態



墓城床面の鏡片出土状態



2 上甕



1 2号甕棺の下甕



1



4



2



5



3



6

2号甕棺出土前漢鏡(実大)

1 星雲文鏡

2~5 連弧文「昭明」銘鏡

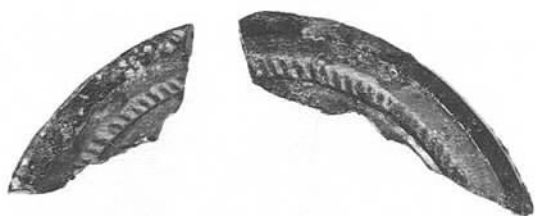
6 重圈「昭明」銘鏡



1 連弧文「昭明」銘鏡(東京国立博物館蔵)



2 重圈「昭明」銘鏡(五島美術館蔵)



7



10



8



11



9



12

7~12 連弧文「日光」銘鏡(実大)



13



14



15



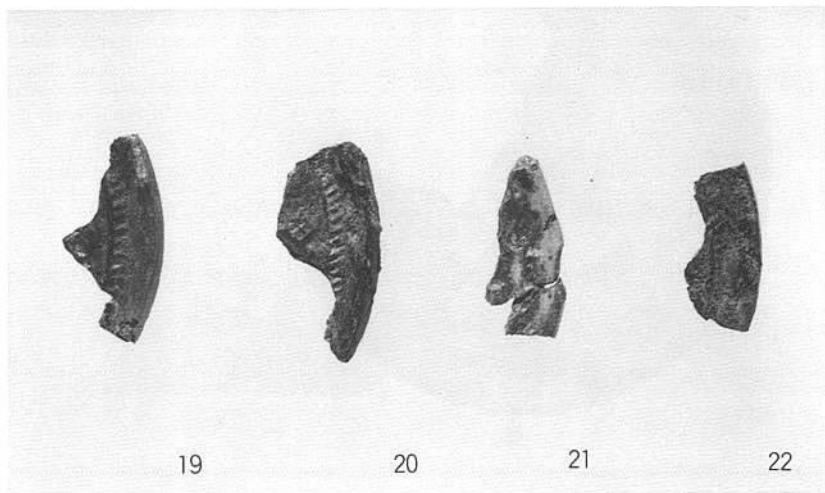
16



17



18



19

20

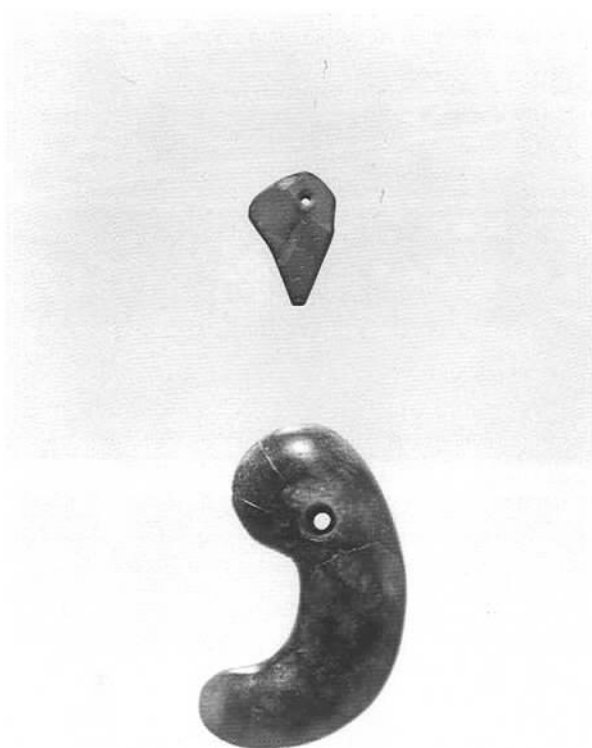
21

22

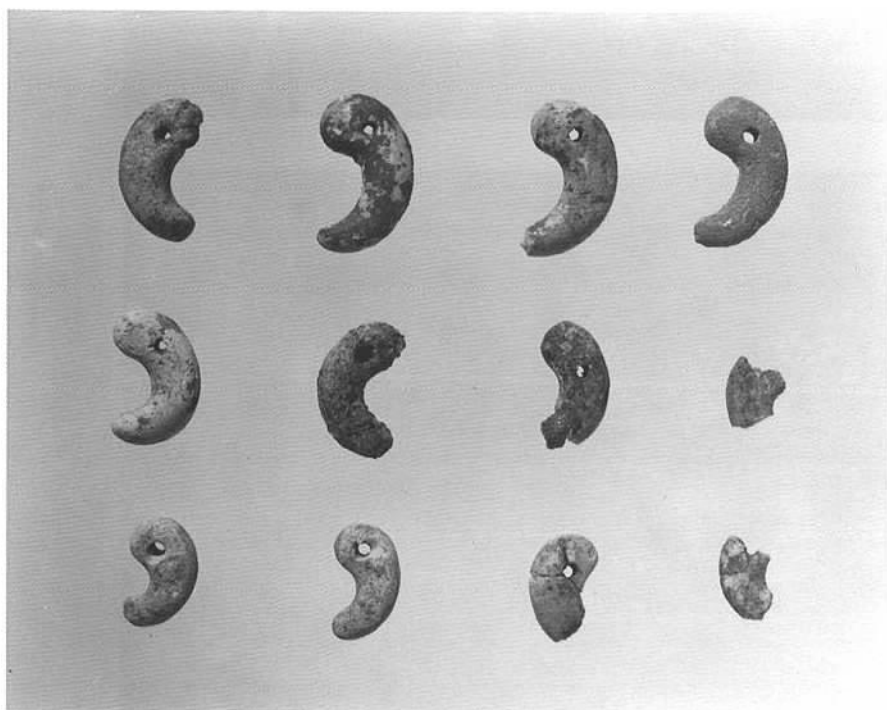
13~22 連弧文「日光」銘鏡(実大)



2 ガラス製垂飾(2倍)



1 ガラス製垂飾と硬玉勾玉(実大)



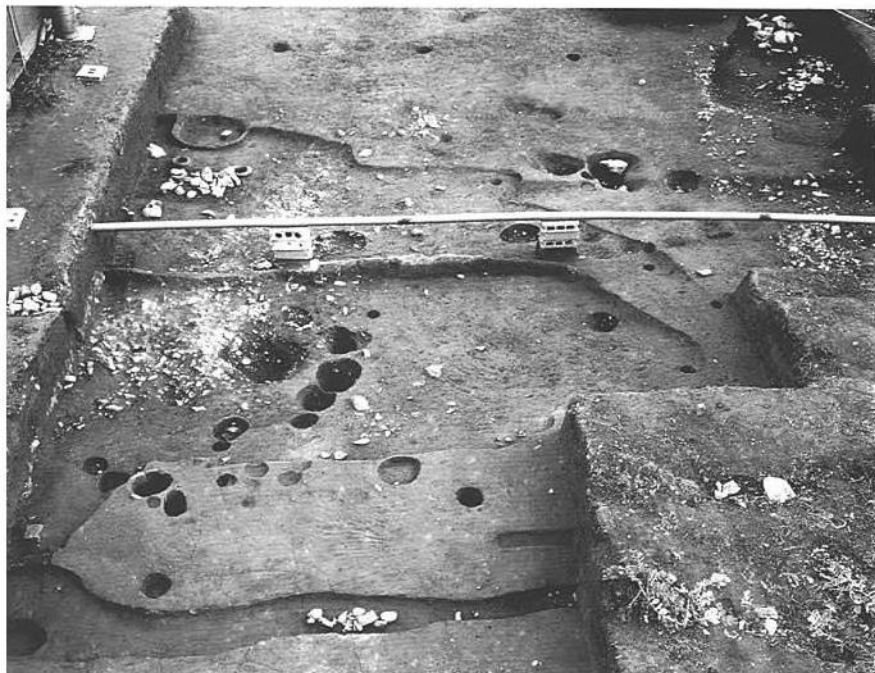
3 ガラス勾玉(実大)



1

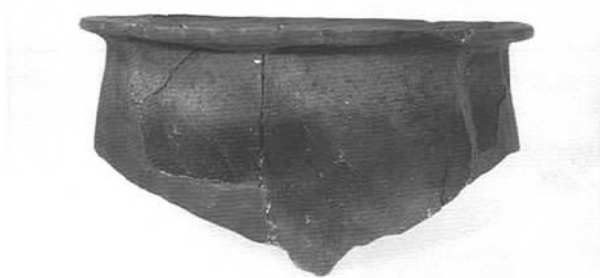


2



3

- 1 1・2号甕棺墓
と祭祀溝
- 2 祭祀溝
- 3 祭祀溝・大溝・小溝



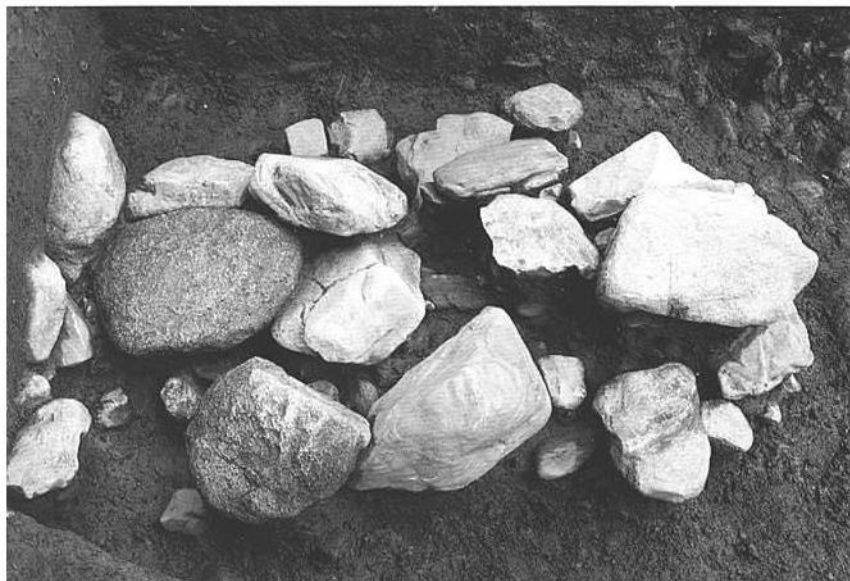
祭祀溝と大溝出土土器



1

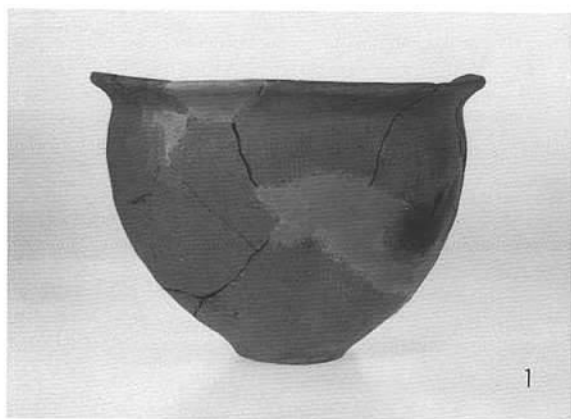


2

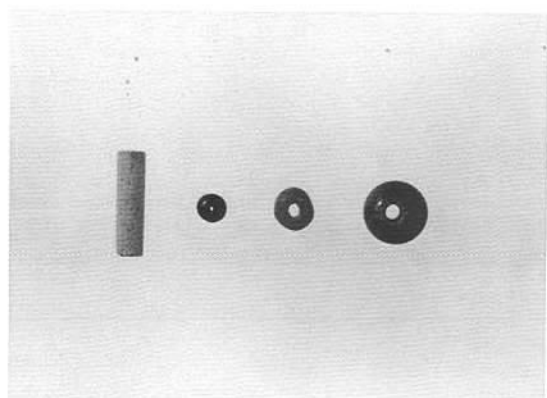


3

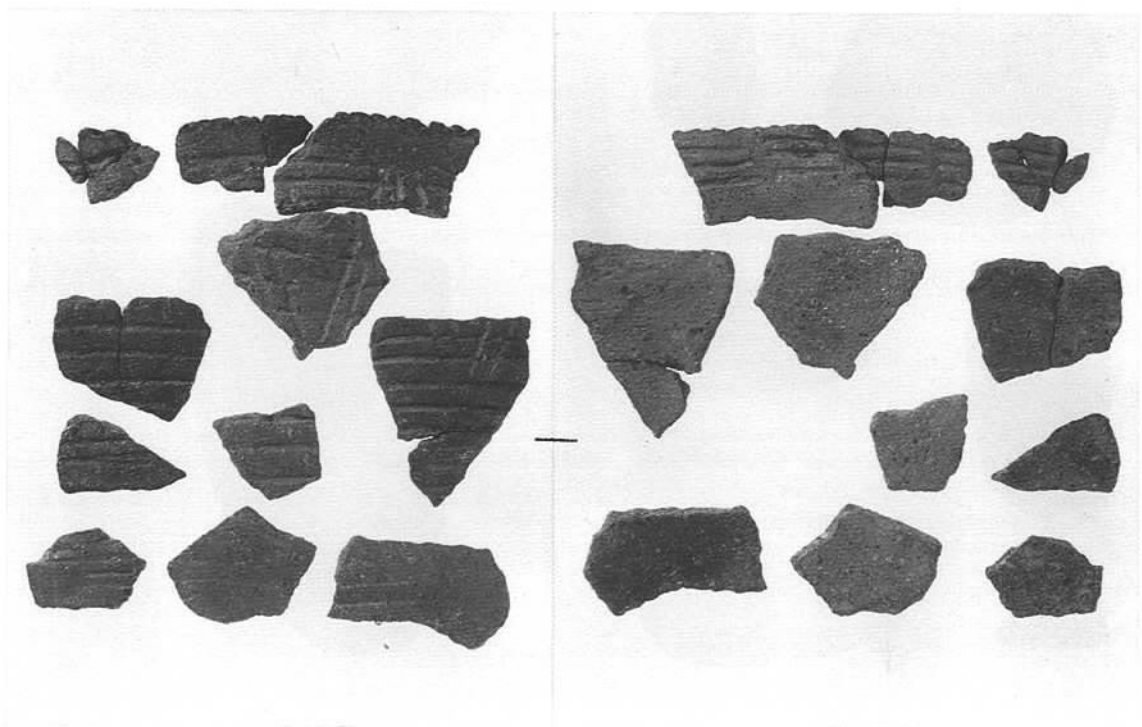
- 1 南小路 I-6 土塚
- 2 土器出土状態
- 3 石組



1 土城出土土器



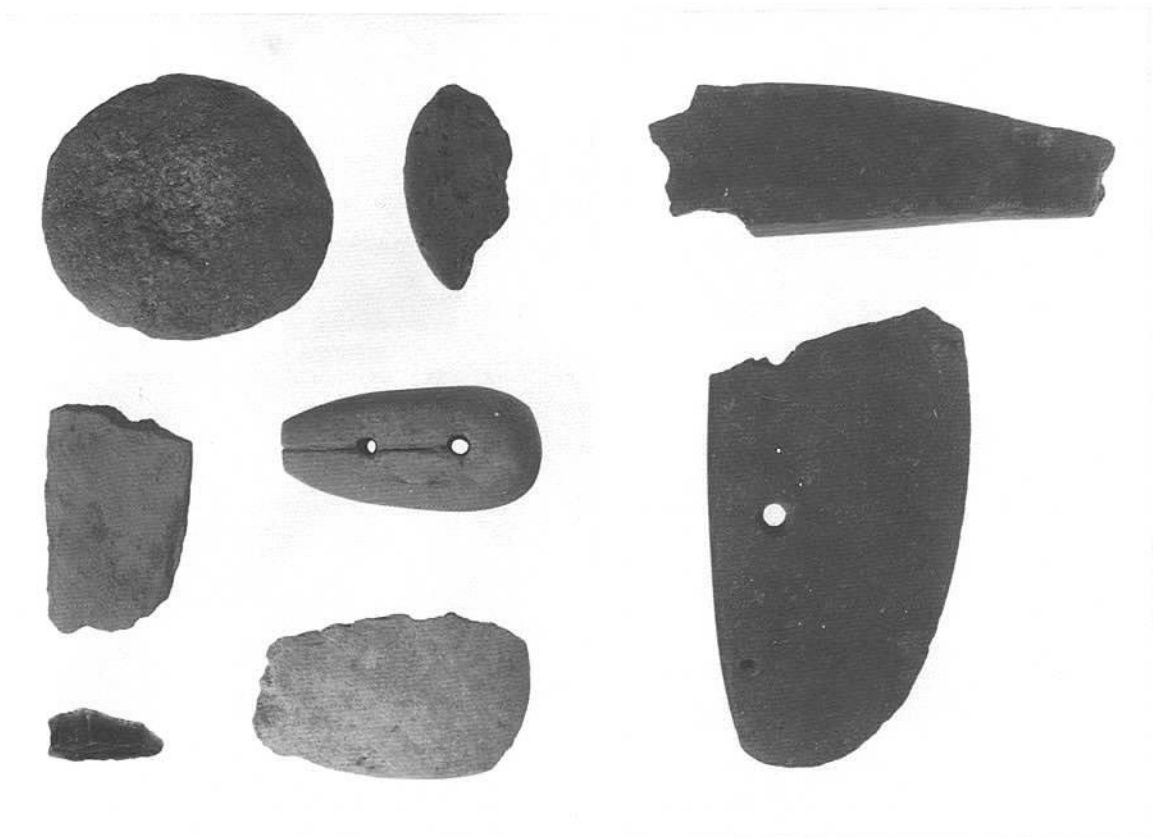
3 I-6·7 出土玉類



2 南小路I-6 出土曾畑式土器

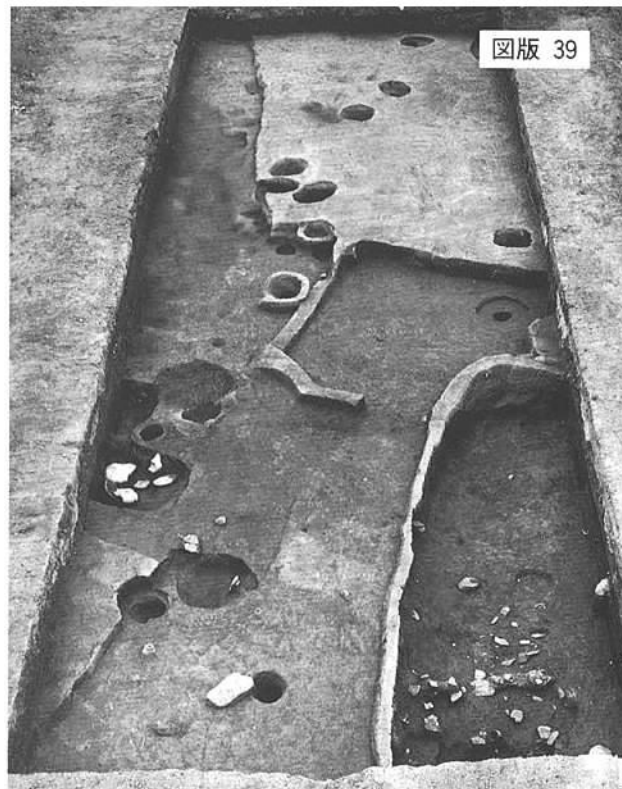
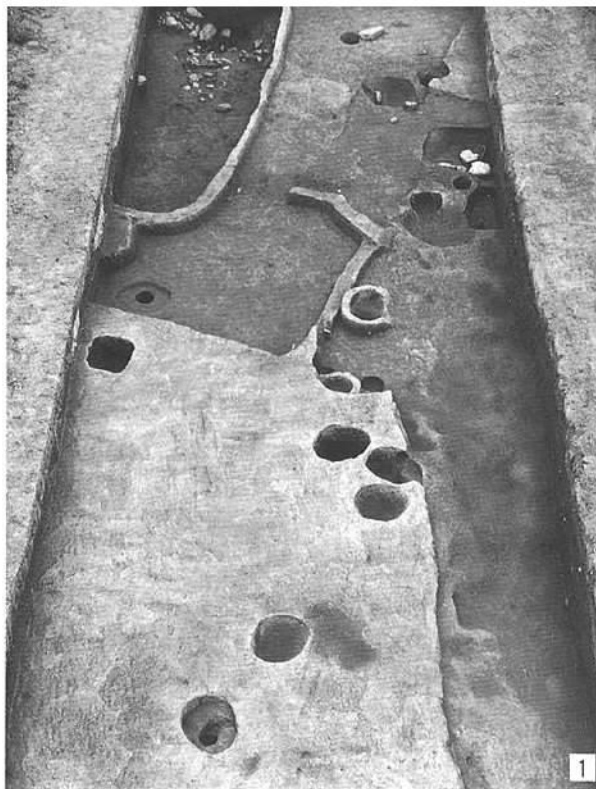


2 南小路 I - 8 a トレンチ



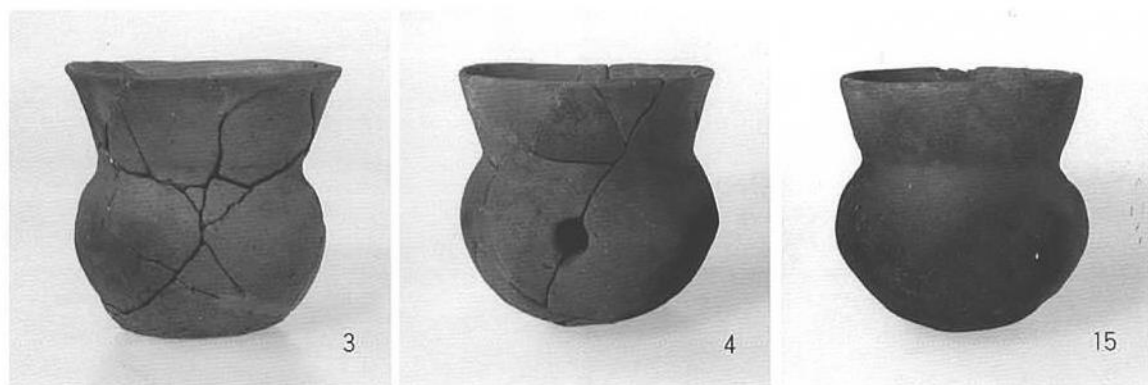
1 I - 6・7 出土石器

3 I - 8 出土石器

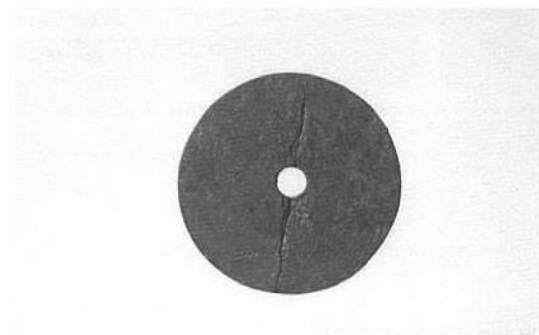


- 1 南小路 I-9 トレンチ(西から)
- 2 トレンチ(東から)
- 3 1~3号住居跡(南から)
- 4 4号住居跡内土城

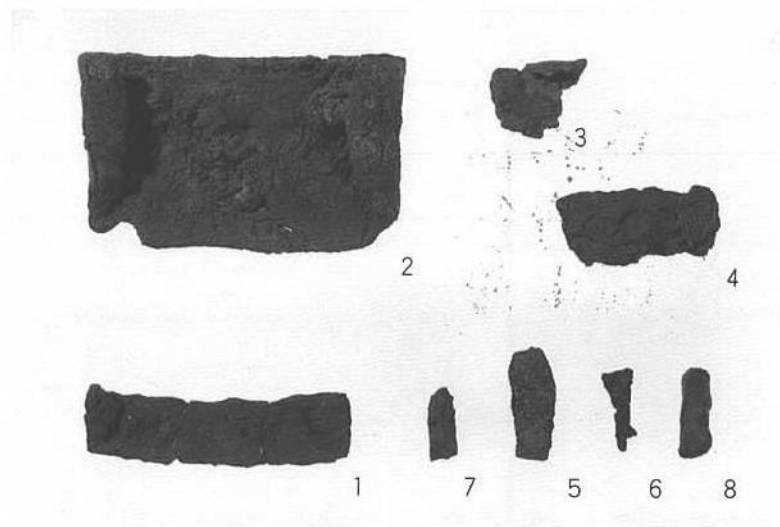




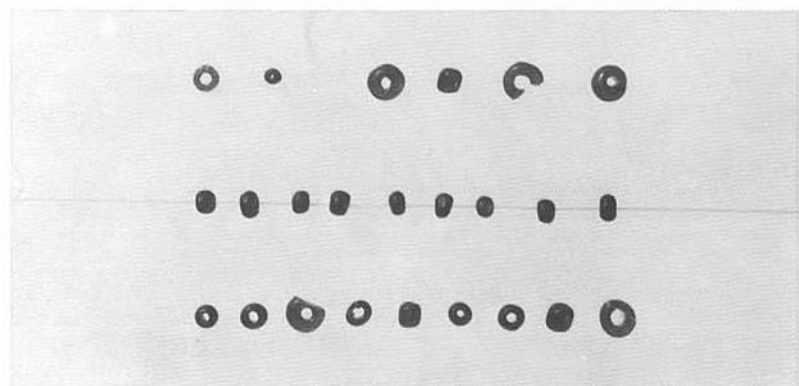
1



2



3



4

1 南小路I-9出土土器 2 石器 3 鉄器 4 玉類

福岡県文化財調査報告書

第 69 集

昭和60年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園 7-7

印刷 株式会社 天地堂印刷製本所
北九州市小倉北区大手町10-18